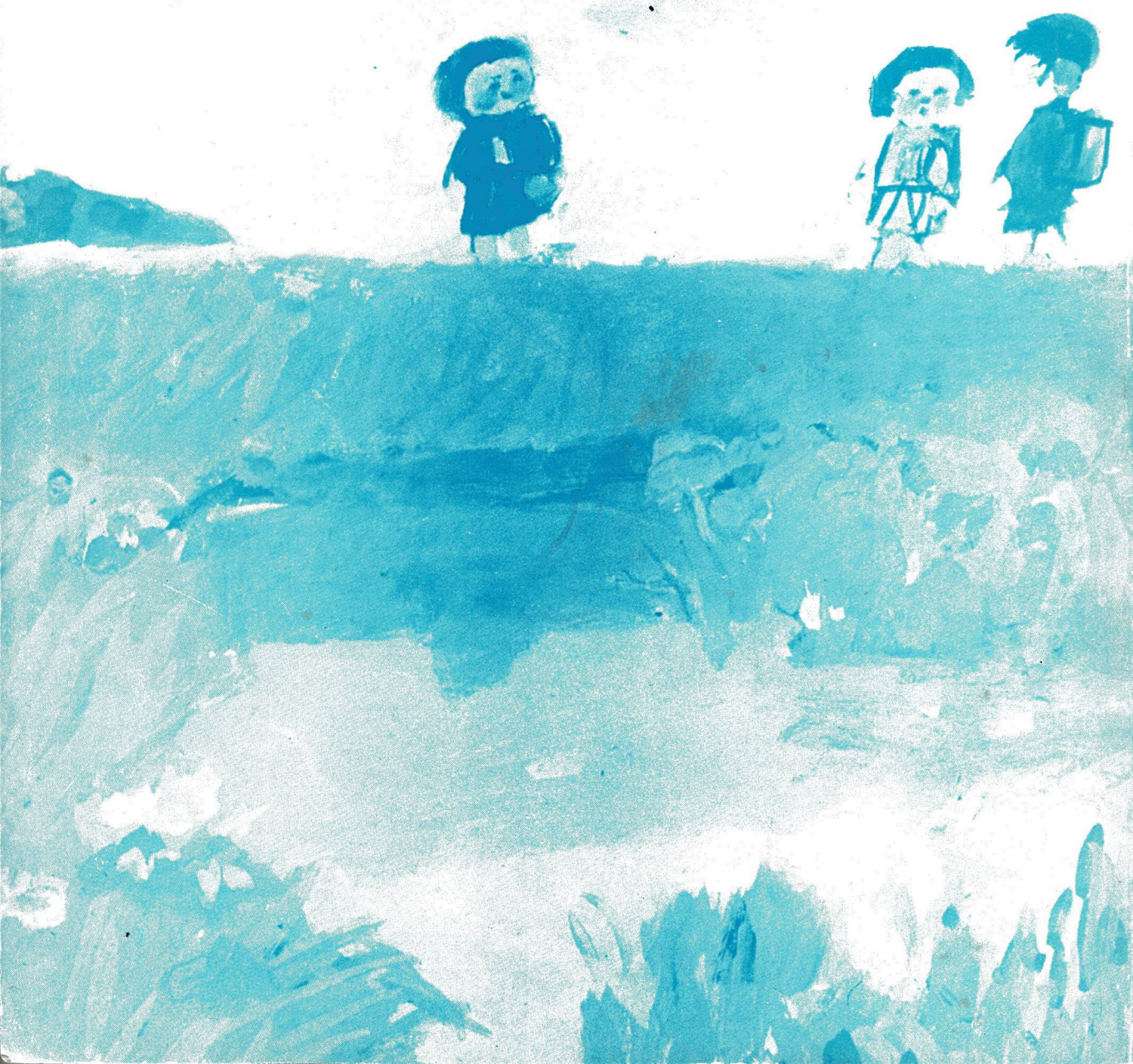
むらおか



目次

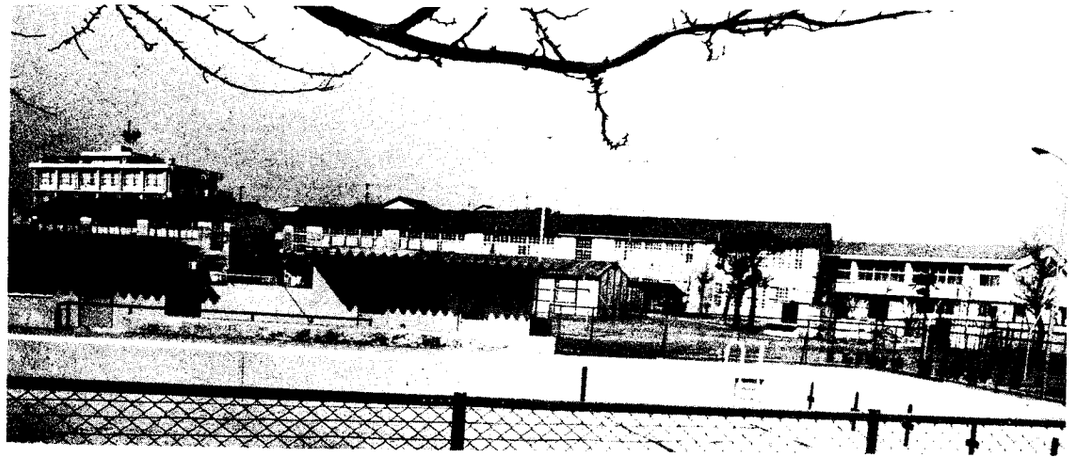
むらおかのあゆみ……一
一、村岡の生いたち
二、大むかしのころ
三、奈良・平安のころ
四、鎌倉・室町・戦国のころ
五、江戸のころ
六、明治・大正のころ
七、昭和のはじめのころ
八、戦争中のころ
九、終戦後の村岡
十、これからの村岡

学校のあゆみ……五五
一、学校のできるまで
二、明治のころの学校
(一) 開校のころ
(二) 開校後のようす
三、大正のころの学校
四、昭和のはじめの学校
五、戦争中の学校
六、戦後の学校
(一) 新しい学校づくり
(二) 大きくのびる学校

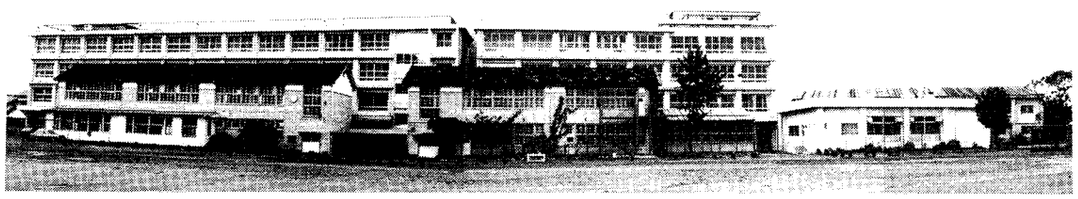
むらおかのくらし……九五
一、村岡の地名のおこり
二、きもの・たべもの・すまい
三、年中行事
四、子どもの四季のあそび

むらおかの史蹟……一一六
むらおかの石仏……一二六
むらおかの農具……一二七
「むらおか」発刊にあたって……一二八
年表……一二九

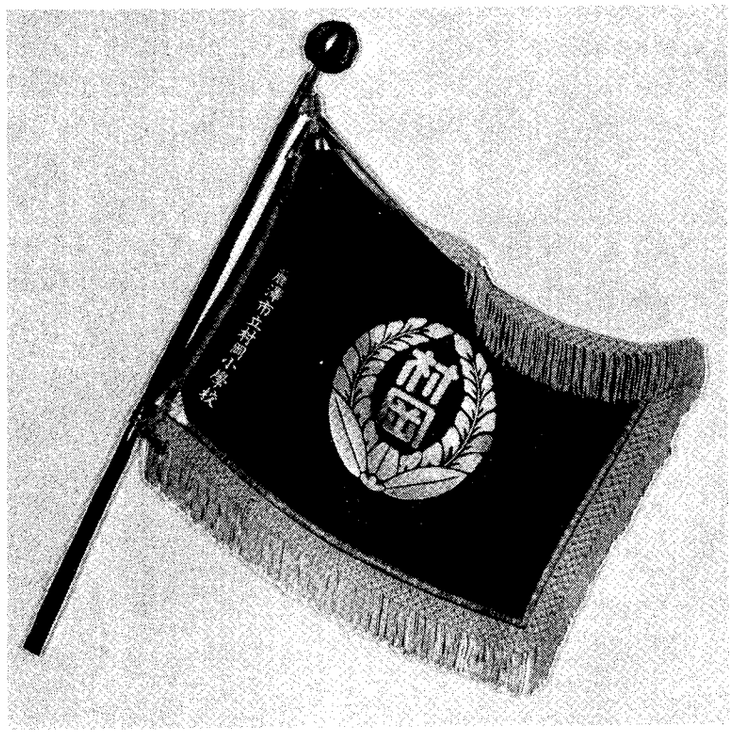
題字　津田辰雄先生
表紙絵　山下大五郎氏



昭和48年　　プールよりみた校舎全景



昭和55年



校歌

作詞　津田辰雄
作曲　多田武彦

一

みどりの山なみ つづく丘
古きれきしの あと訪えば
学びの庭に あたらしい
めぐみのいずみ わきいでて
くみてつきぬ きようもまた
わが村岡の 学び舎に

二

古城のあとなる丘の 上
昔をしのぶ 夢のあと
つよく正しく たくましく
わかきいのちを はぐくみて
まことの道を おさめなん
わが村岡の 学び舎に

三

富士の嶺遥かに 青雲の
かがやく希望に ほゝえめて
あすの世界を ひらかんと
わが師わが友 むつみ合い
ともに手をとり はげみなん
わが村岡の 学び舎に

むらおかのあゆみ

津田辰雄元校長画（相中留恩記略より）

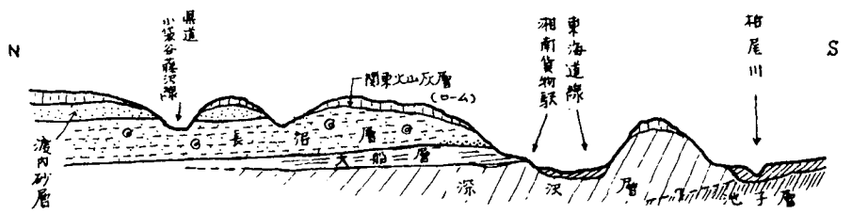
一、村岡の生いたち

いまから一千万年ほど前、神奈川県のほとんどは海の底にあり、海の中では海底火山が激しく活動し、噴出した軽石や火山灰などの池子層という地層を作っていました。さらに数百万年かかって、その上に砂や新しい火山灰がつもり、いま新校舎の西側や宮前、小塚などに見られる深沢層という地層もできつつありました。こうして村岡地区の基盤ができあがっていったのです。

八十万年ほど前になると、地球上では氷河期という時代にはいり寒い気候の時には海はしりぞき、暖かい時代になると再び海がはいり込むということをくりかえすようになりました。

二十万年から十万年前になると、この村岡地区も海の中から顔を出し、その上に伊豆や箱根の火山の火山灰が降りそそぎました。これが、いま山の上をおおっ

村岡付近地質断面略図（渡内―宮前）



ている赤土で、この火山灰はいまから一万年ほど前まで降りつづいたようです。

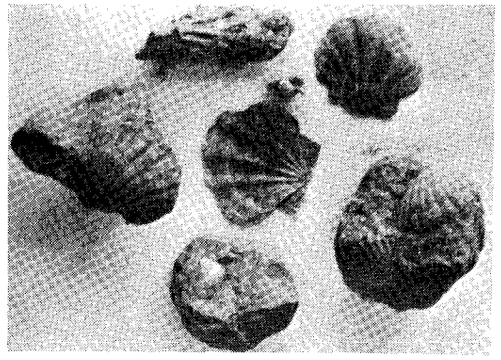
そのころ、最後の氷河期がきて海が後退し、広々とした平野ができあがりました。境川、柏尾川なども、ほぼ同じ場所を流れるようになりました。

暖かい気候になって、また柏尾川にそって海が大船あたりまではいり込む時代も来ましたが、だんだんと海は南にしりぞき、砂丘を残していきました。

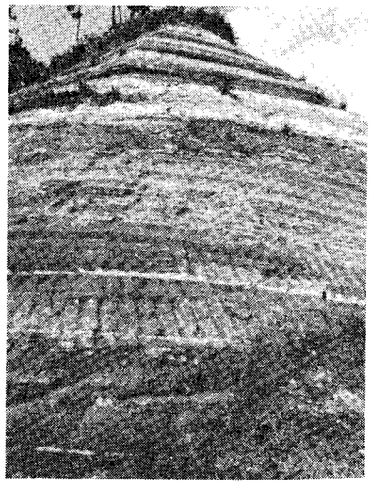
いまの藤沢の土地の誕生です。ざっと六千年くらい前のことです。

武田薬品工業（高谷）のところには、はっきりとした地層が見られる崖があります。この地層を見るとそのうつりかわりがよくわかります。

また、天嶽院境内・高谷からは貝化石や木の葉の化石も発見でき、理科の学習にやくだっています。



東京帆立貝（化石）

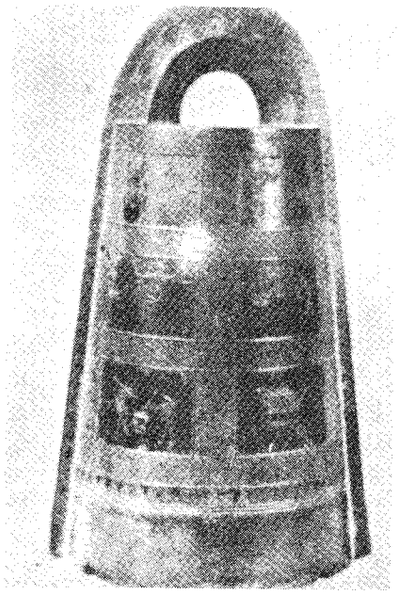


高谷付近の地層

二、大むかしのころ

わたくしたちの村岡に、ヒトが住みはじめたのはいつのころからでしょうか。文字のない原始のころのこと、祖先の人々が残してくれたものをたよりにして、村岡のようすを考えてみようと思います。

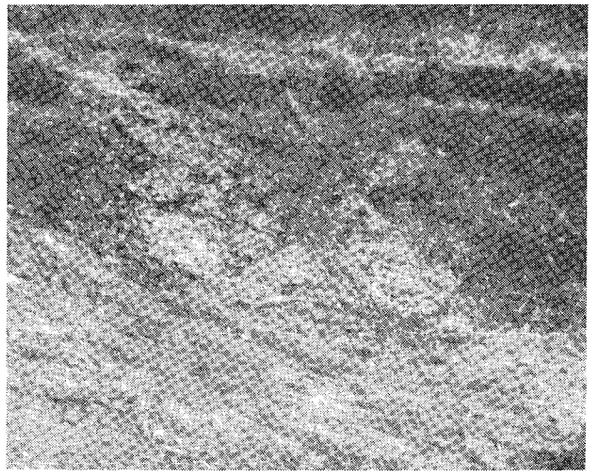
狩りをしてくらす ― 石器だけのころ　いまから一万年以上も前、もう人々は石で作ったおのを使ってけものをとり、魚や貝、木の実や根を食料としてくらしていました。石器といってもはじめのうちは自然にわれたものを使っていましたが、だんだんに石でおのやりなどを作るようになり、先をとがらせるくふうもするようになりました。藤沢の稲荷台地（老人福祉センターの裏の台地）で発見されたそのころのナイフ型の石器をみると、刃をみがいたようすがうかがわれます。



大むかしのようすがわかる銅鐸

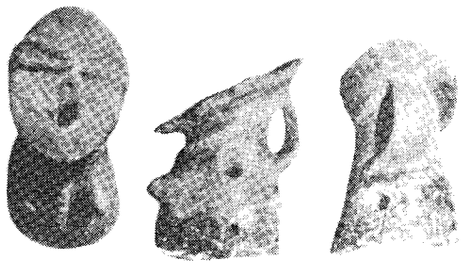
食料をたくわえる ― 縄文文化のころ　いまから六、七千年前になると、人々は土をこねて縄目のもようなどをつけて焼いた土器を作り、とれた草や木の実などを貯える生活をするようになりました。えものをさがして移動するくらしから、他の家族と集団を作って一定の場所に住みつく生活に発展してきたのです。

そのころの藤沢は、現在の標高十メートルくらいのところまで海であったらしく、そのあたりに貝塚がちらばっています。川名仲丸の川名貝塚は、藤沢の代表的な貝塚のひとつで、ダンベイキサゴ、チョウセンハマグリなどが多く見られます。この貝塚からは、人々が信仰に使った、小さな土偶とよばれる土を焼いた人形が見つかっています。



川名貝塚

柏尾川・境川・引地川などは、上流まで海水がはいって入江となっていましたので、これらの入江にはさまれた片瀬山（川名）、御幣山（藤が岡）や西富台地、



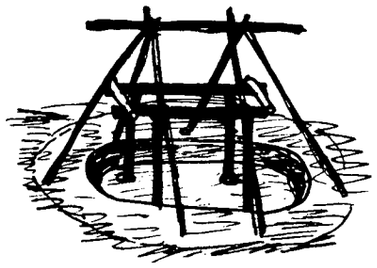
川名貝塚から出た土偶

竪穴式住居

大庭台地、稲荷台地などにだんだんと集落ができてきました。

このころにはもう弓矢を使うようになって、計画的にワナをしかけた集団での狩りがさかんにおこなわれ、犬も飼っていたと思われます。丸木舟で沖に出て、かなり大きな魚もとっていたようです。

そして、まだ布を織ることを知らない人々は、けものの皮で作った衣服を着て、竪穴式住居でくらしていました。四～五十センチの深さ、たてよこ四～六メートルくらいの大きさに地面を掘り、中に柱をたて、草ぶきの屋根を地面までおおった形のすまいです。中に炉を作り、土間にほし草をしいて寝るという生活でした。



竪穴式住居の骨組み

川名の田んぼの中からは、縄文時代の土器のかけらがたくさん発見されています。また、御幣山台地からは縄文・弥生両時代の竪穴式住居のあと

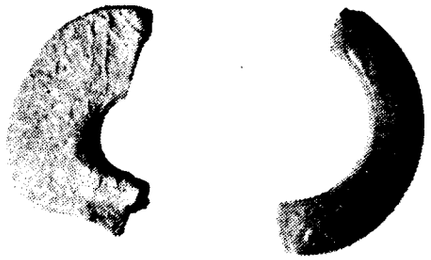
が見つかり、いろいろな道具が掘り出されました。たき火のあともあり、このころにはもう、人々が活気のある生活をくりひろげていたことがわかります。

高谷十二天（武田薬品工業の西北の方）でも、いろいろの土器・石器の他、滑石でつくられた勾玉や耳かざりなどが見つかり貴重な出土品といわれています。その他、後河内（宮前）のあたりでも縄文式土器が見つかっています。

稲作をはじめて――弥生文化のころ

紀元前三世紀ごろになると、大陸の文化が日本にもどき、西日本の方から稲作や養蚕・青銅や鉄で道具をつくる技術などが伝わってきました。土器も美しく質のよい弥生式とよばれる土器に変わってきます。

村岡周辺のむらも、それらの影響を受けて水田開拓をはじめます。そのころになると、境川や引地川の上流から運ばれてきた土砂が低い湿地帯をつくり、田をつくるのによい土地がひらけてきましたので、片瀬山や御幣山の台地に住む人々には、すぐ近くの弥勒寺谷や川名はよい耕作地だったことでしょう。



十二天遺跡から出た勾玉

やがて石器のほかに鉄の農具も少しずつふえていき、種をまき作物を育てる技術もだんだん進歩していきます。人々は布を織ることをおぼえ、麻やもめんの衣服を身につけるようになりました。弥生式の美しい形の壷や生活道具は、十二天遺跡をはじめ、村岡周辺のあちこちの遺跡から見つかっています。

農耕がさかんになってくると、人々は農作物をたくわえ、それを財産と考えるようになりました。豊作を神に祈り、収穫のときには神に感謝する「まつり」がおこなわれるようになりました。十二天遺跡などから発見される赤くぬった弥生式土器は、こうした「まつり」のとき使ったものと思われます。

一方、「むら」がさらに大きくなって、仕事を集団でするようになると、計画をたてたり、指図をしたりするまとめ役や、「まつり」をとりおこなう人が必要となってきます。こうして能力の差や貧富の差が出てきてむらの中に指導者（支配者）が生まれてきました。そして、それがだんだん勢力をもち、弱い「むら」をしたがえ、やがて地方の豪族となっていくのです。

村岡周辺の古墳　御幣山台地の東南のはずれに、「狐塚」とよばれる藤沢市内でただ一つという、前方後円型の古墳があります。四十メートルをこえる大きなもので、そのころ境川、柏尾川の上流の方までをふくむ水田地帯を支配していた八世紀ごろの豪族のものではないかといわれています。

川名の東京螺子工場のあるところには、「スクモ塚」という円型の「高塚式古墳」（土をもりあげてつくった古墳）がありましたが、昭和八年（一九三三年）に発掘され、石の棺や鉄の直刀、剣、鎌など、いろいろな遺物が掘り出されました。

川名の横穴古墳群

川名にある横穴古墳群は、片瀬川から川名にかけて百二十か所以上もあり、七、八世紀ごろのものですが、このころこの付近にかなり大きなむらがあったことがしのばれます。

大正十二年（一九二三年）の関東大震災のとき、入口がくずれてぐうぜん発見されたものもありますが、昭和四十三年（一九六八年）に神光寺境内や墓地の周辺、仲丸、清水、市場などにあるものが改めて調査され、市場の二基は六、七世紀のものではないかと考えられています。

このほか小規模なものですが、天嶽院境内（渡内）や弥勒寺近くにも、そのころの横穴古墳が残されています。

三、奈良・平安のころ

農耕生活が安定し、村のかたちも整ってくるころ、地方には支配者として成長してきた豪族があらわれてきました。その豪族たちをとおして、国との関係をもつようになった農民たちは、いままでの気ままな原始生活とはちがった新しい生活を体験するようになっていきます。

国司をむかえて

四世紀の中ごろ、大和朝廷がいまの日本のほとんどをしたがえ、統一国家の長として歩みはじめました。中国や朝鮮とさかんに往き来をするようになって、大陸からの文化とともに政治のしくみを学んだ朝廷の人々は、いままで地方の豪族の持っていた土地と人民を直接朝廷が治めることにしました。全国を六十ぐらいにわけて各地に国府（いまの県庁にあたる）をおき、豪族は朝廷の役人ということになりました。そして、人民には一代かぎりの土地を与えるかわりに、税として米や産物を朝廷に納め、ちから仕事に従うことを定め、戸籍もつくりました。世にいう「大化の改新」（六四五年）です。

奈良の都に特産物を運ぶ

和銅三年（七一〇年）、奈良に移された都は、朝廷で政治をする貴族を中心にだんだんとりっぱな町にととのえられました。

都の貴族の年収入はいまのお金で一億円くらいもあったといわれますが、そのりっぱな家にくらべて、地方の人々のくらしは弥生時代のころと、とくべつかわることはなかったようです。

まだ竪穴式住居に住み、重い税に苦しみながらかいこを飼って税のための絹布を織り、耕作をし、けものを追い、木の実などをとって大事な食料としているような生活だったのでしょう。

調・庸（絹や麻などの布、特産物など）といわれる税を都まで運ばなければなりません。そのころの『延喜式』という本に、相模から奈良の都まで「上り二十五日、下り十三日」という記録があります。このころの人々は、米はこしき（穴のあいた器）に入れてむして食べていましたが、それを

正倉院御物

正倉院の御物の中の古裂

〃相模国鎌倉郡方瀬郷　戸主大伴首麻呂

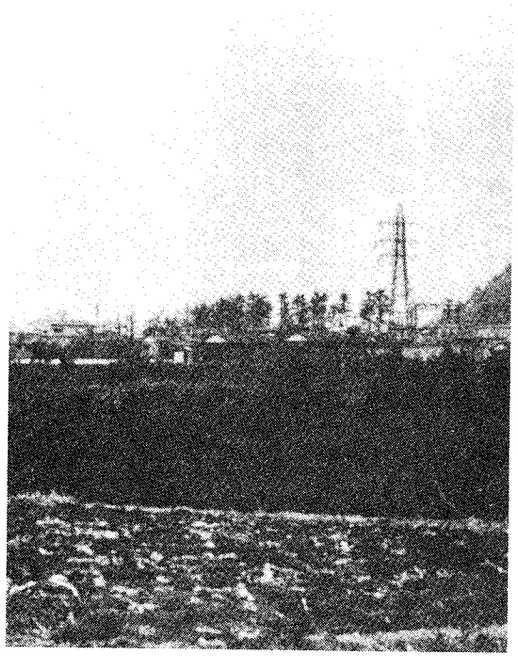
調並庸布一端　長四丈二尺

天平勝宝元年十月〃

このころ片瀬山あたりの郡司（郷の長）が納税したものでしょう。

干した「乾飯」をべんとうにして、奈良の都へ産物や米を運んでいったのでしょう。

相模国府　村岡あたりを治める相模国府はそのころ海老名にあったといわれていますが、国司（いまの県知事にあたる）について地方に下った帰化人（大陸から渡ってきて、日本人になった人）たちはこの辺にも住みつき、わたくしたちの先祖にいろいろなことを教えてくれました。学問・仏教・はたおり・紙をつくることなどは、その代表的なものです。帰化人たちは、自分の国の名まえや仕事などを地名にしましたので柄沢（唐沢）、羽鳥（のぼりをつくる）、高倉（高句麗）などがそうではなかったかといわれています。

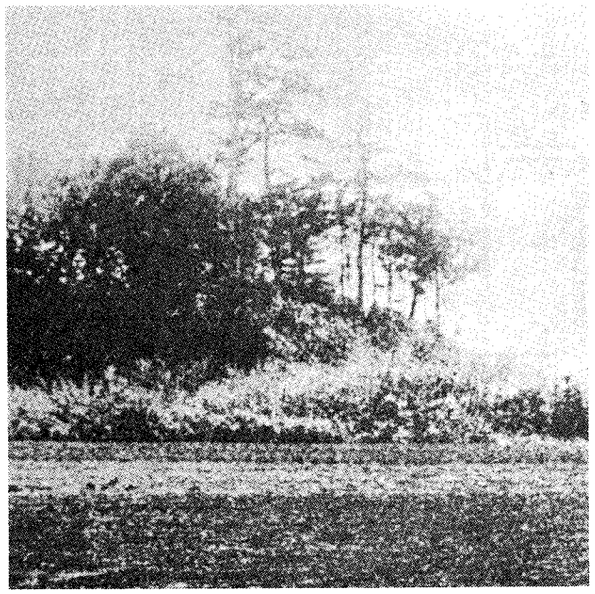


むかしの県庁・国府跡

京の都と地方の豪族たち　延暦十三年（七九四年）都が京都に移ると、町はさらにりっぱになり、ぜいたくな貴族たちの生活がみられるようになりました。

承平年間（九三一～九三七）につくられた『和名類聚抄』という本によると、高座郡の中に岡本郷をはじめ十三郷、となりの鎌倉郡には七郷あり、いまの村岡地区は岡本郷の中と鎌倉郷の一部に含まれていたようです。一つの郷は律令（法律）によって五十戸と定められていました。一戸（一軒）には二十人から三十人ほどの一族が、いく棟かの住居と物置、貯蔵庫をもって住んでいたと思われます。

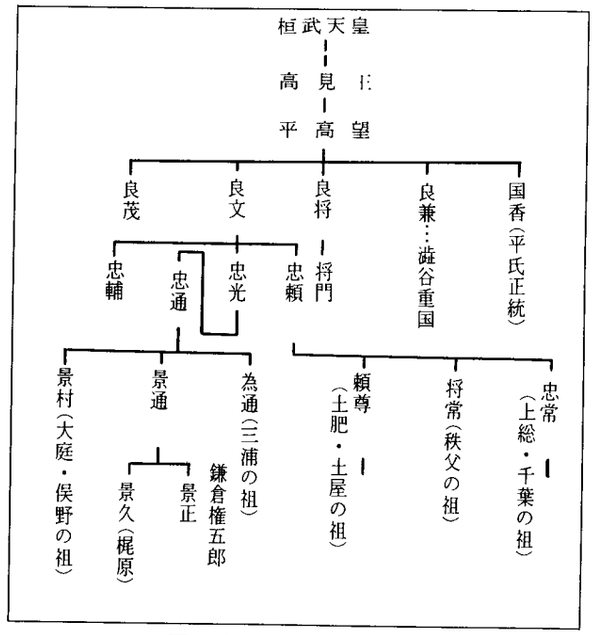
大化の改新後、農地をもらった人々も重い税にたえかねてにげ出し、地方の豪族の荘園（私有地）で働く人が多くなりました。豪族は、その人々を使って新しい土地をどんどんふやして財力をたくわえ、武力までも備えてしだいに強く、大きな勢力となっていきました。



村岡城址（宅地造成の前）

平良文と村岡城　村岡城の城主だったといわれている平良文も、このころ（十一世紀）に関東地方に勢力をもつ豪族のひとりでした。良文は高望王の五人目の子で村岡五郎といわれ、武勇にすぐれた大へん勢いの強い人だった

伝良文公の塚（二伝寺）



平良文の系図

そうですが、また物ごとを冷静に判断する力も人にまさるものがあったということです。あちこちの領主だったようで、村岡もその一つだったのでしょう。やがて良文は鎮守府将軍（いまの警察庁長官）になり、承平五年（九三五年）、おいにあたる平将門を討つ命令を受けたとき、他の兄弟たちとこれをおさえました。

こうして村岡五郎の勢力はますます大きくなって、埼玉県の秩父から、千葉県、茨城県、神奈川県にまでおよびました。

良文には、忠頼、忠光、忠輔の三人の子があり、それぞれ関東八平氏とよばれた豪族の祖先になっています。千葉、上総、土肥、三浦、秩父、梶原、大庭、長

尾などがそうです。

忠光の子で良文の孫にあたる忠通は、村岡小五郎ともいって村岡城に住んでいたといわれ、渡内に上屋敷、五反畠（御殿畠）というよび名も残っています。

御霊神社の祭神・鎌倉権五郎景正

忠通の孫の鎌倉権五郎景正は、源義家にしたがって、後三年の役（一〇八六年）に出陣し、敵に射られた矢を目に立てたままその敵をたおしたという武勇伝を残しています。村岡城址に近く、「景正産湯の井」と伝えられる「三日月の井」のあとがありました。また、景正は大へん信心深く、大庭の自分の領地を伊勢神宮に寄進したり、大日如来像をつくらせてお堂にまつったりしています。自分自身も、郷土の守り神として、御霊神社にまつられています。このように、良文、景正に関係深い史蹟は、村岡やその近所にたくさん残っています。

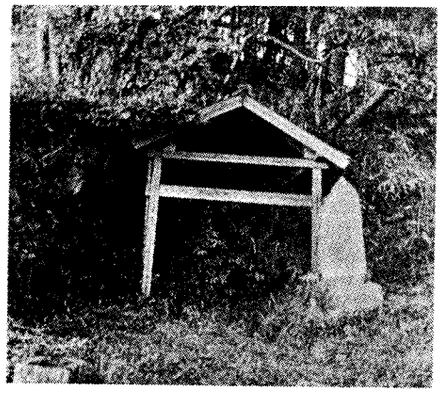
平良文（『今昔物語』（平安末期）より）

武勇をほこる良文は、当時ライバルであった源宛という武士に決とうを申し込み、それぞれ五百人くらいの家来をつれて草原で相対しました。両軍一対一で駒を進め、弓矢の技術を競いました。ところが、どちらも強くて勝負がつきません。

良文は弓矢をおさめて、「この腕だめしによって両方とも武勇がすぐれているのがよくわかったから引き分けにしよう」と申し入れたので、宛も素直に承知し、お互いに礼をして退場しました。

両方の家来たちもたいへん喜び、それ以後は両軍ともとても親しく交際したということです。

平良文という人の人柄がよくわかるお話ですね。



鎌倉権五郎景正・産湯の井戸

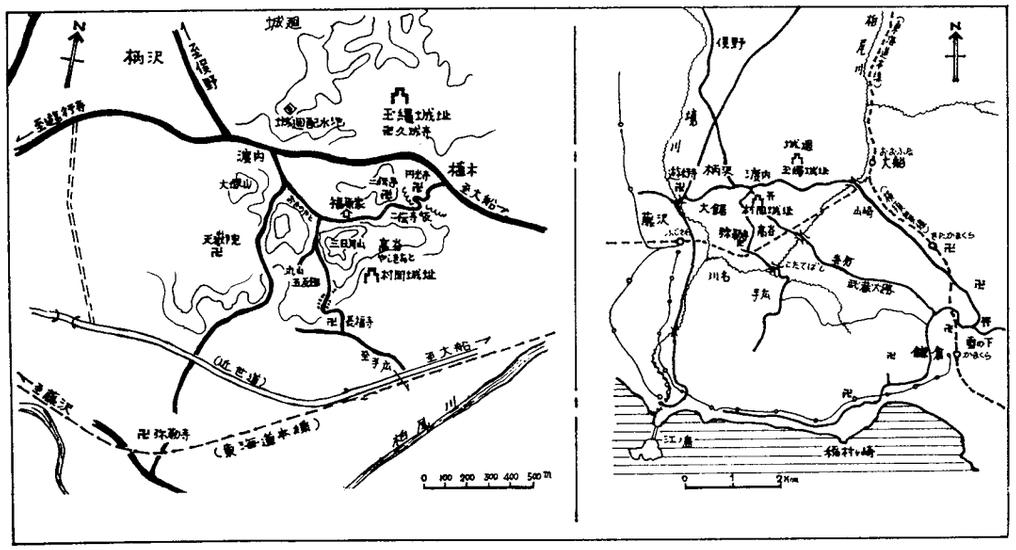
四、鎌倉・室町・戦国のころ

藤原氏などの貴族たちによって動かされていた政治は、なかま同士の勢力争いやぜいたくなくらしをしているうちに、力を失っていきました。地方の大豪族であった、平将門や藤原純友などがむほんを起こしたときなどは、地方の力のある豪族（武士団）に頼らなければなりませんでした。

平氏と源氏の戦いと良文の子孫たち

力をみとめてもらった武士団は、弱くなった貴族たちをおさえて、ついには朝廷の高い位につくようになり、天皇を祖先とする豪族で有力な武士団のかしらである平氏と源氏は、政権をとることでしだいに対立するようになってきました。

はじめに実権をにぎった平清盛をかしらにする平氏は、「平家にあらざれば人にあらず」などといって、貴族とかわらぬはでな生活をしました。そうした平氏の政治に対して不満をもっていた地方の武士たち、とくに相模を中心とした関東の武士たちは、源頼朝をかしらとしてまとまり、ついには瀬戸内海の壇の浦で平氏をほろぼしました。



鎌倉への道（鎌倉古道）

平良文の子孫である関東八平氏の武将たちも、いろいろな恩義から源・平にわかれて戦いました。藤沢の武士たちでは大庭景親は平氏方、俣野景久は源氏方というように分かれて戦ったのです。貴族政治の社会から武士による社会へとかわっていく時代でした。

鎌倉に幕府があったころの村岡

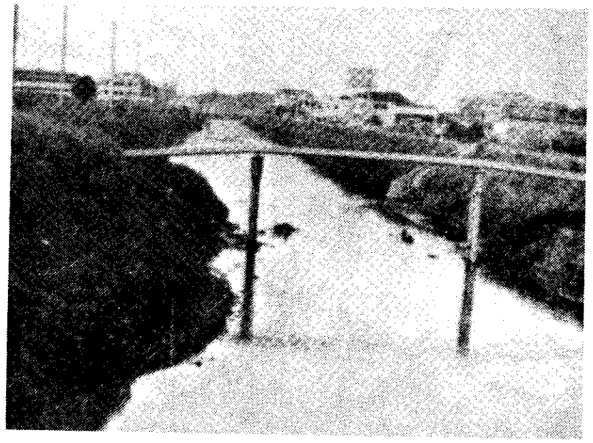
こうして源氏の大将頼朝は、関東の豪族をすべてしたがえ、建久三年（一一九二年）には征夷大将軍という日本中を治める役を朝廷より受けて、鎌倉に幕府（政治をする所）を開きました。

このころの村岡は、砦や、武士の館があるほかは、さびしい農村だったでしょうが、鎌倉への道すじにあたるので街道（鎌倉道）は整えられ、人馬の往き来もかなり多くなったと

考えられます。

鎌倉から馬でかけて三十分、村岡（宮前）へぬけるところに古館橋がありますが、またの名を鷹匠橋ともいわれています。

文治五年（一一八九年）十一月十七日の雪降りの日のこと、頼朝と鎌倉武士の一行は、大庭から長後にかけてひろがる〝大庭野〟に狩りにいきました。そのようすが『吾妻鏡』（鎌倉時代の記録）にくわしく記されていますが、一行は、この橋を渡り村岡を通りぬけていったと思われます。村岡の人々は、その後も狩りのたびに「やぶさめ」でみられるような美しい衣装で着かざった武士たちを見送ったのではないでしょうか。



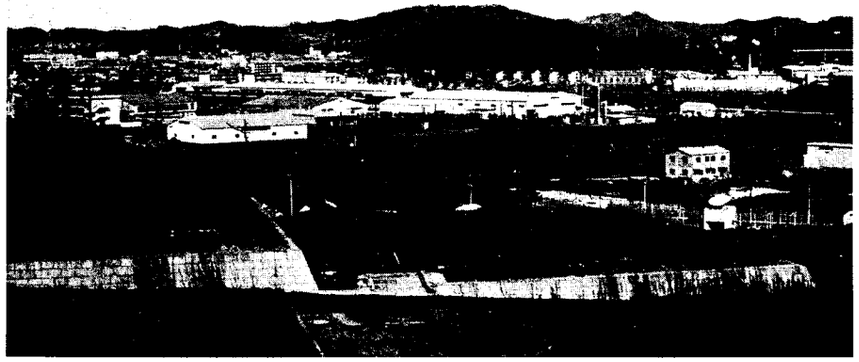
古館橋上流

また、建保四年（一二一五年）正月のころ、江の島が片瀬と陸地続きになったといわれています。潮がひいたときには、歩いて渡れたということです。そのときのようすは『吾妻鏡』に、「鎌倉中はもちろん周辺に住んでいた人々が群をなして江の島に行った」とあります。村岡の人々にとっても江の島行きは、家族中の楽しみの一つであったことと、想像されます。

新田義貞、鎌倉攻め

源氏のあと、北条氏がひきついだ幕府も、元寇などの大事件もあって財政的にも弱くなり、元弘三年（一三三三年）ついに足利氏によってほろぼされます。

このころの村岡の地名がはっきり書かれているのは『太平記』です。幕府を討つために京都から、新田義貞が大軍をひきいてやってきたようすがくわしくのっていますが、村岡は鎌倉攻めの道すじの一つになっていて、西軍（新田軍）が、「村岡・藤沢・片瀬・腰越・十間坂五十余箇所に火をかけて」とあります。鎌倉につかえる武士たちの館があったからでしょうか。「人々は山野を逃げまどい、ひどいさわぎであった」といわれます。



村岡城址から鎌倉方面をながめる

西軍は村岡城に、東軍（鎌倉軍）は谷をへだてて富士塚（鎌倉市山崎）を陣として対しました。西軍

は稲村ケ崎から鎌倉へ攻め入り、激戦の末、総大将北条高時は切腹して鎌倉幕府は終わりました。

この戦いで、観音坂付近（慈眼寺前）、宮前から小塚付近（神戸製鋼所のあたり）は激戦場であったといわれます。大船の山崎付近は、武士たちの屍が重なりあっていたとのこと、いまでもこのあたりには、五輪塔がたくさんありますが、戦いが終わって田畑の整理に帰ってきた農家の人々が、ひとまとめにして葬って塚をたてたり、供養をしたあとと思われます。

鎌倉に多く見られる「やぐら」が村岡にもありますが、これは鎌倉の武将、僧侶の墓で、火葬の横穴墳墓で、鎌倉文化の中だけにしか見られない貴重なものです。

こうした歴史をたどりながら、村岡城址にたたずむと、工場群や柏尾川をへだてて鎌倉攻めの道すじをはっきり追うことができます。村岡城が重要な位置にあったことがよくわかると思います。

室町幕府がくずれて

その後、中央では朝廷が南朝と北朝に分かれて争いますが、村岡の周辺では直接の影響はなく、延元元年（一三三八年）足利尊氏が室町幕府を京都に開くと、しばらくは戦争がなく静かな文化が発展しました。

幕府は、鎌倉幕府にならって各地に守護（地方のとりしまり）・地頭（荘園のとりしまり）をおきますが、そのうちに守護大名同士の勢力争いがあちこちでおこるようになりました。

関東では、関東管領（関東の守護の長）として鎌倉に住んでいた足利成氏がやめると、たちまち戦いとなり、いつまでも続いて、藤沢周辺もそのうずに巻きこまれてしまいます。

玉縄城と村岡

やがて北条早雲が関東をおさえて小田原城にはいり、それから落城まで、その一族によって村岡は支配されました。

玉縄城は永正九年（一五一二年）、早雲によって築かれましたが、中央にあたるところがとくに大きく、無言のうちに周囲をおさえていました。いくつかの支城のうち、二伝寺砦・高谷砦（村岡城）・御幣砦が村岡地区内にありました。大塚山（いまの藤ケ岡中学のところ）には、狼火台があったそうです。

二伝寺砦の前は鎌倉街道が通っていましたから、重要な地点として

村岡と関係の深かった玉縄城趾

注目されていたことでしょう。片瀬川から物資が陸上げされる川名には市場が開かれていましたので、軍事上、経済上の要地として城主（領主）の直轄領（直接治めるところ）となり、年貢の免除もあったということが、永禄二年（一五五九年）の『小田原衆所領役帳』に記されています。

室町時代の市場のようす

いざというとき、玉縄城にかけつける玉縄衆は十八人といわれ、行方弾正・間宮豊前守は、玉縄城に集まったときには家臣とともに渡内に住んだということが、『新編相模風土記稿』にも書かれていて、その屋敷跡と伝えられるところが渡内に残っています。御幣砦の大将だった大谷氏は、小田原城に集まる相模衆の一人で、川名にその屋敷の跡があり、江戸時代までその子孫が住んでいたそうです。また、川名にはそのころ鉄砲鍛冶もいて、小田原の北条家から

間宮豊前守の屋敷跡

注文をうけて鉄砲を作ったことが、古い文書に残っています。

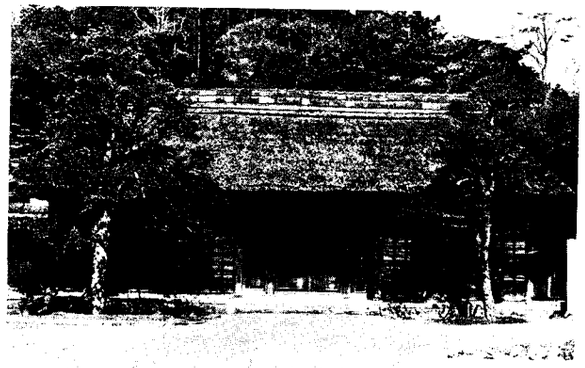
猫の目のようにはげしく変わる戦国時代の政治の下で、そのころの村岡の人々は、その日その日を送るのにやっとであったことでしょう。いつ、いくさになって殺されるかわかりません。死に対する覚悟ができるように、人々は仏を信じ、死後の幸せを祈りました。武士も同じでした。このころの人たちはたいへん信心深く、お寺を大事にし、領主たちもこぞって寺院を建てています。天嶽院・二伝寺・慈眼寺などもこの時代に建てられたものです。

玉縄城の二代目城主・北条綱成はたいへん武勇にすぐれ、いくさのときは背中に「八幡大菩薩」と書いた旗を立てて戦い、上杉謙信が鎌倉へのぼる途中攻めたときも、玉縄城の守りは固く、落とすことはできませんでした。

秀吉の禁制札

しかし三代目城主・氏勝のときになり、玉縄城はたいへんな危機をむかえることになります。それは関東以西をことごとく支配した豊臣

秀吉が玉縄城の本拠である小田原城を、二十万の軍をひきいてとり囲むことになったからです。秀吉はそのとき、村の中の人目につく場所や、寺院あてに「禁制」といわれる「おふれ」を出しました。秀吉の朱印をおしたこの一枚の紙は、秀吉の力を人々に誇示するのに大きな意味をもっていました。時の移り変わりをつげるこの一枚の文書がはり出されたとき、村岡の人たちは先を争って見に行ったことでしょう。



福原家の長屋門（渡内）

危機をむかえた玉縄城は、徳川家康のすすめもあって、血を流すことなく秀吉に明け渡されました。ときに天正十八年（一五九〇年）のことでした。

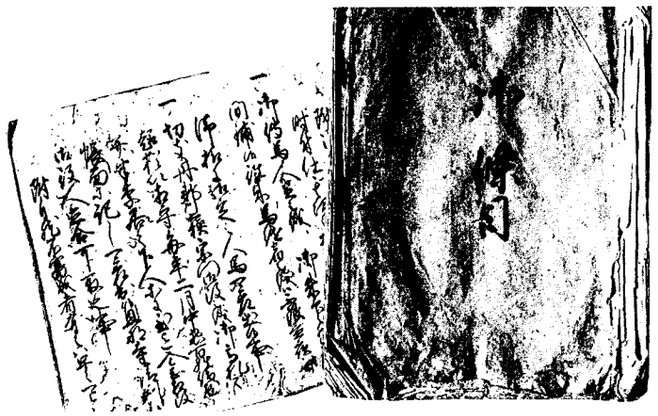
その後、北条氏の家臣であった人たちの多くは、藤沢周辺に住みつきました。その人たちは玉縄城支配の八十～百年の間、北条氏のために直接に食料を用意したり、農兵を集めて指揮したり、城の修理をしたりして活躍した人たちです。そして秀吉の刀狩令などがきっかけとなり、多くの武士たちは刀をすて、村の名主や村役人となりました。現在、旧家といわれている家にその名残りをとどめています。

五、江戸のころ

長い戦国時代もようやくおさまり、村岡の人々もやっとおちついて農作業ができるようになりました。全国を治めることになった徳川家康は、慶長八年（一六〇三年）江戸に幕府を開き、いろいろな制度を設け、国づくりをはじめました。

きびしい農家のくらし

そのひとつとして「士農工商」という身分をきめましたが、百姓（農民）は武士の次というのは名ばかりで、実際には「百姓は生かさず、殺さず」といわれるように、大へんきびしいご条目（法律）で、がんじがらめにしばられていたのです。苦しい生活にたえかねて逃げ出す者が出ると年貢（税）をとりたてることができないので、幕府は村々に「五人組」という五軒ずつのグループを組ませ、そのうちのひとりに何かあると、残りの四軒にも同じ責任で



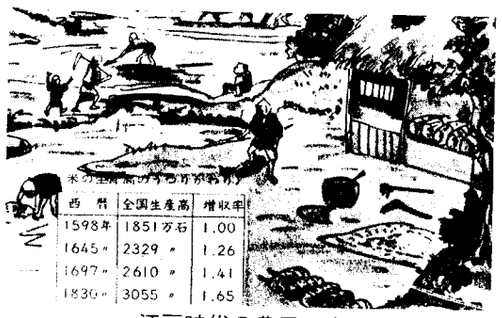
農民の生活を苦しくした「ご条目」

宗門人別五人組書上帳

あるとして重いおしおきをする定めをつくりました。そのため人々は、どんなにつらくても、ただ黙々と働くよりほかはありませんでした。

また「宗門改め」といって、だれはどんな宗教を信じているかということを五人組ごとに書き出させ、かならずどこかのお寺の檀家であることを義務づけました。これは幕府のキリスト教禁止のための宗教しらべです。村岡にもそのときの『宗門人別五人組書上帳』というのが残っているので、そのようすがよくわかります。

そのころの村岡は、高谷・小塚・弥勒寺・柄沢・宮前の五か村を中心に渡内・川名とともに農業でくらしをたてていましたが、このような幕府のいろいろな定めを受けて、そのくらしぶりは本当に苦しかったと思われます。さらに、村岡地区は水田が少なかったため、年貢として納める米もたくさんとれないので、畑作にたよらなければなりませんでした。野菜を作って売りに行き、自家用の



米の生産高の増加が家計を支える

西暦	全国生産高	増収率
1598年	1851万石	1.00
1645〃	2329 〃	1.26
1697〃	2610 〃	1.41
1830〃	3055 〃	1.65

江戸時代の農民の生活

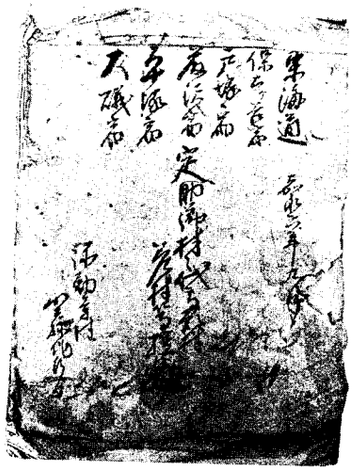
食料としてはあわやひえを食べました。みそ・しょうゆの原料としてかかせない大豆なども作り、また綿も栽培し、かいこも飼って糸をつむぎ、着物もほとんど自分たちで織って着ていました。

藤沢宿と村岡

幕府は江戸の日本橋を中心として城下にはいる街道を整備しましたが、五つの主な街道のうちでも、東海道は日本の西部と東部を結ぶ重要な街道としてさかえ、村岡に近い藤沢の宿は、遊行寺の門前町として大へんにぎわいました。

宿のにぎわい

江戸幕府は諸大名や旗本の経済力を押えるため、領地と江戸の間を参勤交代させましたので、宿場には大名のとまる本陣、家来のとまる脇本陣などがつくられ、たくさんの人や馬が必要となりました。そのため幕府は、街道に近い村々に、大名や役人の荷物を運ぶための人や馬を毎日何人・何頭と、きめて出させることにしたのです。これを「助郷制度」といいますが、村岡は藤沢宿の定助郷（百石あたり人足二人・馬二頭出す村）となったので、村岡地区（七か村）一五五五石として、一日に人足二十人、馬二



定助郷控帳（表紙）

十頭も出さなければならなかったことになります。

そのころの戸数が百五、六十軒だったことを考えると助郷がどんなに大へんだったかわかります。人や馬は休むひまなくかり出され、朝、助郷に出かけて帰ってきたところをまたすぐ呼び出されたりもして、自分の田畑を耕すひまもないくらいだったということです。

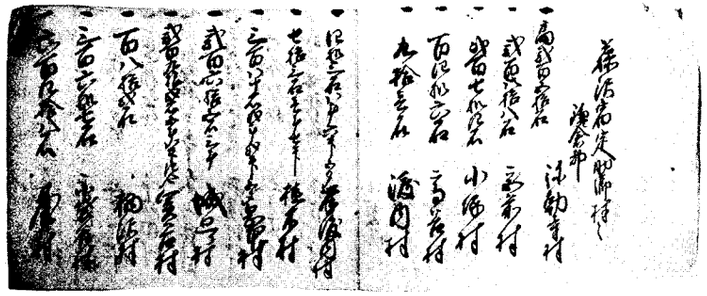
藤沢宿の受けもちは、戸塚の宿まで二里（八キロ）、平塚の宿まで三里半（十四キロ）、北は厚木・寒川あたりまで、鎌倉方面は雪の下あたりまでだったそうです。

このころの年貢は「五公五民」などといわれ、とれた米の半分くらいを納めるのがふつうでした。村岡のほとんどの村は天領といい、幕府の土地として直接治められ、古い文書をみると年貢高は二割に満たないようになっています。これは助郷があったから

享保10年（1725）改定

川名	281 石
弥勒寺	250
小塚	274
高谷	146
渡内	91
峯渡内	43
柄沢	182
宮前	288
	1,555 石

石高表



定助郷石高控帳

で、そのためかえって納めるものが多くなり、合計すると実際は六割ぐらいになっていたようです。

名主は助郷の人数をそろえなければならず、小作人は年貢の米のほかに地主に小作料を出さなければなりませんから、米を作っていても、ふだんは白い米のご飯などはとても口にはいりませんでした。

水田は少なく、台地の方は水不足、それなのに雨が多く降るとたちまち柏尾川・境川が洪水をおこすというような状態でしたので、天明・天保（一八世紀から十九世紀のはじめ）のころには、「助郷はできません」と願い出た文書が村の古い家に残されています。

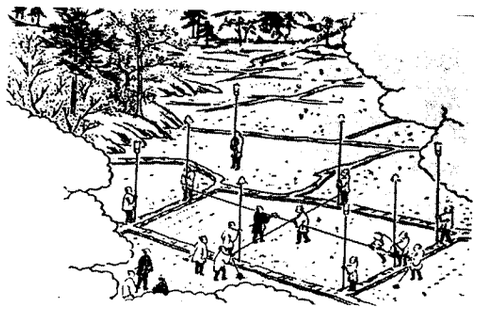
働きに出る

このようにいっしょうけんめい働いても大へん苦しいので、田畑の仕事のないときは男の人は助郷人足の間をぬって、馬入川の川越人足や江の島へ人を渡す人足、藤沢宿の下男などに出、女の人は畑でとれた野菜を宿に売りに行ったり、宿の

女中になったりして、休むひまなく働いて生活をささえていたのです。

また幕府は、年貢をきびしくとりたてるために農民のもつ土地の所有をはっきりさせようとしました。検地の結果をまとめたものを水帳・竿帳などといって、これには地名・面積・等級・生産高・作人などが書き出されています。この検地帳に記された人を本百姓とし、年貢や助郷役の負担を義務づけました。

検地水帳（宮前）



検地のようす

幕府の力、弱まる

幕府の鎖国（外国と交際しない）政策で人々は、二百年もの間、中国・オランダ以外のことはまったく知らされませんでした。江戸時代も半ばをすぎると商人の力が強くなり、幕府の力が弱まってきました。学者を中心に鎖国や幕府のあり方を批判する人も出てきて、長かった江戸幕府の政治にも、ようやく傾きがみえてきました。

六、明治・大正のころ

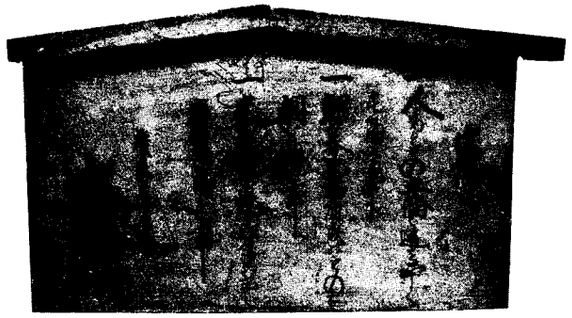
嘉永六年（一八五三年）黒船が浦賀沖に錨をおろし、国を開くようにもとめてきたので、日本中は大さわぎとなりました。村岡の人々も助郷として浦賀にかり出されましたが、その数は七十人ぐらいだったそうです。いざというときの陣地作りや米つき人夫をしながら、長い鎖国からの夜明けを身をもって感じたことでしょう。

黒　船

幕府は開国にふみきりましたが反対する人たちや、政治を改めようとする人たちの力は強く、ついに江戸幕府はたおれ、武士の政治は終わりをつげました。

文明開化の波をうけて

新政府は天皇を中心とする明治の世になったことを日本のすみずみまで知らせる必要から、高札（掲示板のようなもの）をたてました。これを「太政官札令布告」といいますが村岡にもそのときの



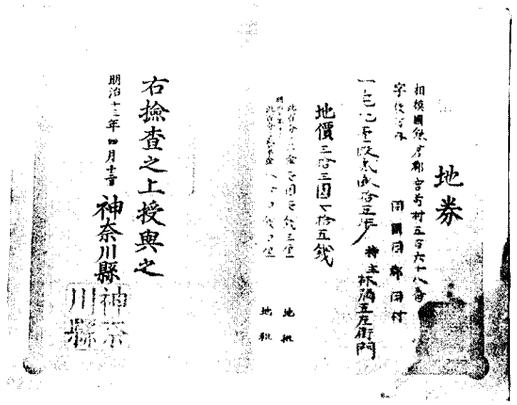
明治の世の中になったことを知らせた太政官札

五本の高札が残っています。

明治二年（一八六九年）には、助郷制度が廃止され、長かった助郷の苦しみから開放されました。助郷に出た村人たちは、東海道を往来する人々のかごや荷物の負担で大そう苦労したようです。

明治五年（一八七二年）、学校制度ができ、同六年には、村岡にも小さな学校が弥勒寺につくられました。

新しい制度をすすめる政府は、土地所有の権利をはっきりさせようと土地の登記をやりなおし、明治八、九年（一八七五、六年）には地券を発行して三パーセントの税金をかけることにしました。村岡でも土地の調査が行なわれ、そのときの地券が古い家に残っています。



新しく土地の所有をはっきりさせた〝地券〟

鉄道がしかれる

明治二十年（一八八七年）東海道本線が国府津までのびて藤沢駅が開業しましたが、駅前には五、六軒の農家しかありませんでした。弥勒寺の近くを通る線路は農家の庭をよこぎり、汽車の煙突から出る火の粉が、かやぶきの屋根にかかるので、火事を防ぐのに大へんだったということです。近所の農家では、二回ほど物置が焼けたそうです。そのころの東海道本線は単線で、弥勒寺付近は、山が線路にせまり、カーブしているので見通しのきかない場所でした。

藤沢駅のホーム（大正時代）

柏尾川の大改修

藤沢駅とともにできた大船駅は田んぼの一部をうめたててつくられたため、柏尾川の水路をふさぐことになり、小塚の付近から弥勒寺にかけては大雨のたびに大洪水をおこすようになりました。

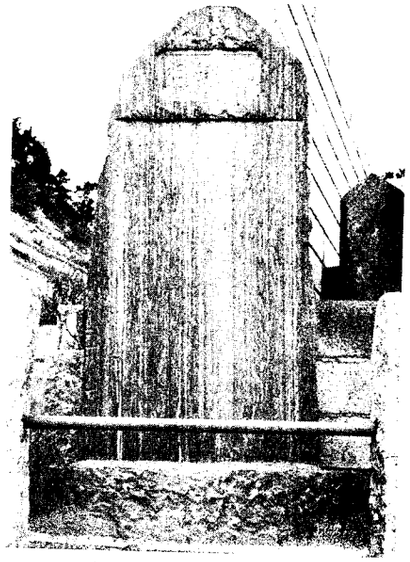
秋のとり入れのころに柏尾川の水があばれると穂をはらんだ稲が、どろ水の底になり、汗の結晶も流されてしまいます。その損害による苦しみは大へんなものでした。村長はたびたび県に改修を願い出ましたがとりあげられないので、村長はじめ有力者の寄付と村民の奉仕とで工事がはじまりました。大正八年（一九二〇年）、やっと工事が終わったとき村長はすっ

柏尾川の洪水

かり貧乏になってしまったそうですが、村民は長年の水害からやっと救われたのでした。

小塚トンネル

せっかくよみがえった耕地も山をひとまわりしないと行けません。そこでこの山にトンネルを掘ることを考えた人たちがいました。まわりの人たちもはじめはとてもむりだと反対していましたが、農業のひまなときをみてツルハシとスコップをもつ熱意に、いつしか協力するようになり、七年間の歳月をかけてトンネルは開通しました。

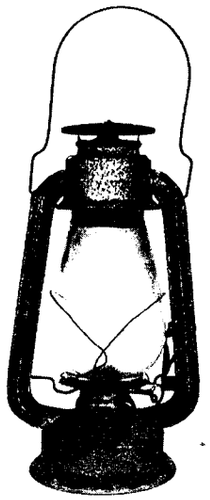


小塚トンネルの記念碑

いまは宅地造成などのため山ごとあとかたもなくなってしまいましたが、開通以来三十年もこのトンネルは村民の農作業に役だっていたことは忘れられません。

明るい電灯にびっくり

村岡で最初に電灯がついたのは川名で、江の電の発電所から送られてきました。大正二、三年（一九一四、五年）ごろです。それから宮前、弥勒寺と続き、柄沢は大



石油ランプ

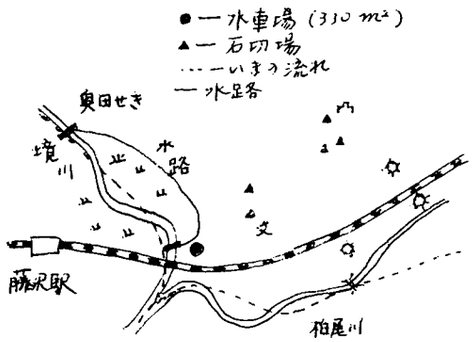
正十一年、渡内は十三年でした。人々はランプより明るく便利なのにずいぶんおどろいたことでしょう。子どもたちもランプのホヤそうじや、ホヤをわってしまって夜藤沢の町まで買いにいかされることもなくなると、喜びました。

水車場と石切場

柏尾川の改修が一だんらくしたころ、何人かの人が集まって、株式会社による水車場をいまの川名のふみきりのそばに開きました。いままで手でひいていたのを境川の水を利用した水車で、精米・製粉をするので大へん仕事がすすみました。

この新しい試みは三浦半島の方からも精米をたのみにやってくるほど有名になりましたが、関東大震災によって水車場がこわれたのでやめてしまいました。

また、弥勒寺・小塚・高谷の山は少し掘ると鎌倉石というよい石が出ます。一時は石屋が何軒かできて、鵠沼の別荘に土台石として売られたり、かまどの石や、道路建設の下石として利用されましたが、コンクリートが



水　車　場

使われるようになるにつれて、しだいに掘らなくなってしまいました。

平和なくらしぶり

静かな農家の生活は文明開化や富国強兵の波にもあまり影響がないようにみえましたが、それでも日清・日露の戦争には五名の戦死者を出し、その後、在郷軍人会がつくられ「忠魂碑」が学校の中に建てられました。いまは第一次・第二次世界大戦の戦死者もいっしょにまつられて村岡城址に移されています。

純農村としては、水田が少なく畑の多い村岡では、野菜を作って市場、藤沢の町、鎌倉方面に売りに行ったり、養蚕をおこない、近所に開設した若尾製糸工場にまゆを運んだりして生活のたしにしました。桑つみは子どもの仕事としてよく手伝ったそうです。

そのころの製糸工場

渡内では種麦の栽培を農業試験場からたのまれたり、かのこゆりを作ったりして現金収入の道をひらきました。柄沢では、さつまいも・きゅうりを作り市場に出しました。綿の栽培は自家用の着物作りに必

要でしたが、日露戦争後、綿が安く輸入されるにつれて、自然に少なくなっていきました。

その後、第一次世界大戦後の好景気をきっかけとして、農家の生活もぐっと楽になってきました。このころの農村は村岡にかぎらず、新聞をとる家、自転車のある家、時計のある家は、まだまだ少なかったようですが、村岡の自然は美しく、柏尾川の水は澄み、山の緑も深い、のどかで平和な農村でした。

関東大震災

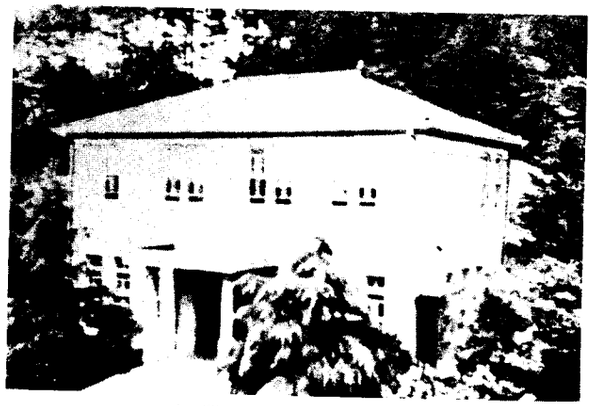
大正十二年（一九二三年）九月一日、突然おそった大地震は、平和な村岡にも大へんな被害をあたえました。川名方面では、約八割の家が傾いたり、倒れたりしました。曲りくねった線路の上を東京方面からのひなん民の行列が続きます。村では、青年団が悪い人がはいってこないようにと、日本刀をもって警戒したということでした。

> 関東大震災
>
> その日の話
>
> 外で畑仕事をしていたあるおじいさんはお尻を誰かがつつくのでふりかえると畑の上がもり上がってつき上げていたのだそうです。
>
> それがらグラリ！　ゆれどおしで、そばの木にしがみついてふるえていたと話してくれました。

関東大震災（大鋸付近）

七、昭和のはじめころ

関東大震災の翌年、村では震災の復興のため、産業組合をつくりました。ところがようやくたちなおりを見せてきた昭和七、八年（一九三二、三年）ごろ、おいうちをかけるように世界的な不景気がおこり、村岡も大きな影響をうけました。



産業組合（農協の前身）

自立更生村

そこで、この不景気をのりきるために、村では県から補助金をうけ、自立更生村として生活をたてなおすことになりました。

「足なみそろえて自立更生」これは産業組合の一等に入選した小学生の標語です。組合では、作物の共同販売・種・肥料・家庭用品などの共同買入れなどをする一方、生活のむだをはぶき貯蓄をすすめました。

村役場の二階に村立結婚式場をつくったり、葬式の道具を貸しつけるなど、冠婚葬祭の節約につとめました。

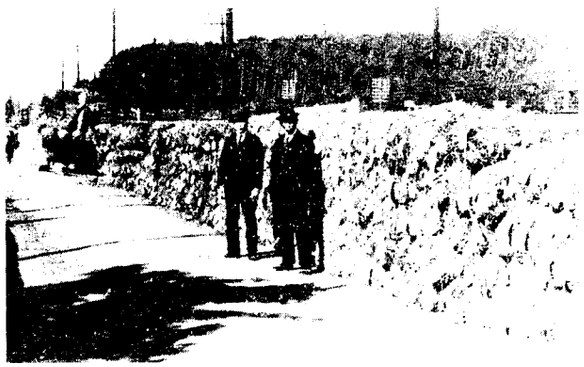
そのほか環境をよくするため、地区ごとに道路愛護会をつくり村道の修理、そうじなどをし、各部落の道路品評会がおこなわれるほどでした。

鎌倉郡から藤沢市へ

昭和十五年（一九四〇年）町から市になった藤沢市は、新しい都市づくりをすすめるため周辺の町や村へ合併をよびかけ、村岡村にも声がかかりました。そのころ、村の財政は苦しく、（村税の七割は学校の費用にあてていた）みな合併には賛成でしたが、鎌倉へつくか藤沢へつくかで意見がわかれました。買物その他経済面や、人々の交流が多いこと、境川改修の陳情もいっしょにしていることなども考えて藤沢に合併することにきまりました。

昭和十六年（一九四一年）六月一日、村民は藤沢市民となり、子どもたちは旗行列をして祝いました。

藤沢市合併記念旗行列



さつまいもの出荷

八、戦争中のころ

昭和十二年（一九三七年）七月、日中戦争がはじまり、人々はいつのまにか戦争のうずの中にまきこまれていきます。さらに、十六年（一九四一年）には、アメリカ・イギリスなどを相手にした太平洋戦争（第二次世界大戦）がおこり、昭和二十年八月（一九四五年）の終戦まで、平和でのどかな村岡村にも、戦争という波があれくるいます。

昭和十三年～十五年（一九三八～四〇年）ごろ、藤林鋳工所、松淵鉄工所、近藤乳業など中小工場がつぎつぎにでき、農業から勤め人にかわる人が出てきたり、また、工場へ通う人が村の中に引っ越してきたりして、新しい住民がふえてきました。

慰問袋

徴兵、そして戦死

戦争がますます激しくなり、徴兵令状（赤い紙に書かれていたので「赤紙」とよばれた）によってたくさんの男の人が戦場に送られました。寄せ書きした日の丸を肩にかけ、千人針をおな

かにまいて出征していきました。徴兵された家には「出征兵士の家」と書かれたかんばんがかけられ、るすを守る人のため、田植えやそのほかの仕事を村のみんなが手伝いました。

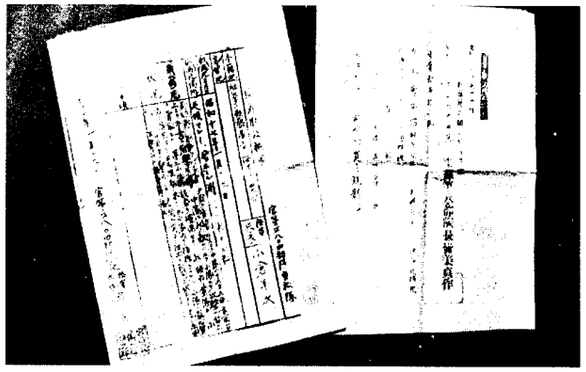
村岡の戦死者は、八十三名にものぼります。一軒で、父子・兄弟などふたりも戦死した家が何軒かありました。馬も軍馬として徴発され、飼主は人間と同じように武運長久を祈って、お守りや寄せ書きを首につけて送り出しました。

日の丸の寄せがき

徴用・学徒動員

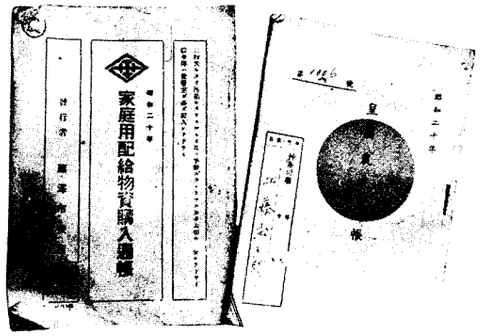
戦争に勝つためには、遊んで暮らすことは許されません。店員さん、職人さん、娘さん、あらゆる人々が軍需工場などで働きました。中学生も、ほとんど毎日工場や勤労奉仕にかり出されました。

また、農村では作物が少しでも多くとれるように、土地改良工事が行なわれました。市道村岡線の北側、坂下の水田もその一つで、ここは湿田のため二毛



悲しい戦死の公報

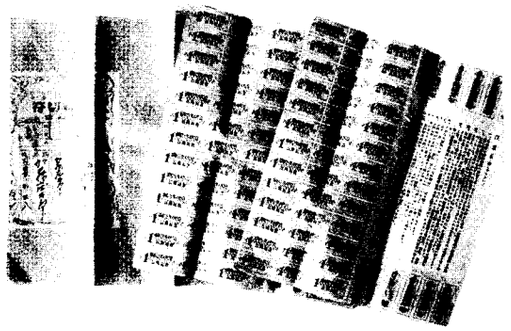
作ができなかったのを、冬でも作物がとれるようにと排水工事がおこなわれました。そのときは、湘南中学校（いまの湘南高校）と藤沢中学校（いまの藤嶺学園）の生徒が毎日百人～二百人も手伝いました。約二町歩（一九八四平方メートル）の田んぼに溝を掘り、そだをうめて田が乾くようにしたのですが、村の人々は、手伝いの中学生に、おやつを作ってその労にむくいました。このように、土曜日も日曜日もない「月月火水木金金」の毎日が続いたのです。



配給通帳

配給制度

やがて、着るものや食べるものなど生活に必要なものすべてがたりなくなってきました。そこで政府は、「物価統制令」を定めてかってに品物を売り買いすることを禁じました。米・麦はもちろん、野菜肉・魚・酒・みそ・しょうゆ・塩・砂糖から、はき物・薪・炭・マッチ・紙などの日用品、衣類・糸にいたるまで、あらゆるものが配給制度になりました。「ひとりどのくらい」と、最底の量がわり出され、配給通帳や衣料切符がないと、どんなにほしくても買うことができなくなりました。



衣料切符

貴金属、金物の回収

武器をつくるために、指輪、時計などの貴金属や、いらなくなった金物、なべやかまなどのほか、かやのつりてのかんやお寺のつりがねまで回収されました。回収場所の小学校の校庭には、これらの金物が山のように積み上げられました。

供出と農家のくらし

あらゆるものが配給となるにつれ、政府は必要な食料をそろえなければなりませんでしたので、農家に対して米・麦・野菜などを田畑の広さによって量を割りあてて、出させることにしました。これを「供出」といいましたが、主食が主でしたので、村岡でも、たとえば、一軒あたり野菜は三畝、（約三〇〇平方メートル）だけ、あとは麦とさつまいもを作るようにとの命令を受けたりしたのです。米の場合供出の割あては一反（約一〇〇〇平方メートル）あたり二・三俵（約一二〇～一八〇キロ）で、でき高や家族の人数によってもちがいました。また供出成績によって、奨励金がもらえたり、酒・砂糖・肥料・地下たびなどの特別配給が受けられたりしました。農家を勤め人の家が手伝うということ

は、あまりなかったようでした。

そのころ、農繁期の託児所が法善寺などで開かれたり、小塚・弥勒寺で共同炊事がおこなわれたりしましたが、あまり利用者はなく、長続きしなかったということです。

空襲と被害

戦争の末期になると空襲は日ましに激しくなり、昭和十九年～二十年（一九四四～五年）静かな村岡の上空にもアメリカの飛行機の爆音がひびくようになりました。二十年四月、五月の横浜空襲のときは、焼夷弾の落ちていくのが手にとるように見え、炎は夜空を真っ赤にそめました。東海道線は不通になり、焼け出された人々が線路ぞいに、すすけた顔でノロノロと続きました。横浜に続いて七月には平塚もひどい被害を受けました。

村岡では、アメリカの戦闘機一機が、機銃掃射中、高圧線にひっかかって柄沢（いまの藤が岡）の農家に落ち、二軒が焼け、五人がなくなったほか、同じ日に機銃掃射の弾にあたって、ひとりがぎせいとなりました。

農繁期の託児所

連合軍の宣伝ビラ

疎開者とそのくらし

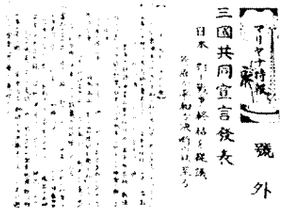
空襲が激しくなると、都会から子どもや老人が疎開（引っ越し）してきました。その上、家を焼かれた人たちも親類や知りあいをたよってつぎつぎにやってきました。ある家では、子どもだけで十八人も預かったということです。

こうして都会から疎開してきた人々を疎開者といいましたが、衣類は米や麦と交換し、野草をつんだり、いものつるまで食べるなど、そのくらしは大へん苦しいものでした。

軍隊が村に分宿

二十年（一九四七年）二月ごろになると、アメリカ軍の相模湾上陸にそなえて、海軍や陸軍の部隊が藤沢・片瀬・辻堂に配置されました。そのうちの小隊が村岡にも駐屯し、小学校の教室、お寺、大きな家などが宿舎にあてられました。小隊は防空壕を掘ったり、竹槍訓練などをおこないました。

七月すぎになると、艦砲射撃や高射砲の音がひびき、不安と緊張は日ごとにた



降伏をよびかける宣伝ビラ

かまっていきました。

九、終戦後の村岡

終戦。昭和二十年（一九四五年）八月十五日、日本が降伏して戦争は終わりました。

丘から眺める相模湾は、アメリカの軍艦や輸送船でうまりました。その数のたくさんなこと！ ある人は、それをみて、「ああ、戦争は終ったんだなア」としみじみ感じたと話しています。

やがて、アメリカ、イギリスなどの連合軍が、占領軍（進駐軍とよんだ）として上陸してきました。

この付近では手広の、いまの鉄道公舎のあたりにアメリカ軍が来てカマボコ型の兵舎が建てられました。

一方、日本の軍隊は解散して、徴兵された人々がつぎつぎに帰ってきました。軍需工場はつぶれ、失業者があふれました。

あらゆる秩序がくずれ、なにもかも混乱しました。

帰って来た兵隊さん

日本の軍国主義は根こそぎもぎとられ、「民主主義」という聞きなれないことばに、とまどいながら、いわゆる戦後がはじまり、人々のくらしは大きくかわっていきました。

インフレ

衣・食・住どれをとっても満足なものはなく、ほしいものがひどく少ないため「闇」（高い値段でこっそり売り買いすること）が、さかんにおこなわれました。

また、お米と着物、時計と野菜などというように物と物とが交換されました。農家でない人々もわずかな庭を利用して野菜などを作りました。

塩がなくて、江の島から海水をくんできて、飲んだり、塩を作ったりしました。稲村が崎の海水は塩が濃いときいて、わざわざ出かける人もあったということです。

ほこりをかぶっていたはたおりの道具を出してきて布を織ったり、おかあさんの洋服をなおして子どもに着せるなど、みんな苦労をしました。

こうしたなかで、お金の価値はますますなくなり、インフレ（お金の値うちが下がり物価がどんどんあがること）は、さらにひどくなりました。政府は昭和二十一年（一九四六年）銀行などの預金をかっ

てに引き出せないようにしたり、新しいお金を発行し、ふるいお金ととりかえさせ、いま持っているお金も自由に使えないようにしたりしましたが、どうしてもインフレをなくすことはできませんでした。

農地改革

新憲法（日本国憲法）の発布・学制の改革（六・三制になる）公職追放（戦争に関係した人を、おおやけの職業につけさせないこと）など、目まぐるしい動きの中で、村岡にとって一番大きなできごとは、昭和二十一年（一九四六年）からおこなわれた農地改革でした。

農地改革は〝小作農の大部分を自作農にする。政府が二年間に地主の持っている小作地の大部分を買いあげて、現在の小作農に売りわたす〟というものでした。

不在地主（村に住んでいない地主）、お寺、神社などの小作地は全部開放されました。ただし、お寺などでは住職が自作していることにして一部が残されました。

もともと村にいた地主や農業をしながら一部を貸している人には、七反（約六九〇〇平方メートル）

証紙をはった旧円

農地改革ポスター

までという制限がつけられました。また、自作農の土地も農地調整法という法律によって二町七反（約二六九〇〇平方メートル、貸地七反もふくむ）までしか持つことができなくなりました。

このため、よそにいた人がもどってきたり、勤めをやめて農業に転業したり、小作地をとりあげるなど地主と小作人との争いがあちこちにおこり、農地委員会に問題がたくさんもちこまれました。政府の買いあげ価格は、畑一反（九九二平方メートル）が、たはこ三箱分にしかならなかったそうです。

こうして、農家の所有する田畑の地図は、がらりとぬりかえられました。

くずれた家族制度

民法の改正によって家族制度がこわれました。これまで「家」は長男が継ぎ、財産のほか、親の世話やその他のいっさいを取りしきって来ましたが、改正によって兄弟は平等の権利と義務を持つことになりました。しかし村岡ではまだ長男が重く見られ、次、三男は土地、家をもらって分家するものが多

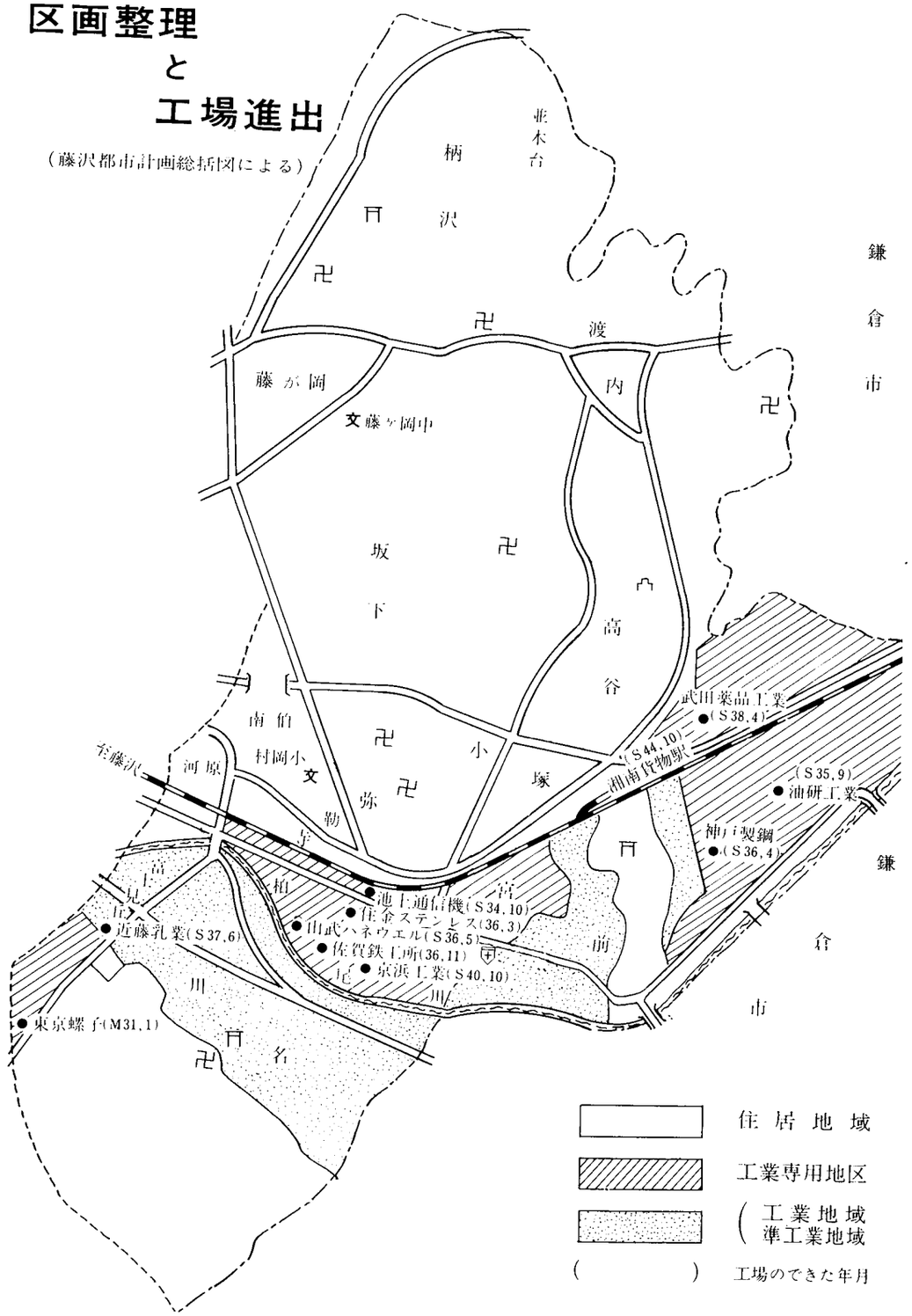
反当り価格

	政府買上げ価格	一般価格
田	220 ～300 円	780円
畑	130	330
山林		92～96

農地買上げ価格

区画整理と工場進出

（藤沢都市計画総括図による）



いようです。親の職業だった農業を継ぐ人はほとんどいなくなって来ています。

進む区画整理

昭和三十二年（一九五七年）都市計画法によって、工場用地、工場地区、住宅専用地区の線ひきがおこなわれました。村岡地区では、東海道線の南側の藤沢病院から川名橋まで、北側では、武田薬品工業付近が工場専用地区にきまりました。

工場の進出

まず山武ハネウェルの建設がはじまり、ぶどう畑が消えました。続いて佐賀鉄工所・神戸製鋼・油研・住友製かん・武田薬品工業などの会社が、つぎつぎに進出して仕事をはじめました。

道路も大工場の進出や湘南貨物駅が移転してくるにつれて、道幅をひろげたり、舗装したりして整備されていきました。村岡トンネルは昭和三十七年（一九六二年）に、川名の新道が昭和三十三年から昭和三十六年（一九五八～六一年）までかかり完成されました。

昭和36年ごろの小塚

宅地造成

住宅のための宅地造成も急ピッチで進められ、ブルド

ーザーやショベルカーがうなり、ダンプカーがほこりをたてて走るようになりました。

緑の山が消え、田畑がうまっていきます。御幣の山には、昭和四十一年（一九六六年）に藤沢団地ができ、たくさんの人々が住むようになりました。村岡小学校の裏山はけずられ、南伯団地として多くの住宅が建ちました。坂下地区も住宅地にかわりました。高谷、渡内地区では大がかりな宅地造成がすすめられています。

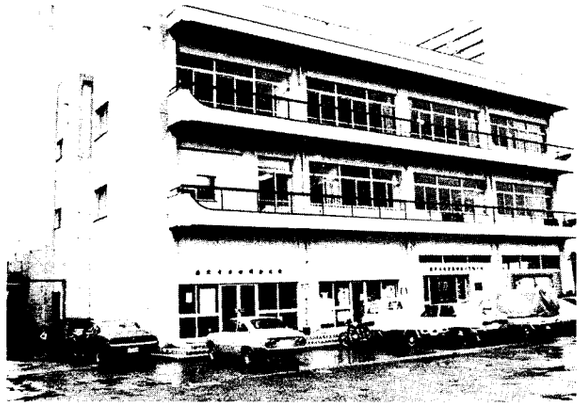
湘南貨物駅

かわっていく農業

戦後の混乱期をすぎると農業の方法も大きく変わりました。鍬やすきは耕運機やバインダーにかわり、農薬や化学肥料がさかんに使われるようになりました。

このように農機具や農業技術がすすむ一方では、手間をはぶいて収益をあげるため、ビニール栽培や果樹・花・芝・植木などの栽培が目立ち、農業の内容も大きくきりかえられました。

宅地造成


村岡公民館

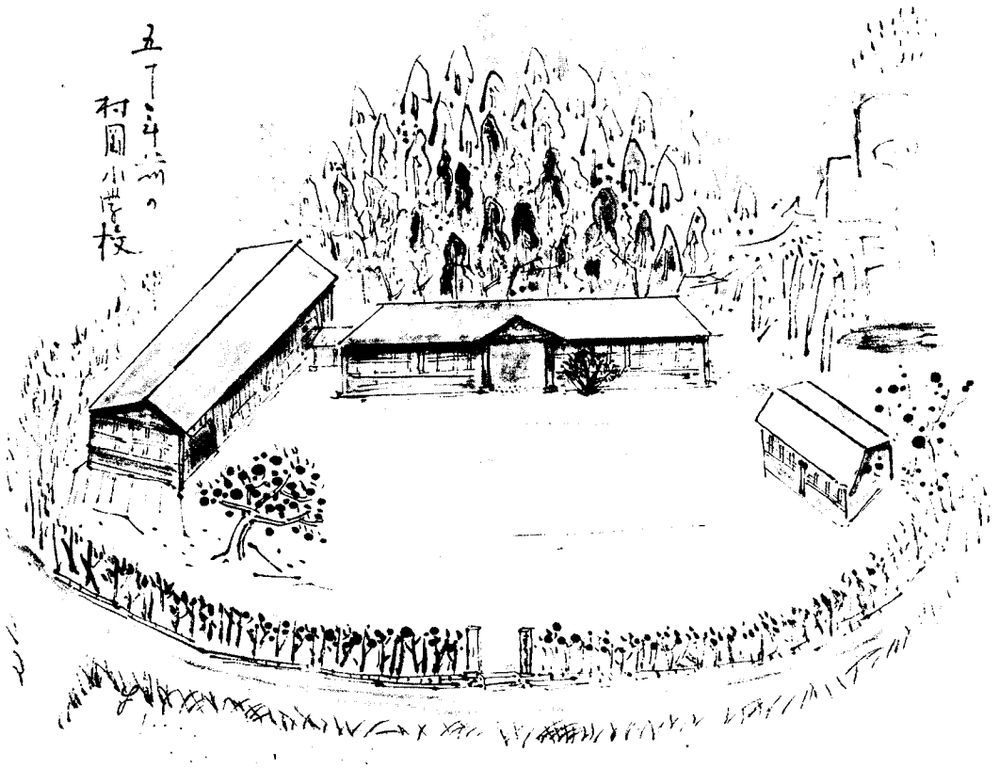
田畑を区画整理などで手ばなしてサラリーマンになったり、土地を利用してアパートや貸家を建てたり、経験をいかして造園業（植木・庭つくり）にかわる人など、長い間、村岡をささえてきた農業は、大きな曲りかどにきています。

整っていく環境

井戸が水道になり（昭和三十一年から）、まきや炭がガスに、リヤカーや自転車は自動車にかわりました。電話もふえてきました。洗濯機・冷蔵庫・テレビなどの電気製品がいきわたり、生活は大へん便利になりました。

また、昭和三十六年（一九六一年）には藤ケ岡中学校が、四十一年（一九六六年）には村岡公民館が建ち、私たち住民の教育環境も充実してきました。道路の整備がおこなわれる一方、信号機・歩道橋・ガードレールなど、人命尊重のための安全施設もつぎつぎに作られるようになりました。

学校のあゆみ



山下平四郎・画（大正7年卒業生）

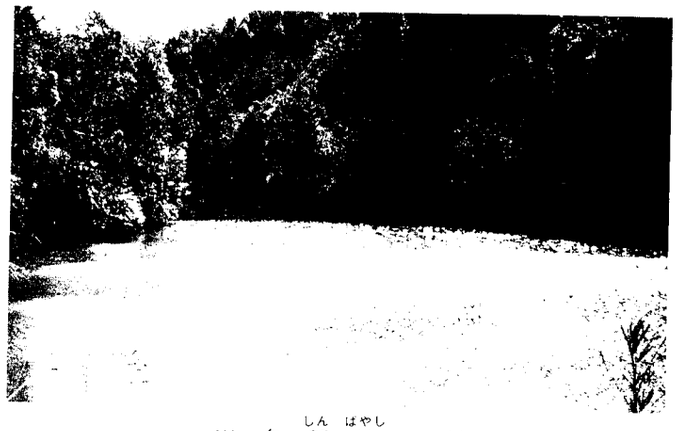
十、これからの村岡

きょうも、山が切りくずされていきます。静かな農村のおもかげもわずかに残るだけとなりました。

しかし、人々はたくさんの家が建ち、工場がふえることが〝発展〟ではないことに気づきはじめました。自分たちの生活を守るための住民運動もはじまりました。

藤沢市では、〝緑と太陽〟の街づくりをすすめ、川名に森林公園をつくることを決めました。そこは、かって原始のころ、村岡の祖先の人々が、緑の山野と青い海の幸にはぐくまれて住みつき、〝むら〟をつくりはじめたゆかりの地です。

工場公害、車公害など、わたくしたちのまわりには問題がいっぱいあります。むかしからの村岡の人も、新しい住民も、たがいに手をとりあって、健康で住みよい村岡にするように努力していきたいものです。

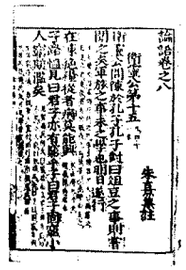


川名新林（しんはやし）の池

一、学校のできるまで

寺子屋と私塾

小学校ができる前は、武士の子どもは藩の学校で「四書五経」のような、むずかしい漢学を勉強しました。町や村の子どもは、神主さん・お坊さん・お医者さんなどが先生で、「往来物」（寺小屋用に編集された教科書）を中心に、読み・書き・そろばんを寺子屋や私塾（個人でひらいている学舎）で勉強しました。

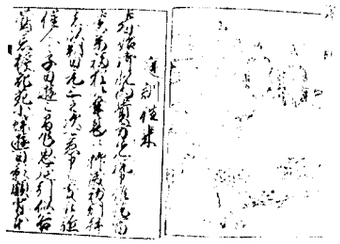


論語

御手本

藤沢では、小笠原東陽先生が羽鳥村に読書院（のちに耕余塾）を開き、東京、横浜あたりからも勉強にきたといわれます。

村岡の付近では、川名・渡内・弥勒寺・宮前などに、「選喬学舎」（川名）のような私塾や寺子屋があり、近くの子どもたちが通って、習字やそろばんをならいました。



庭訓往来

学制がしかれる

明治四年に文部省が設けられ、明治五年、学制（学校のきまり）がしかれました。政府は「どこの家でも一人も勉強しない人がいないように」という「おふれ」を出しました。身分や男女の区別なく、だれでも六歳になったら学校に通えるようになったのです。学問をしたくてもできなかった江戸時代にくらべるとよろこばしいことでした。全国を八大学区、三十二中学区、二百十小学区に分けて、各学区ごとに大・中・小学校をつくるしくみもできました。

二、明治のころの学校

(一) 開校のころ

村岡学校うまれる

わたしたちの村岡にもこうした気運がおこり、明治六年六月、弥勒寺村弥勒寺に、第十中学区第百十七番小学村岡学校がうま

学校の儀明後十五日弥々開校仕り度候間　兼而御打合申し置候通り　当日には村々戸長中並に生徒お連立ち午前十時より十二時迄御苦労様乍ら御出頭入学なさるべく候

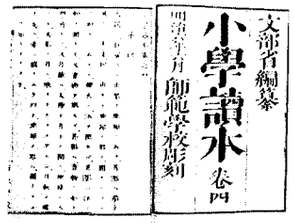
弥勒寺村役人

宮前小塚高谷渡内

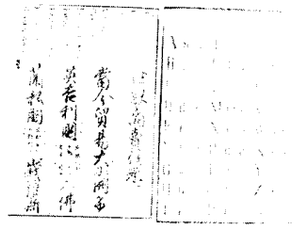
各村戸長中

彦坂家に残された古い文書より

れました。先生は渡内で私塾を開いていた、お医者さんの福井文中先生で、お寺のくりが教室でした。弥勒寺・宮前・小塚・高谷から、男三十三人、女八人の生徒が通ってきました。授業料として月に一銭九厘（いまのお金で二～三千円くらい）をはらいました。



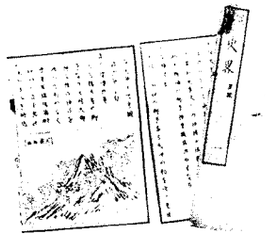
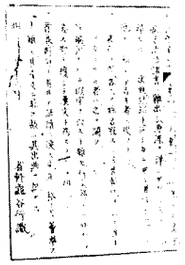
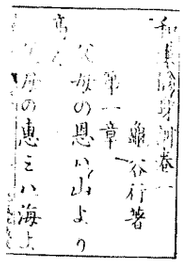
小学読本巻４


世界商売往来

そのころ、政府が教育に使う予算はとても少なく、村の家々からお金を集めて学校の費用にあてました。子どもを通学させることに賛成しない家には、学校の世話人が一軒一軒まわり、入学をすすめました。明治七年には「子どもが生まれたら、桑三十本、茶二十株、こうぞ・うるし・梅・桃・梨・柿を植えて、それが大きくなったら売って、学費にあてなさい」と、神奈川県令（いまの知事）から通知が出されました。

勉強した学科

このころ、学校では習字・歴史・地理・理科・農業・修身などを学びました。教科書はヨーロッパやアメリカで使っているものを、そのまま日本のことばになおしたものです。




和漢修身訓巻１

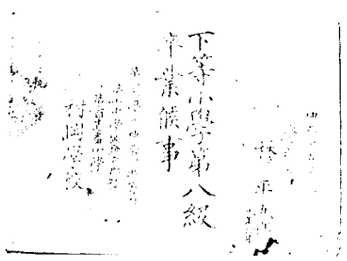
このあと、学校は一時、法善寺へ移りました。明治七年になると、児童数は五十人（男四十人、女十人）にふえました。村の子どものうち、男は十人のうち六人、女は十人のうち一人ぐらいの割合でしか学校へ行けませんでした。

上等小学と下等小学

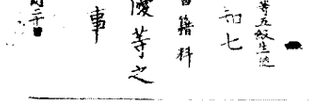
このころの小学校は、下等小学四年（六歳～九歳）と上等小学四年（十歳～十三歳）とにわかれていました。村岡学校は下等小学で、八級から進み始めて一年間に二級ずつ進み、一級で卒業しました。

卒業証書と優等賞

進級するときには、県から役人が来て、付近の学校の生徒を集め二、三日がかりで同じ問題を試験しました。合格するごとに卒業証書がもらえたので、下等小学をおえると卒業証書は八枚にもなりました。



八級卒業証書



優等賞

また、成績のよかったものには優等賞が出され、その名前を大きく書き、村人のみやすい場所にはり、子どものはげみとしたということです。

(二) 開校後のようす

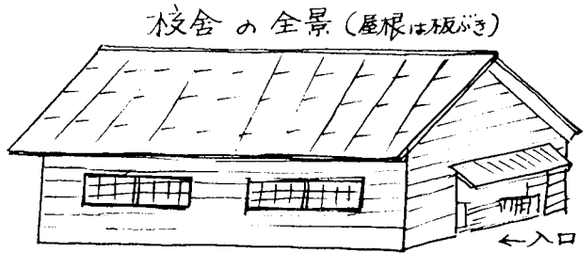
はじめて校舎ができる

児童数が少しずつふえたので、明治八年、弥勒寺村五二六番地（現在の村岡幼稚園のとなり）に初めて校舎を建てて引っ越しました。平屋で教室は一つ、障子戸で床はすきまだらけ、寒さには苦労したようです。一年から四年まで一学級で、先生は一人、それに補助の先生が一人、という小さな学校でした。

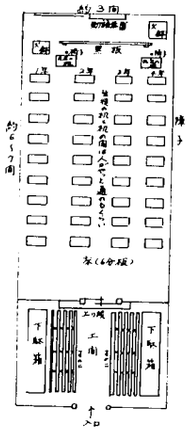
このとき、川名にあった「川名学校」がいっしょになり、川名や手広の子どもも村岡学校に通ってくるようになりました。

学区制がとりやめになる

明治十二年、学制が改正されて、学区制がとりやめになり、町や村ごとに学校をおくようになりました。



はじめての校舎


教室の配置図

明治十六年には、弥勒寺の出身の十四歳の山下藤吉先生が、また翌十七年には村岡学校第一回卒業生の沖山豊吉先生が、それぞれ村岡学校の先生になられました。

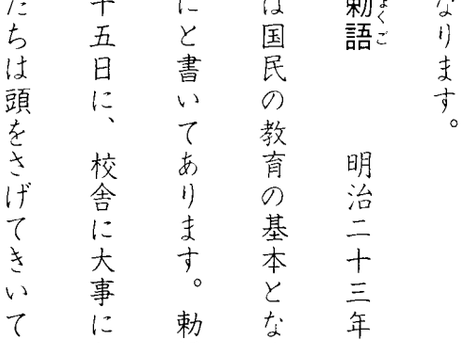
明治十八年になると、一年に一級すすむようになり、これが学年制のはじめになりました。

渡内・柄沢も学区に

明治二十一年四月に市町村制ができ、手広は深沢へ、柄沢は、藤沢大富村からわかれて、村岡学区に入りました。このときから、弥勒寺、宮前、高谷、小塚、渡内、川名、柄沢の七部落を合わせ村岡村としました。これ以来、昭和十六年、藤沢に合併するまで鎌倉郡村岡村が続くことになります。

教育勅語

明治二十三年（一八九〇年）十月に教育勅語が出されました。勅語は国民の教育の基本となるもので、天皇に忠義をつくし、親に孝行するようにと書いてあります。勅語のうつしは全国の学校に配られ、村岡でも十一月十五日に、校舎に大事にしまわれました。祝日の式には読みあげられ、子どもたちは頭をさげてきいていました。


教育の基本となった教育勅語

教育勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹フルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ啻リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

教科書も勅語の考え方によって作られるようになりました。

赤ちゃんをおんぶして

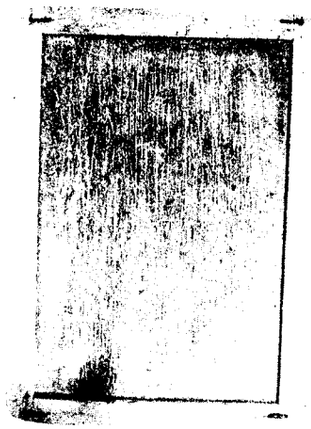
このころ、村の男の子はほとんど学校へ通っていました。女の子の中には、小さい弟や妹をおんぶして通学する子もいて、背中の子がなくと席を立ってあやしながら勉強しました。

着物で登校、やきいも弁当

明治二十四、五年に入学したおじいさんは、そのころの子どもの様子をつぎのように話してくれました。

そのころの通学風景

「わたしらア地織りの着物（自分の家で織った木綿の着物）に帯しめてエわらぞうりはいてよオ　学校へいったもんだ。男も女も着物がよごれねえように、前かけしてたもんだ。勉強の道具や石板、石筆を風呂敷にくるんで肩にしょってよオ　鉛筆なんて、きちょうなもんで、高等科へ行ったもんしか使わなかったよ。書き方の清書の紙は、半紙をとじて、ぶらさげるようにして、清書したあとは、紙がまっ黒になるまで練習したもんサ。弁当なんか持っちゃあいかなかったね。



石　板

昼めしゃあ、家まで喰いに帰ったもんだ。川名の者は、線路をつっきって、いまの山武のところから、御霊神社の信号のあるところまで、田や畑ん中を通り、川を渡って行ったもんだア。家の遠エ者だけ弁当を持ってったが、麦めしに、おかずは梅干ひとつぐれえだったア。焼き芋のときもあってよ。弁当を持ってこられない子もいたっけねェ。……」。

義務教育四か年になる

明治二十八年、日清戦争がすんで、教育がますたいせつだということになり、明治三十三年には、文部省は尋常小学校を四年ときめ、義務教育としました。小学校では授業料がなくなりました。

校舎が現在のところに移る

いままでの場所では狭くなったので、明治二十九年に現在の場所、（弥勒寺三五六番地）に移転することになりました。

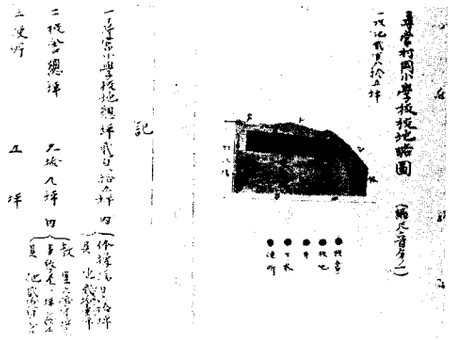
敷地の総面積が二八五坪（九四二平方メートル）、普通教室三、特別教室（裁縫室）、事務室、体操場（運動場）一六〇坪（五二九平方メートル）になりました。

明治のおわりごろの学期

第1学期	4月	～ 7月まで
第2学期	8月	～ 11月
第3学期	12月	～ 3月

明治のおわりごろの校時

4月～6月	午前8時 ～ 午後3時
7月～9月10日	午前7時 ～ 正午
10月～3月	午前9時 ～ 午後3時



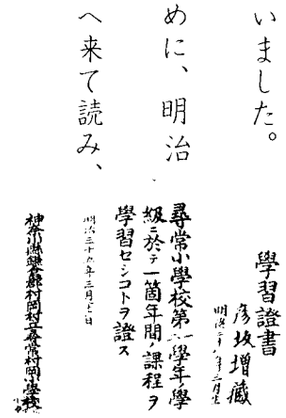
明治29年の校地の略図

当時、まだ女子の入学率が悪かったので文部省は全国の学校へ「女子もすすんで学校へ行くようにするため、裁縫科をおくように」という通知を出しました。そこで、学校では裁縫室を建てたのです。工事は六月から九月まで続いたので、その間は学校は休みになりました。

このころは、小学四年を卒業すると高等科でもう四年勉強しました。村岡には高等科がなかったので、子どもたちは遠い道を歩いて、藤沢小学校か深沢小学校（鎌倉）に通わなくてはなりませんでした。

補習科がおかれる

高等科に行くのには、お金がかかったので、行かれない人がたくさんいました。（授業料は、一か月に三十銭）。勉強したくても高等科に行けない人のために、明治二十九年四月、補習科がおかれました。男子は、ひるま働き、夜、学校へ来て読み、書き、農業のことを、女子は農業のひまの時期に裁縫を習いました。



學習證書
彦坂增藏
明治三十一年三月生
尋常小學校第六學年學級ニ於テ一箇年間ノ課程ヲ學習セシコトヲ證ス
明治三十九年三月十日
横須賀郡鎌倉村岡尋常小學校

全校で一学級から二学級へ

いままでは全校で一学級だったのですが、教室がふえたので、一年と二年が一学級、三年と四年が一学級になり、二つの教室で勉強するようになりました。ひとりの先生が二学年を受け持って授業をしました。一つの教室で、一年生と二年生がいっしょに勉強するのですから、一年生の子が、いつの間にか二年の勉強をおぼえてしまったりしたそうです。

小使いさん（用務員さん）が拍子木をならすと、子どもたちは遊びをやめて教室へ入りました。拍子木がチャイムのかわりだったのです。

文部省著作
小學日本歴史一
發賣所 鎌倉郡鎌倉村岡尋常小學校

国定教科書

教科書が国で作られる

これまで教科書は学校によって、自由にきめて使っていましたが、明治三十七年になると全国どこでも同じ教科書を使うようになりました。このころの教科書をみると、一年はカタカナだけ、二年でひらがなを学習するようになっています。

沖山豊吉先生

明治三十六年、村岡小学校の最初の校長先生に、沖山豊吉先生がなられました。先生は村岡小学校の第一回の卒業生でした。小塚に生まれ、小さい時から勉強が好きで、とてもよく努力され、村岡小学校で、三十年ものあいだ熱心に教えてくださいました。村の人たちで先生の教えを

うけない人は、ほとんどいないくらいでした。

明治三十九年に、村岡小学校の中に実業補習学校が作られると、そこの校長先生もかねたので、たいへんいそがしく、からだのぐあいの悪いのをむりして働いていられるうちに、とうとう村の青年会の話し合いのとき、倒れられ、村の人におしまれながら、四十九歳でなくなられました。

村の人々は、先生をしのんで、大正八年にりっぱな顕彰碑を建てました。現在、その碑は運動場の南側にあります。

沖山先生60回忌ようす

義務教育六か年になる

明治四十一年に、いままで四年間だった義務教育が六年間にあらためられました。児童数もふえて校舎が増築され、三教室になりました。

明治四十四年になると、村の子どもたちはひとり残らず学校へ行くようになり、そのために県から表彰されました。

三、大正のころの学校

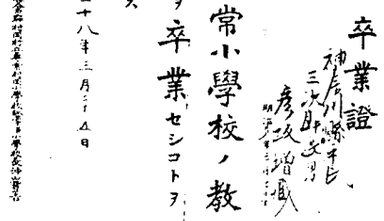
高等科ができる

大正にはいると村岡でも高等科へすすむ子どもが、ふえてきました。そこで、大正四年に高等科がつくられました。授業料は前から変わらず三十銭で、そのころでは、かなりのお金の価値がありました。（いまのお金で三千円ぐらい）校名も尋常高等村岡小学校とかわりました。大正六年には青年団ができ、高等科を卒業した人たちがはいり活躍しました。

大きくなっていく学校

だんだん児童の数もふえてきて、教室がたりなくなったので、大正三年、戸塚の小学校から古い校舎を払い下げてもらって、父兄が東海道を牛車ではこび、三教室が増築されました。

大正十年には、村の人々の協力で理科室ができ、大正十一年になると、長い間の願いだった校庭がひろげられました。（二七〇坪、八九〇平方メートル

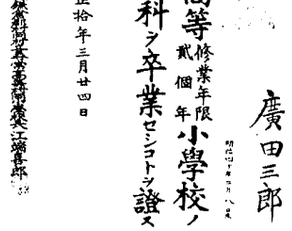


卒業証書

尋常小學校ノ教科ヲ卒業セシコトヲ證ス

明治三十八年三月二十五日

卒業証書



卒業證書

廣田三郎

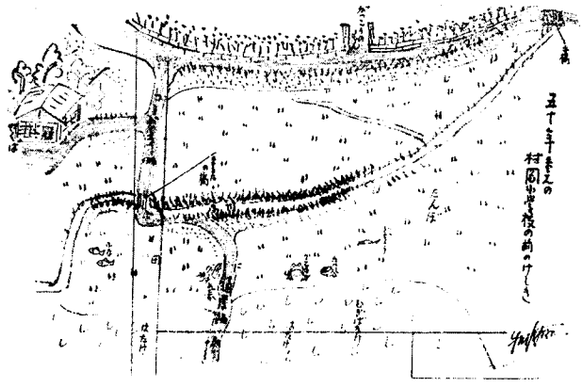
高等科修業年限貳個年小學校ノ教科ヲ卒業セシコトヲ證ス

大正拾年三月廿四日

高等科卒業証書

ル）それまでは、校庭がせまいため運動会ができなかったのですが、これからは、十分からだをきたえることができると、みなおおよろこびでした。

また、高等科の生徒の農業実習地として、学校の近くに田と畑を八畝（七九〇平方メートル）つくりました。大正十五年には、ふたたび三教室を増築し、校庭をさらに一三五坪（四四五平方メートル）ひろげ、学校はだんだん大きくなってきました。



学校付近の地図

『赤い鳥』に投稿

このころは、先生が九人、生徒も三百人余りになっていて、ほとんどの家が農業をやっていました。村岡は小さな村でしたが、活気にみちた村岡小学校は、鎌倉郡でもなかなか評判のよい学校でした。

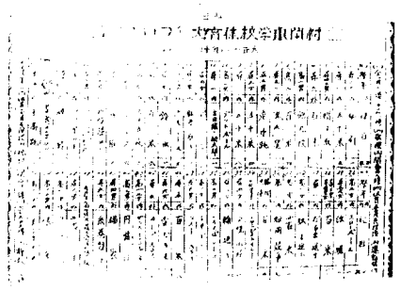
先生方の熱心な指導で、詩や作文を書くことがさかんでした。そのころ、子どもたちによく読まれていた『赤い鳥』（鈴木三重吉が大正七年

赤い鳥

にはじめた児童むけ雑誌）に村岡の子どもも投稿して、「麦ふみ」という詩がけいさいされたこともありました。そのほか、有終団という小学生の夏期自炊徒歩旅行もさかんにおこなわれました。

運動会と学芸会

秋の運動会は、村の人たちもいっしょに参加して、一日を楽しくすごす年中行事でした。また、ひなまつりの三月三日には、学芸会（いまの学習発表会）があり、重箱にごちそうをつめて、家族そろって見学したものでした。レクリエーションのない時代でしたから、この二つの学校行事は、村の人にとってはとても楽しみなものだったようです。



運動会プログラム

楽しかった学芸会

学校のまわり

そのころ、学校のまわりは、ほとんどが田んぼで、運動場の前をきれいな小川が流れていました。校庭からは、東海道線や川名の山々が見え、山すそには、わら屋根の農家がちらばっていました。ときどき、いたちや野うさぎが出てきました。

春になると学校のまわりは一面にれんげ草が咲き、夏は学校帰りに、川でふなやどじょうとりをするのが、なによりの楽しみでした。稲のかけ干しがはじまると稲架のトンネルを通りぬける子どもにイナゴが飛びついてきました。冬は、雪の日だけ教室に大きな火鉢がおかれました。

関東大震災　大正十二年九月一日、二学期の始業式が終わって子どもたちが下校したあと、突然ぐらぐらと大地がゆれはじめ、東側校舎の半分が倒れてしまいました。理科室の薬品が棚から落ち白煙があがりましたが、先生方が消しとめ床をこがしただけですみました。

この日、地震で倒れた家の下敷になって、宮前の二年の女の子が死にました。悲しいできごとでした。

全国から慰問品がぞくぞくと送られてきましたが、アメリカからズボンやドレス、オーストラリアからコンビーフのかんづめなど、村の人々にはめずらしいものもあったということです。

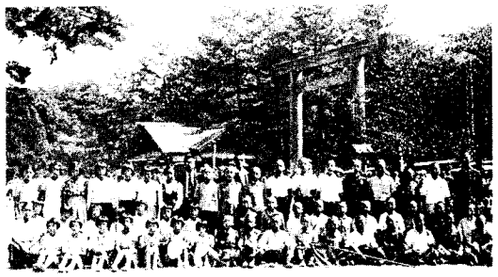
学校はおよそ半月間休校して、先生も生徒もたてなおしにがんばりました。

学校の裏山で

四、昭和のはじめの学校

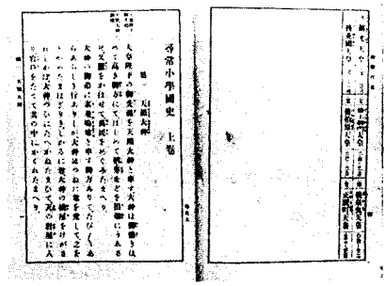
ご真影　このころから、日本はしだいに中国大陸へ力をのばしはじめ、昭和六年、満州事変をきっかけに戦争はひろがる気配をみせてきました。

昭和三年、村岡小学校もご真影（天皇の写真）をいただきました。このころの修身の教科書には、「日本は神の国であり、天皇は神です。天皇に忠義をつくし、親孝行する人がりっぱな国民です」と書いてあります。子どもたちは、登校、下校のとき、かならずご真影にむかって深く頭をさげました。お召し列車（天皇の乗られた列車）が通過するときは、川名の川岸に整列してお見送りしました。



関西修学旅行

神社の祭礼　神社の祭礼（おまつり）の日は、午後から授業は休みになりました。特に村社である宮前の御霊神社の祭礼には、五、六年の子どもたち



尋常小学「国史」

が式に全員参列しました。

毎月、一日、十五日には、朝早く起きて、近くの神社や道路の掃除をするのが、子どもたちのたいせつな仕事でした。

このころ修学旅行に関西へでかけた六年生は、伊勢神宮へおまいりしたものでした。昭和十三年には、学校にも伊勢神宮の神棚がまつられました。

このころの遠足

一年　竜口寺
二年　江の島
三年　鎌倉（徒歩）
四年　花月園
五年・六年
横須賀・熱海を交互に
高一・高二
箱根・多摩を交互に

校歌ができる

昭和五年、当時の寺内時二校長先生の作詞による校歌ができました。寺内先生は、村岡の歴史を研究され、平良文ゆかりの村岡の子どもたちが、郷土をたいせつにし、りっぱに育つようにと、作詞されました。しかし、この校歌はいま歌われていません。

「よく学び、よく遊べ」

職員室前の校庭に、二宮金次郎の像があります。

これは、当時の子どもたちが、みんなで作業してためたお金をもとに、昭和十三年

校歌

作詞　寺内時二

一、紅の旗　なびかせつ
武士道たたえし　英雄の
五郎が館　蒼丘に
永遠に萌えなん　われらが故郷

二、歴史は永し　一千年
和武の帝　武威高く
今に来たりし　学窓に
鍛え磨きし　われらが体

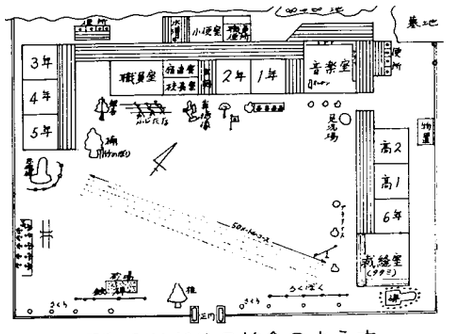
三、東西の道　わが駒に
光新たに　燃ゆる時
ああ　徳孝の人として
備え育まん　われらが学校

につくられたものです。

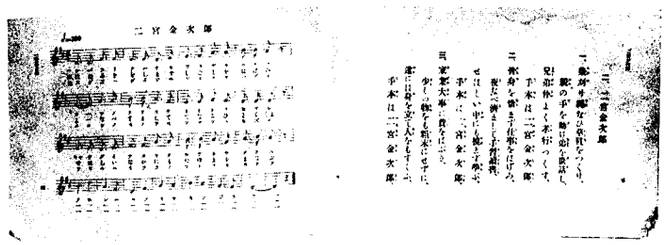
先生から、二宮金次郎のように親を助けてよく働き、まじめに勉強するようにと教えられました。このころの修身の教科書には「ヨクマナビ　ヨクアソベ」と書いてあります。

学校から帰ると、子どもたちは、田畑の草とりをしたり、田植え、稲かり、だっこくなど、家の手伝いをするのが日課でした。子どものなかには、朝、学校へいくまえに草刈をしていくという感心なものもいました。

三年生以上の子どもは、学校行事の一つとして「ずい虫とり」をしました。苗代につく稲の害虫、ずい虫をとって、竹筒に入れます。たくさんとると産業組合が買いあげてくれました。



昭和のはじめの校舎のようす


小学唱歌（二宮金次郎）

五、戦争中の学校

出征兵士をおくる

昭和十二年、日中戦争がおこり、日本は中国大陸の奥へ戦場をひろげていきました。それにつれて、村岡でもおとうさん、おにいさん、それに先生までもが出征していったのです。校庭の「忠魂碑」(註三六頁参照)の前に全校生徒が整列して、村の人といっしょに出征兵士を見送りました。遠い戦場で戦死した兵隊さんの遺骨が帰ってくる時は、みんなで藤沢駅まで出迎え、自宅まで送っていきました。

国語教科書（昭和16）

日の丸弁当

戦争がはげしくなるにつれ、くらしはだんだん不自由になってきました。そこで、週一回はおかずが梅干し一個だけという「日の丸弁当」を持ってくることになりました。

そのころは、げたやズック靴をはいて通学していましたが、ぜいたくはできないと

鎌倉郡の村岡小学校最後の卒業写真

素足にわらぞうりの子どもも出てきました。

剣道となぎなた

修身の教科書で、昔の偉人の話などを勉強し、きびしいしつけを受けました。朝礼では、頭を少し動かしても、先生に叱られたり、ムチがとんでくることもありました。体育の時間には、男子は「剣道」女子は「なぎなた」をならいました。手旗信号などもならったそうです。

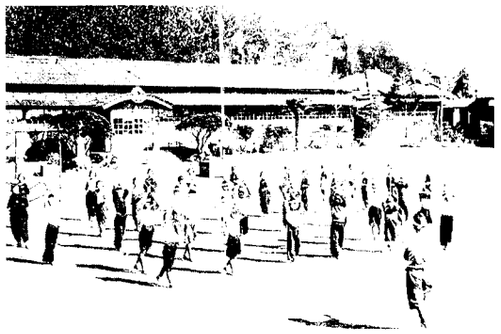
昭和十四年に校旗がつくられました。

藤沢第五国民学校

昭和十六年十二月、日本は、とうとう太平洋戦争へ突入しました。この年の四月、学校は、小学校から国民学校と名まえが変わりました。国の子どもとして育つように、という考えからです。戦争の影響が、はっきりと学校に出てきました。

六月には、村岡村が藤沢市に合併したので、村岡国民学校は、藤沢第五国民学校とあらためられました。

戦争中の運動会（昭和19年）


昭和17年ごろの体操

防空頭巾

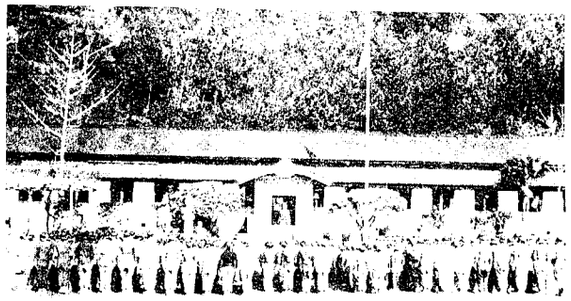
防空頭巾と救急袋

戦争は昭和十九年ごろから、ますますはげしくなり、しばしば空襲がありました。そのたびに、学校にいてもすぐ勉強をやめて家に帰ったり、また、夜の空襲では、ねていてもすぐ起きてひなんしなければなりませんでした。

子どもたちは救急袋と防空頭巾を背負って通学しました。もう落着いて勉強することはできませんでした。学校の裏山の洞穴を利用して防空壕をほり、そこへ避難する訓練をしたり、バケツリレーで火を消す練習をしました。竹やりで敵を倒す訓練もしました。

また、ドクダミ、オオバコなどの薬草をとって供出したり、麦ふみ、落穂ひろい、松根油とり、くずかき（落葉、たきぎひろい）をする毎日でした。

戦争中の先生方の服装



戦争中のようすがわかる朝礼（昭和19年）

六、戦後の学校

(一) 新しい学校づくり

二部授業とすしづめ教室

はげしかった戦争も、昭和二十年八月十五日に終わりました。空襲で焼けてしまった学校は全国にたくさんありましたが、さいわいにも村岡小学校はぶじだったので、九月から授業が始まりました。

東京や横浜などから疎開してきていた子どもたちで児童数がふえたので、近所の家をかりて勉強していましたが、ますます教室が足りなくなり、午前のクラスと午後のクラスにわかれて、二部授業がおこなわれました。それでも、一学級六、七十人の教室でした。

すみをぬった教科書

日本に進駐してきた連合軍司令部は、修身、日本歴史、地理の授業をやめるように命令しました。

また、教科書の中で、戦争に関係のある部分はすみでぬりつぶして使わせたの

すみをぬった教科書

終戦直後の学校の門札

で、学習するのにたいへんふべんでした。しばらくして、新聞紙ぐらいの大きさの紙に印刷されたものを切って、とじ合わせ、自分で一冊の本を作り、それを教科書として使うようになりました。

苦しい生活にたえて

はげしかった戦争のために、くらしに必要な品物や食べ物が不足して、人々は苦しい毎日をおくっていました。学用品もあまり店にはなく、ノートはザラザラした紙で、えんぴつも折れやすいものでした。石けんはすこし配給されるだけで、服もよごれ、ノミやシラミがわいて困りました。学校では、週に一度、DDTを子どもたちの頭にまいて消毒しました。

元気な子どもたち

このようなときでも、村岡の子どもたちは、広い自然に囲まれて、元気に野山をかけまわって遊んでいました。水のきれいな柏尾川で釣りをしたり、もじりをかけたり、泳いだり、裏山でターザンごっこやかくれがづくりをしたり、秋にはアケビをとったりしました。

のどかだった柏尾川のつり

六・三制はじまる

昭和二十二年四月、学校教育法ができて、義務教育は小学校六年間と中学校三年間になり、だれでも九年間は学校教育が受けられるようになりました。

むかし	いま
よみかた	国語
つづりかた	作文
かきかた	書写
地理（五年以上）	社会
国史（五年以上）	
算術	算数
理科（四年以上）	理科
唱歌	音楽
図画	図画工作
手工	
裁縫（五年以上女子だけ）	家庭
体操	体育

学習いまとむかし

このため藤沢市でも、東京螺子工場の一部を買い上げて片瀬中学校をつくり、（昭和三十年片瀬山へ移転）片瀬小学校と村岡小学校を卒業した生徒が入学しました。昭和三十六年、藤ケ岡中学校ができるまで全卒業生が通学しました。

学習内よう

勉強の様子もむかしとは、ずいぶん変わりました。修身がなくなり、道徳や特別教育活動の時間ができました。体育は戦前では男女別の種目でしたが、戦後は男女いっしょに鉄棒やボール運動をするようになりました。

また、家庭科では、男子もミシンを踏んだり、女子と協力して調理実習もしています。クラブは自分の好きな学習ができるので楽しみです。テレビも教室に入るようになり、自分からすすんで学習する態度が大きな目標になりました。

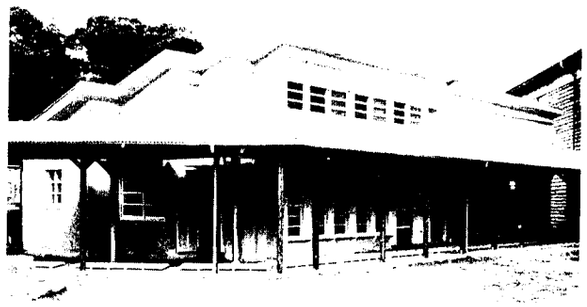
最近では、自動車がふえたので、交通教室などの勉強もするようになりました。

藤沢市立村岡小学校へ

昭和二十二年、藤沢市立第五国民学校から、現在の藤沢市立村岡小学校にあらためられました。

学校給食始まる

終戦直後は食べ物がない苦しい時代でした。子どもたちに栄養のあるものを食べさせようと、全国的に学校給食が始まりました。村岡でも給食場の設備のないまま、週二回の副食だけから始められ、のちにアメリカからの脱脂粉乳のミルクが加わりました。調理場をひろげるため、先生と父母は裏山の岩を取除いて整地したり、野菜を各地区の農家に提供してもらったり、燃料の薪を渡内の山へ取りにいったりしました。家庭科の先生と手伝いの人が調理にあたりましたが、献立には大へん苦労しました。

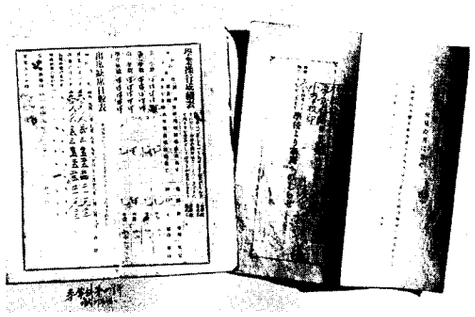


給食室完成（昭和28年）

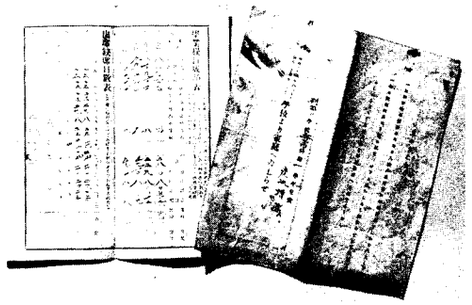
通信簿のうつりかわり

成績表のつけ方も変わりました。明治のころは十点法と甲、乙、丙でつけました。昭和になると、初めは十点法、のちに甲、乙、丙になり、国民学校では優、良、可となりました。戦後は五段階の評価が続いたあと、三年前から現在の「家庭への知らせ」になりました。

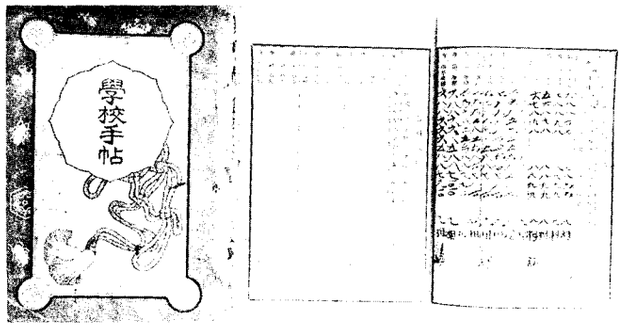
通知表のうつりかわり



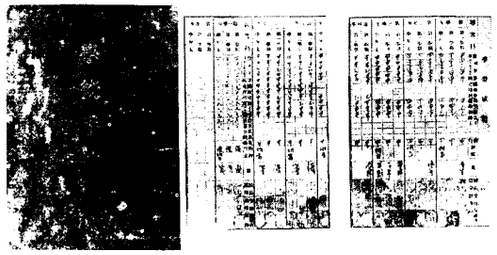
明治時代



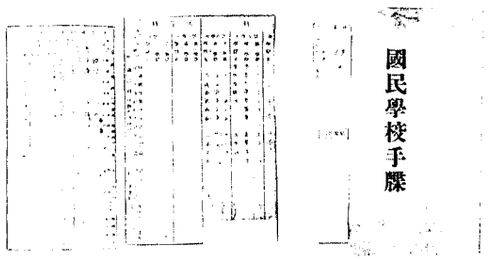
明治時代



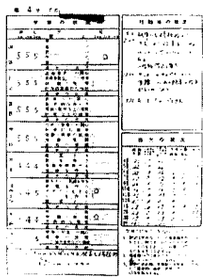
大正時代



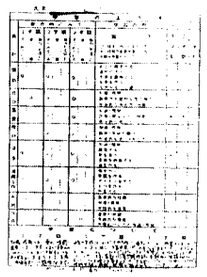
昭和のはじめ



戦争中～終戦直後



戦後　五段階評価



現　在

広くなった校庭

このころの校舎は、田んぼの中の小高いところにあり、運動場は、直線で五〇メートルがやっととれるような狭いものでした。

児童数がふえるにつれて、もっと広い運動場がほしい、ということになり、昭和二十三年、村岡の人々が労力奉仕をして、運動場は一二三〇坪（四〇六〇平方メートル）にひろがりました。工事は、小川（岩瀬川）を暗渠（地下の排水溝）にして、高いところの土をけずり、田んぼを埋めたてて、おこなわれました。

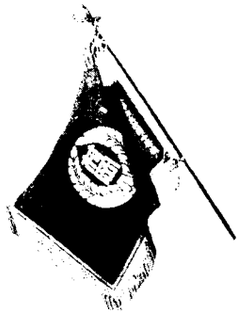
ひろげられた校庭

二階建ての校舎になる

戦争中、手入れも十分できなかった校舎は古くなり、戦後児童数もふえたので、教室はますます足りなくなり、不自由なおもいをしていました。

昭和二十五年になると改築工事が始まり、第一校舎二階建六教室が、二十六年二月には第二校舎二階建六教室が、二十八年に第三校舎二階建六教室と給食調理室が完成しました。各教室を結ぶ校内放送の設備もととのって、子どもたちは、落着いて勉強できるようになりました。

二階建てになった校舎



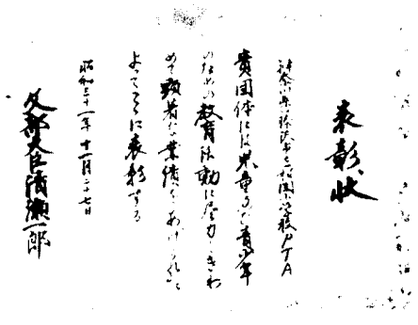
校旗

昭和二十五年には、新しく校旗がつくられました。

PTAの表彰

昭和二十三年、子どものしあわせのため、父母と先生が手をつないでいこうと、PTAができました。このころのPTAは、野菜バザーをしたり、夏の夜、映画会をしたりして、活動資金をつくりました。

映画館が遠く、テレビのなかった村岡の子どもたちは、大ぜい集まって、楽しい時をすごしました。こうした活動に対して、昭和三十一年十一月、文部大臣から、うれしい表彰を受けました。



表彰状

父兄会長 清瀬一郎

昭和三十一年十一月三十日

PTA表彰状

水道が敷かれる

そのころ、学校の水は三つの井戸にたよっていましたが、夏になると水が足りなくて困ることもありました。昭和三十年、付近の弥勒寺、河原、御所ケ谷地域といっしょに、ようやく学校にも水道が敷かれました。

(二)　大きくのびる学校

現在の校庭になる

昭和三十年、若尾山に大道小学校ができ、村岡小学校からも御所ケ谷地区の五十名ほどの子どもたちが転校していきました。

このころから、村岡にも工場がたつようになって、学校のまわりにも住宅がたち始め、昭和三十二年には児童数は七百人をこえました。学校では将来のことを考え、昭和三十四年、学校拡張期成会をつくり、校庭を一三四〇坪（四四五〇平方メートル）にひろげて、現在の運動場になりました。

コロコロ山

岩石園ができる

昭和三十九年、PTAの労力奉仕で丹沢の川から石を運び、りっぱな岩石園がつくられました。

岩石園

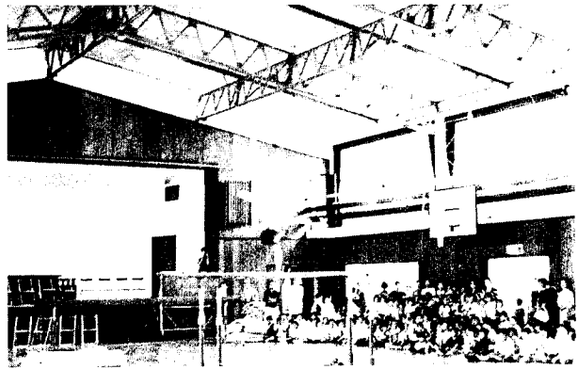
コロコロ山ができる

昭和四十年には、裏山がけずられ南伯の住宅地ができました。このとき作られたのがコロコロ山です。大きなすべり台とトンネルが作られ、楽しく遊べる山ができました。

体育館ができる

昭和四十三年には、鉄骨のりっぱな体育館ができました。それまでは古い講堂（現在の鉄筋校舎の位置にあった）で入学式、卒業式、学芸会をおこない、雨の日には体育などもしました。

しかし、教室が足りなくなって、講堂は二教室になおされました。それからは、式はいつも校庭の青空の下でおこなわれていました。その後、多くの人の努力によって、ようやく待ちのぞんでいた体育館ができて、子どもたちは大よろこびでした。落成式には、東京オリンピックの体操選手で金メダリストの山下選手が模範演技を見せてくれました。



体育館

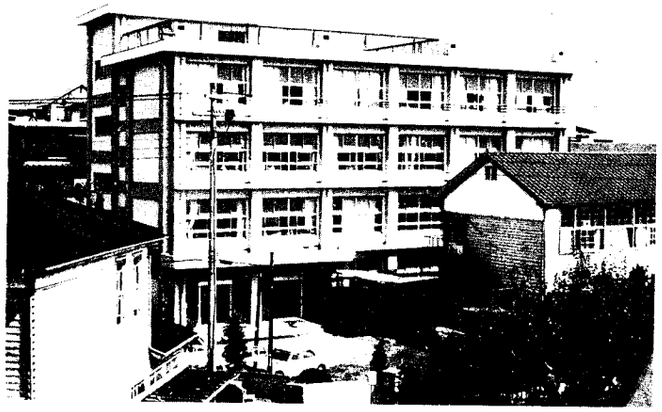
テレビと遊び

村岡ではどこの家にもテレビがはいるようになり、子どもたちの生活が変わりました。学校から帰るとテレビのスイッチを入れ、面白い番組に熱中します。一方、外でサッカー、野球、自転車などで元気に遊ぶ子どもたちもいます。広かった自然も宅地造成でこわされ、ホタルやトンボが

見られた野山で遊ぶことはむづかしくなりました。むかしのように手作りの遊び道具を使うことはめったにありません。

鉄筋校舎が建つ

昭和四十年になると村岡地区の宅地造成は急ピッチですすめられ、人口が急にふえ、児童数も一千名をこえて、運動場にはプレハブ教室が建つようになりました。



りっぱな四階だての鉄筋校舎

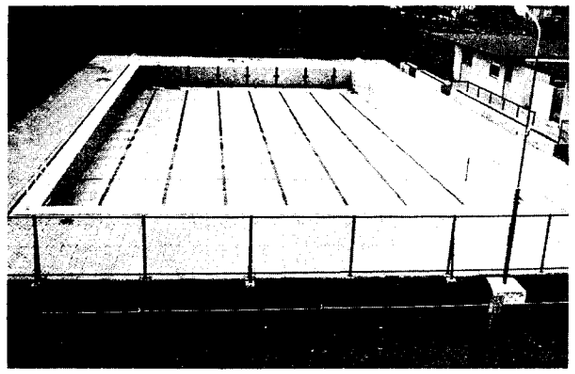
古い校舎をとりこわし、四階建ての鉄筋校舎を建てる工事が昭和四十五年に始まり、翌年三月に十一教室が完成しました。

このとき、古い校舎の横で、おじいさんたちが小学生のころからゆうゆうと枝をひろげていた、大きなくすの木が切り倒されてしまいました。電気のこぎりの音と共に、またたくまに倒されたくすの木を、見ていた人たちは残念に思い、惜しみました。

プールができる

これまで村岡小学校にはプールがありませんでした。夏になると、暑いところを歩いたり、バスを利用したりして、

本町小学校や藤ケ岡中学校、鵠沼公園プールまで行って、水泳教室を開いたものでした。ようやく学校や学区の人々の願いがききいれられて、昭和四十七年九月から四か月かかってすばらしいプールが完成しました。このプールは、神奈川県の公立学校としては始めてのアルミ鋼板でできた、さびないプールとして自慢のものです。



プール完成

思い出のくすの木

百年を迎えた村岡小学校

昭和四十八年六月十日、村岡小学校は創立百周年を迎えました。鉄筋校舎へ改築する第二期工事も始まります。

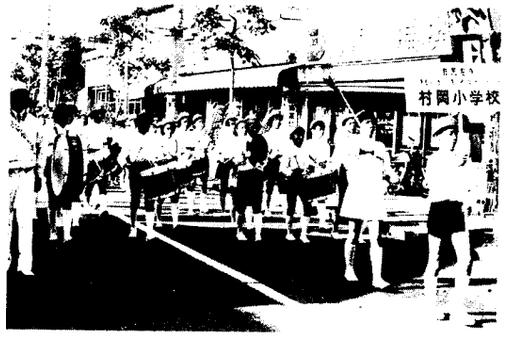
校舎ばかりでなく、内容も充実した学校に発展させなくてはなりません。

現在の児童数は、千二百五十名、教職員数五十一名で、藤沢では五番目の大きな学校に成長しました。

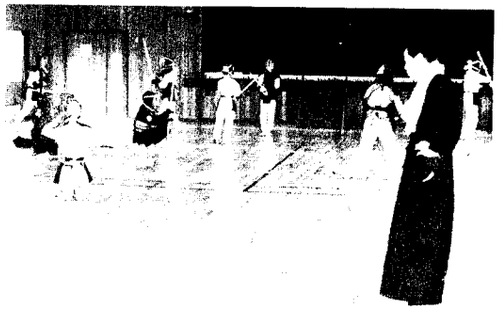
寺小屋のような学校が百年たったいま、このような姿になりました。これからの百年で村岡小学校は、どのようになるか楽しみです。

元気なむらおか　の子どもたち

校舎はぼくらのものです(清掃)

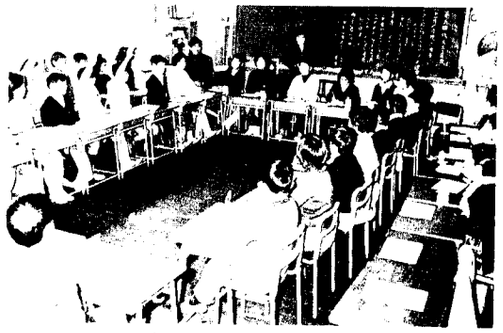


堂々と行進(鼓笛パレード)



おめん！　かっこいーい
(クラブ…剣道)

ことしは思いきり
うちのプールで(水泳教室)

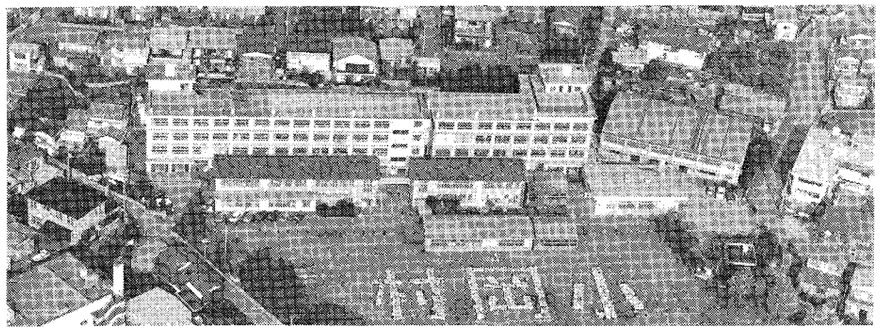


国会のお手本になるよ
(代表委員会)

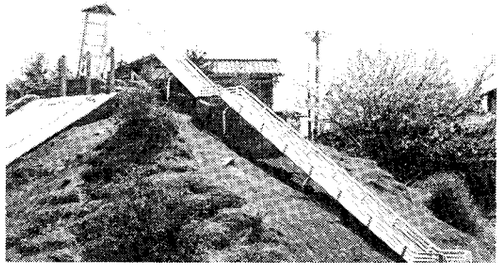
なかなかうまいね(家庭科)

まだまだ！　がんばって！
(体　育)

味かげんはいかが？(給　食)



校　舎　全　景



できたて　ピカピカのすべり台

小学校体育大会（賞はもらった!!）

プールで水泳（鼻に水が――。）

防災頭巾かぶって（地震は暑いョ）

鼓笛パレード（威風堂々と）

小学校水泳大会（リレーで２等賞）

その後の村岡小学校の歩み

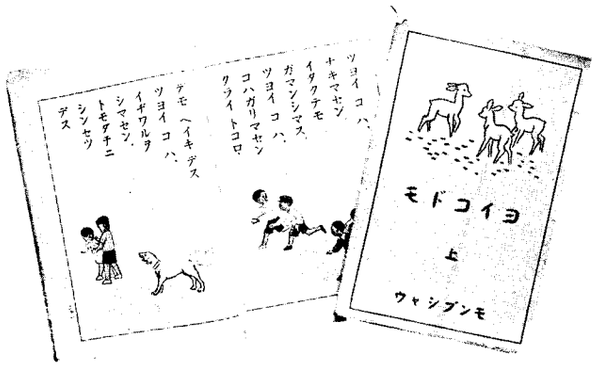
昭和四十九年には、第二期工事、五十一年には第三期工事も完成し現在の校舎になりました。昭和四十九年には、研究発表会がもたれ、市内外から、おおぜいの先生方が参観に見えました。

昭和五十二年には「PTAまつり」が盛大に行われました。また、昭和五十四年には、「東海大地震警戒宣言発令時」を想定して避難訓練が、PTAと合同で行われました。このように、お父さん、お母さん、地区の人々と、先生、子どもが力を合わせて学校をりっぱにしようとする村岡小学校の伝統が生き続けています。

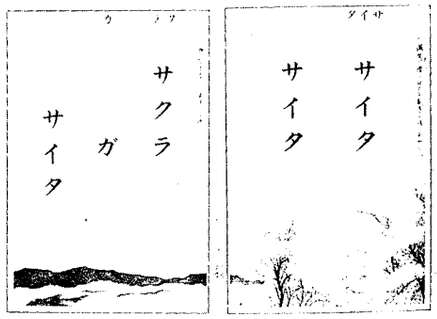
昭和五十三年には、児童数一六五一名と市内一のマンモス校となり、プレハブ校舎が校庭にひろがったこともありました。それも、新林小学校が昭和五十三年に、大鋸小学校が昭和五十五年に分かれたので児童数も少しずつへってきました。

昭和五十五年の児童数は、一五七三名、教職員数五十九名で、学校教育目標の「人間性豊かでたくましく生きる子」をめざして、よりよい学校づくりにはげんでいます。

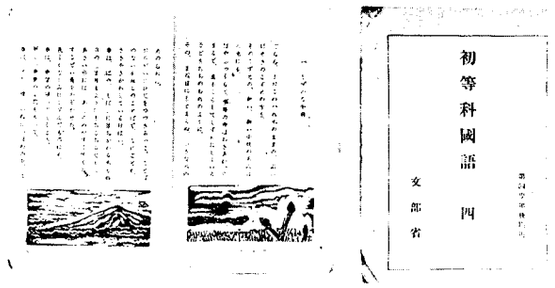
教科書の移りかわり



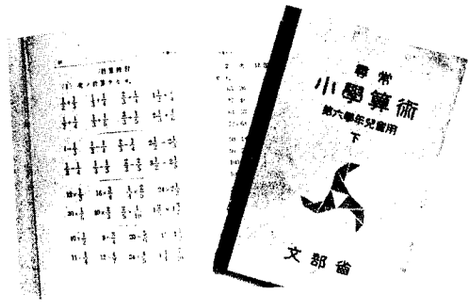
昭和16年～20年に使用された、第１・２学年用
修身教科書（国民学校・国定教科書）



昭和８年から使用された色刷の
国定教科書、小学国語読本

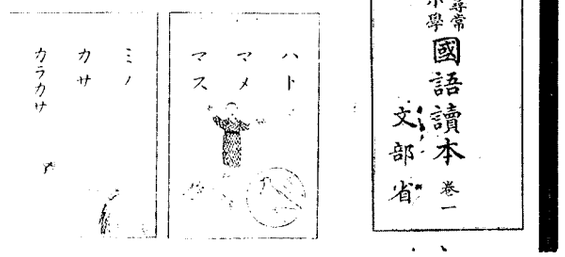


終戦直後（昭和21～）に使用された文部省著作
国語教科書



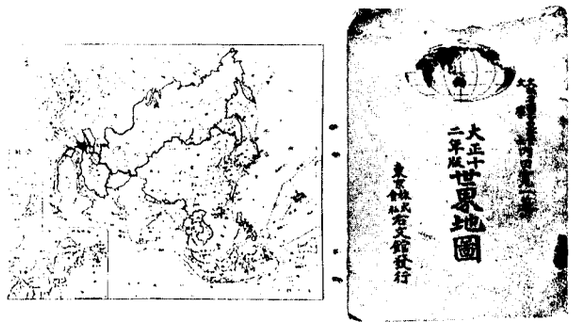
昭和10年から使用され各学年２冊
緑色の表紙の算数小学算術

昭和13年から使用された
地理の教科書

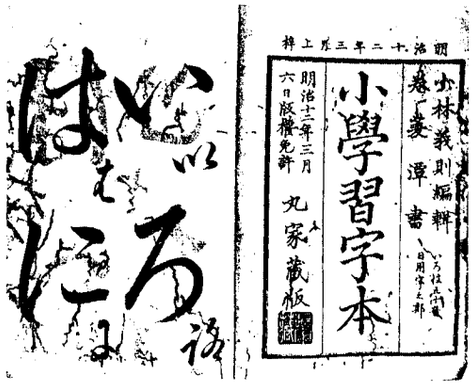


大正７年から使用された小学国語読本
（国定教科書）灰色の表紙

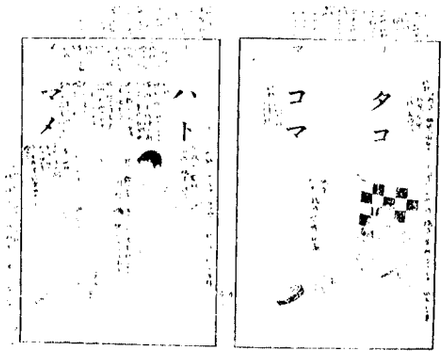
当時の代表的な小学読本、各府県で翻刻し、
全国の小学校に普及した。
アメリカのウイルソンリーダーを原本としている。



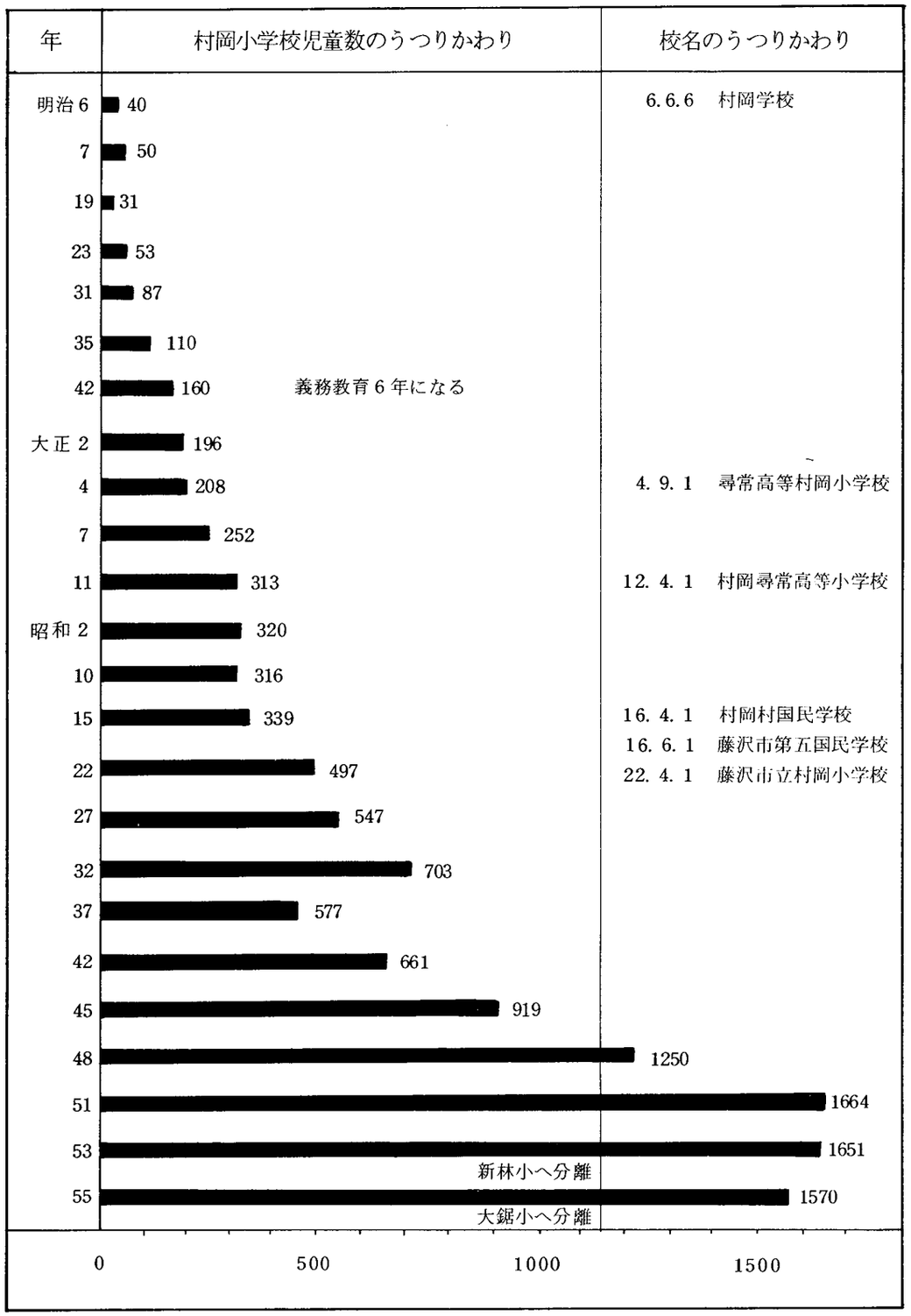
高等科・中学校などで使用された
世界地図

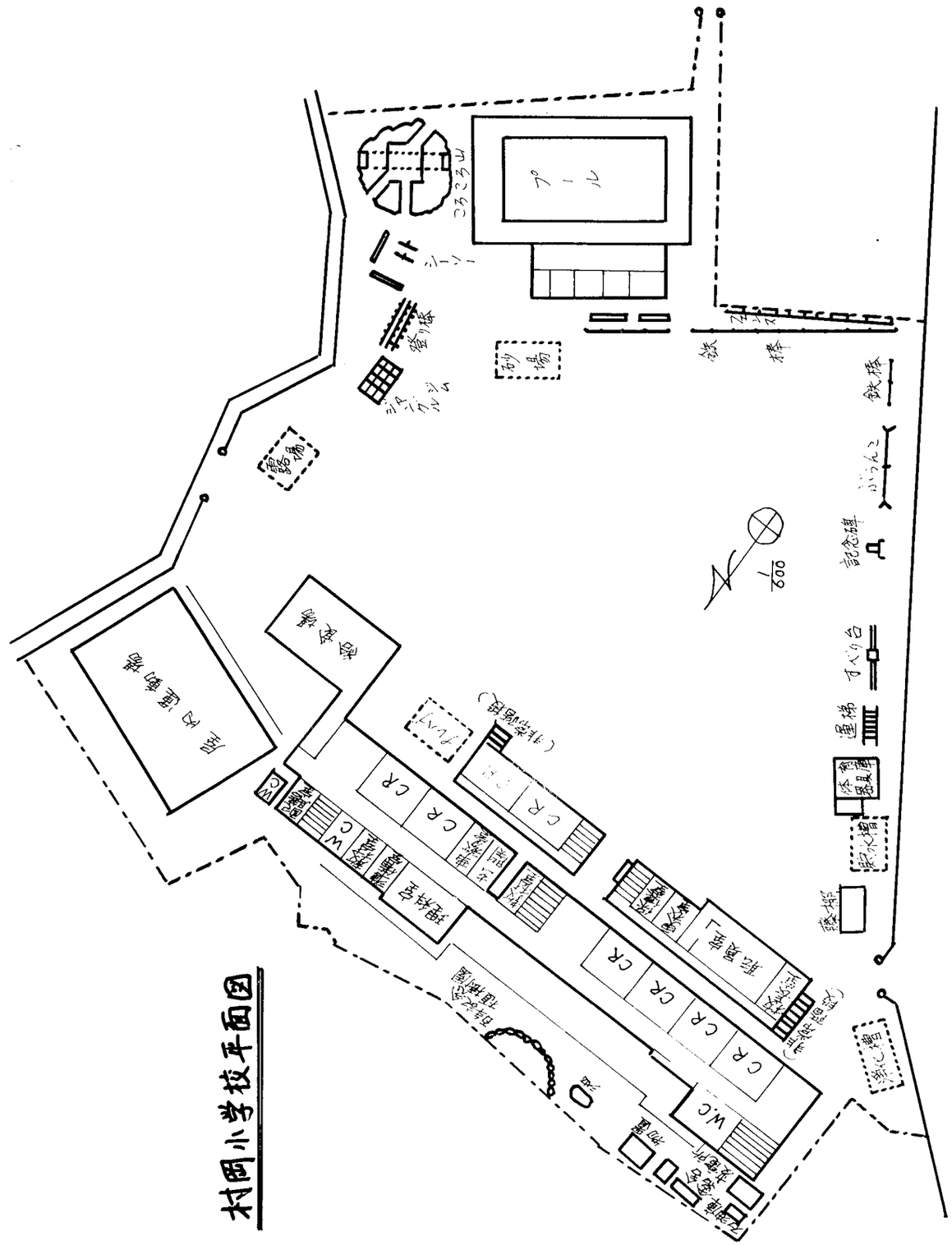


小学校初級向きの習字本

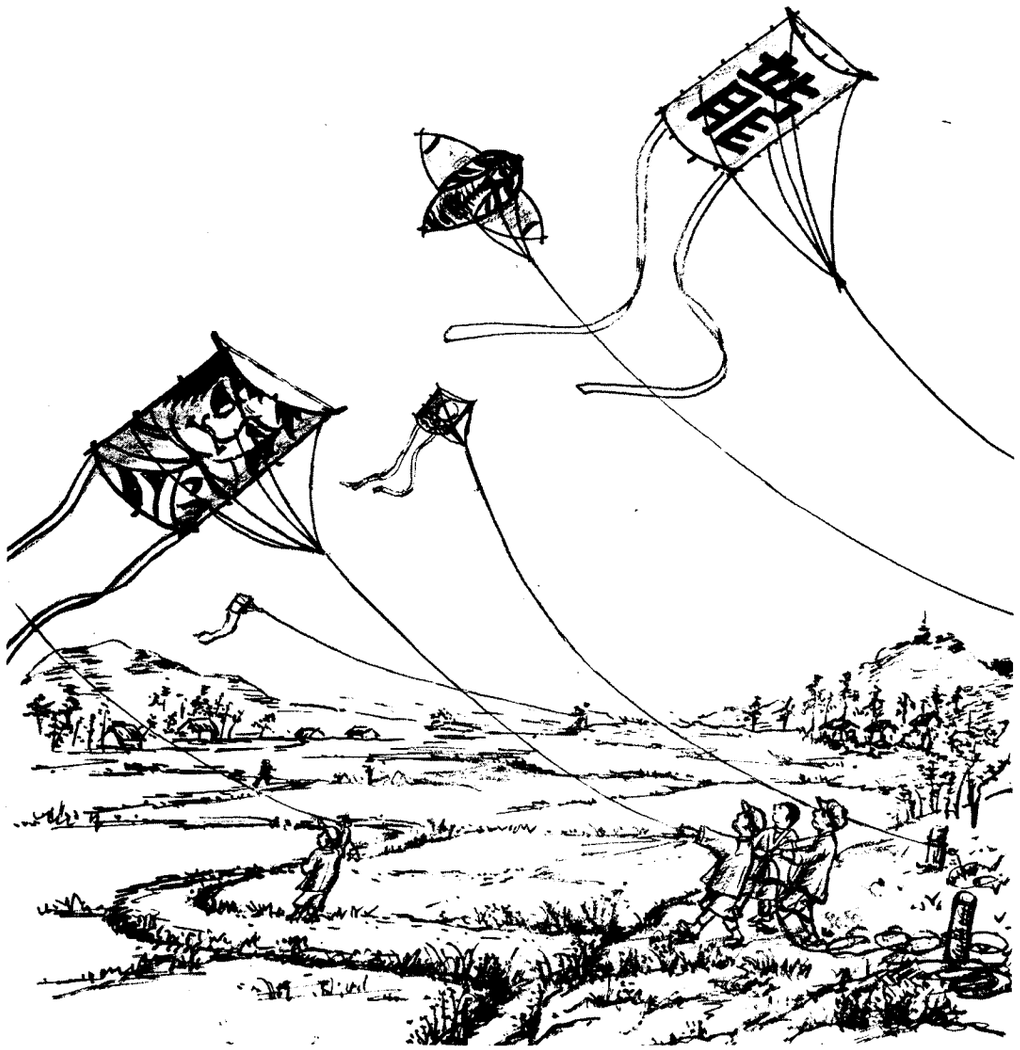


明治43年から使用の尋常小学校読本（国定教科書）
義務年限延長により修正されたもの


年
村岡小学校児童数のうつりかわり
校名のうつりかわり
明治 6 40
7 50
19 31
23 53
31 87
35 110
42 160
義務教育 6 年になる
大正 2 196
4 208
7 252
11 313
昭和 2 320
10 316
15 339
22 497
27 547
32 703
37 577
42 661
45 919
48 1250
51 1664
53 1651
新林小へ分離
55 1570
大鋸小へ分離
0
500
1000
1500
6. 6. 6 村岡学校
4. 9. 1 尋常高等村岡小学校
12. 4. 1 村岡尋常高等小学校
16. 4. 1 村岡村国民学校
16. 6. 1 藤沢市第五国民学校
22. 4. 1 藤沢市立村岡小学校


村岡小学校平面図
プール
砂場
鉄棒
鉄棒
ぶらんこ
記念碑
N
1/200
寸八台
通梯
給食用器具
飲水槽
像
新しい道
校舎
屋内運動場
給食棟
プレハブ
(仮設教室)
(仮設教室)
CR
CR
CR
CR
CR
CR
CR
W.C
W.C
W.C
理科室
図工室
家庭科室
音楽室
放送室
職員室
校長室
教務室
事務室
玄関
校庭
砂場
ジャングルジム
鉄棒
ぶらんこ
ブランコ
シーソー
ころころ山
プール

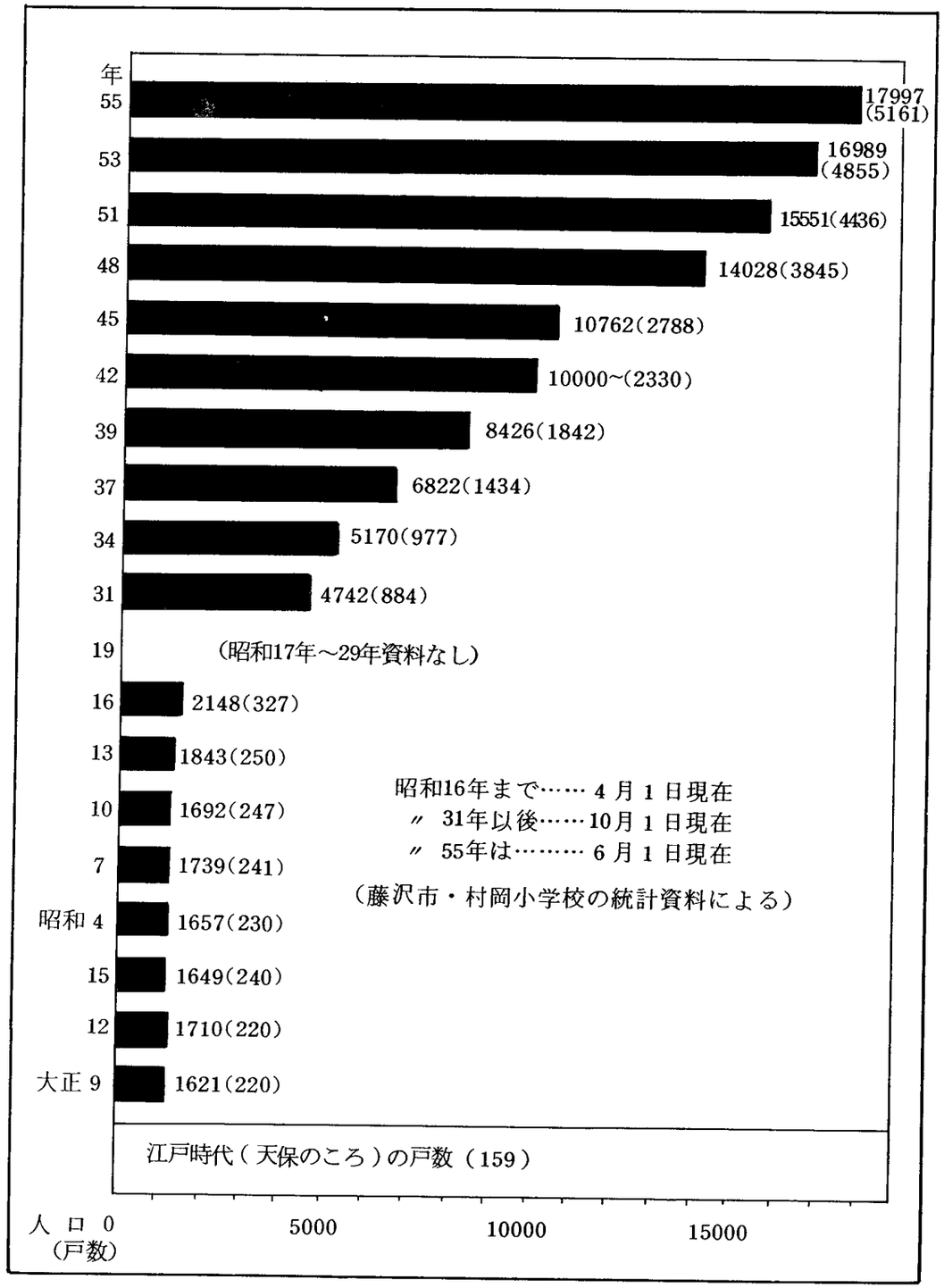
むらおかのくらし



津田辰雄元校長・画

人口のうつりかわり

村岡小学校学区内



一、村岡の地名のおこり

村岡　岡が重なり合っているところからつけられたと思われる。

宮前　御霊神社のお宮の前に散らばっている部落。

弥勒寺　お寺の名前がそのまま地名に使われた。

小塚　戦国時代の死者を葬った塚がたくさんあった。

高谷　丘に入り込んだ平地が、谷間をとおって高台に続いているところ。

渡内　大むかし海だったあたりを渡って行く所なので、わたりうちがなまってつけられた。

柄沢　むかし唐から帰化した人が住んだという説（唐沢）と鍬や鋤の柄を作る職人がいたとの説。

川名　柏尾川が村の中ほどを流れているところ。

今ではこのほかに地区として、川名から富士見ケ丘、弥勒寺から河原、南伯、坂下、小塚から小塚東、柄沢からは藤が岡、並木台がそれぞれ独立しました。

二、きもの・たべもの・すまい

きもの　明治のころは、男女とも地織の木綿のきもので、子どもは筒袖（ツツッポ）でした。男の子でも、ひざがいたまないように残り布で作った前かけをしめていました。

どこの家でも糸をとるために蚕を飼い、桑の葉で育ててまゆにするまでは、なかなか忙しい仕事でした。糸は紺屋で染めてもらい、自分の家ではた織りをしました。木綿のきものは紺が多く、幅の広いシマ柄は若い人、せまいのはおとしよりが着ました。その木綿も戦争中をさかいに姿を消しました。

野良着　（農作業をするときのきもの）　男の人は、ももひき・はんてん、女の人は腰まできものをはしょり、たすきをかけていました。戦争中からはモンペになり、草むしりの時には、手甲・きゃはん、くずかきのときには、うでぬきをしました。

野良着

わらぞうり

下着のシャツは、木綿の布を使って自分の家でぬいました。寒い冬には、袖なし・綿入れ・胴着・どてら、よそゆきには、マントに鳥打帽子をかぶりました。

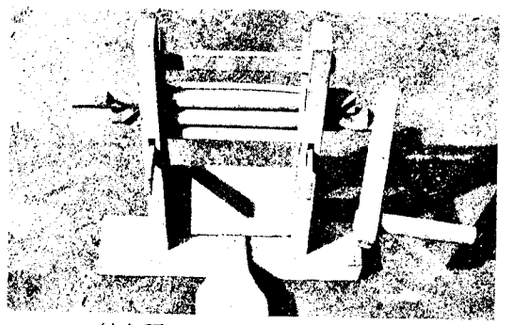
はきもの　　ふだん、子どもたちは、「わら」や「みちしば」で作ったぞうり（ボタゾウリ）をはいて学校へ行きました。

げたは、コマゲタ、雨の日には、アシダやヒヨリ、晴着を着たときには、たたみつきのげたをはきました。お正月に一度たびとげたを買ってもらうのが楽しみの一つでした。

寝　具　　かいまきぶとん（袖のあるふとん）がおもに使われました。

綿は、畑でつくり、実がまっ白にわれたものは上等で、これをロクロという道具で綿と種にしわけしました。藤沢にある綿工場で打ってもらい、黒くあがったものはふとんにいれ、上等なものはきもの綿や、二、三年分ためて嫁入りのふとんにしました。綿からとった糸は、木綿の地織のきものになりました。

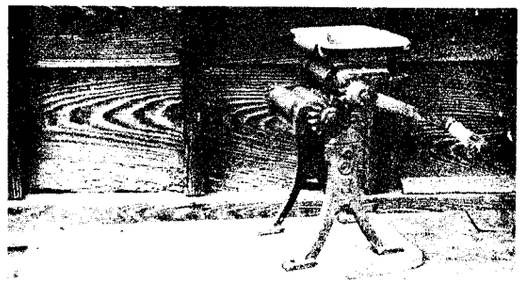
いまでは綿を栽培する農家もなくなり、蚕を飼う家もみられません。



綿と種にわける道具〝ロクロ〟

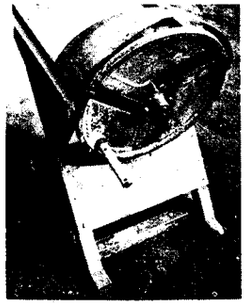
食べもの　　常食は、どこでもオバク（麦飯）でした。米一に対し、麦が九の割合という時代もありました。大麦は丸のままか、挽き割りにして食べました。丸のままを丸麦といい、麦を打って皮をむいただけのもので、それを臼でひいて粒を二つに分けたものを挽き割といいます。お米のご飯を食べられるのは、お正月とかお盆、お日待の日だけでした。

小麦は粉に挽き、そば粉を使って手打ちそばを作りました。戦争中には機械を使うようになり、何よりのごちそうと喜ばれました。



そば打ち機械

いまの三時のおやつを小昼飯（オコジョともいう）といい、野良仕事のとき、ふかし芋・芋だんご（さつまいもをうすく切り、日に干して乾燥させ、粉に挽いたものでだんごを作る）・梅干のおにぎり・ヤキビン（小麦粉にふくらし粉と砂糖を入れて焼いたもの）などを持って行きました。いまでもとしよりの間では、オコジュウ・オヨメシ（晩ごはん）などの言葉がきかれます。

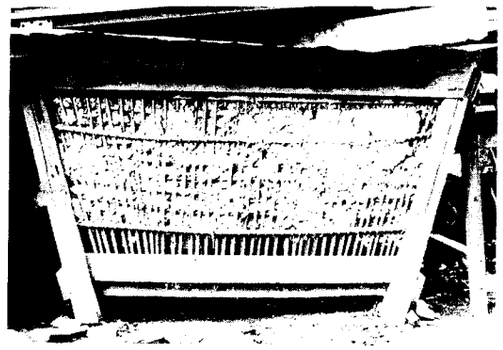


さつまいも切干機

魚は、腰越や茅ケ崎の南湖方面でとれたもの（あじ・いわし・さばなど）を行商にきました。

塩は、横浜市の金沢からで、どこの家でも自分でみそ・なめみそ・しょうゆなどを作りましたので、たくさん必要でした。

お茶は、屋敷のすみとか、畑のさかいに植え、五月になると茶つみをしました。つんだお茶の葉を一度ふかし、ホイロという道具に炭をおこし、その熱で茶の葉を炒るように乾燥させて作り、おいしくのみました。



お茶つくる道具「ホイロ」

油は、なたね・落花生・大豆からしぼったものを使いました。村岡では落花生をたくさん作り、それは大きな収入源となりました。

肉類はほとんどなく、牛よりも山羊を飼って、その乳を飲みました。

餅は、暮だけつき、もち米のものはほんの少し正月用とし、粟や陸稲で一俵も二俵もつき、五月頃まで水もちにして食べました。

甘味は、黒砂糖やてんこ（中白の砂糖）を使い、いまのような白砂糖は、あまりありませんでした。

終戦直後は、まめ板（大豆の油をしぼったかす）・コーリャン・さつま芋を常食としなくてはなりませんでしたが、農家はそれほど困らなかったということです。

すまい

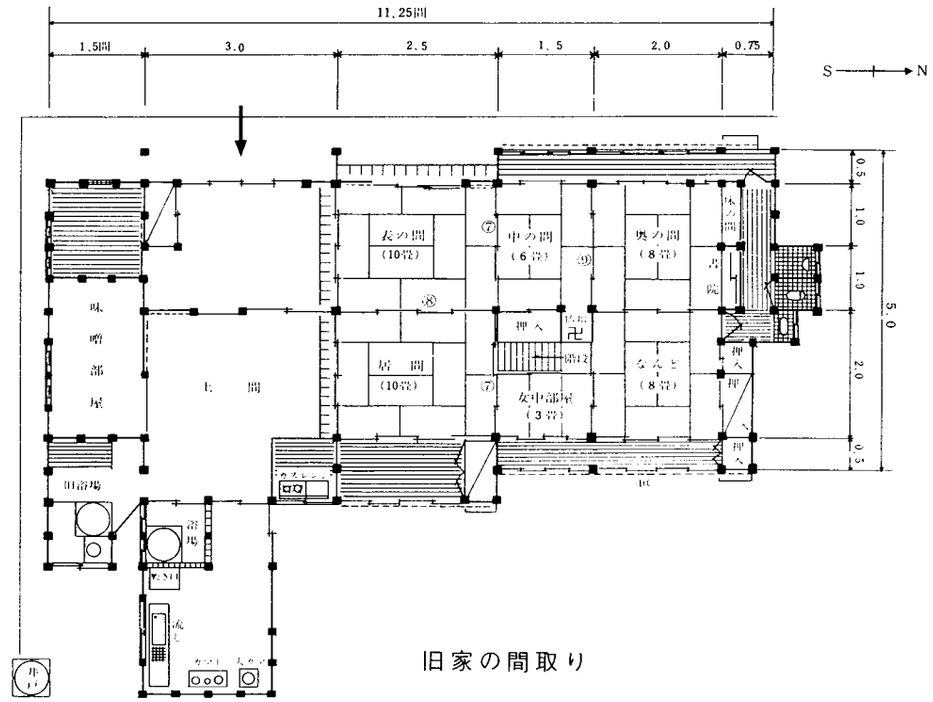
住居をオモヤといい、ふつうは田の字型の間取りです。イロリのある茶の間・神棚のあるザシキ・床の間のあるオク・寝室になるヘヤ（なんど）と呼ばれる四間にくぎられ、大きな家になるとほかにナカノマがあります。内庭（土間）は広くとられ、雨の日には縄ない・ぞうり作り・俵あみ・むしろあみなどのわら仕事や、脱こくをしたりしました。また、農具をかけたり、米俵を積んでおいたりしました。

どこの家でも大釜がすえてあり、その釜はみそ・しょうゆ・餅つきのときに使いました。内庭（土間）の上は、乾いたワラをしまったり、蚕を飼うときにつかい、はしごで屋根うらにのぼりおりしました。

イロリは、いこいの場の中心でした。夜なべ仕事をしたり、おとしより

わら屋根の農家（旧名主宅）

現在図



旧家の間取り

から昔話を聞いたりするのもこのイロリばたでした。

台所は、かまやといい、野良着のままで炊事や食事ができるように土間になっていました。いそがしいときには、足を洗っている時間さえなかったからです。

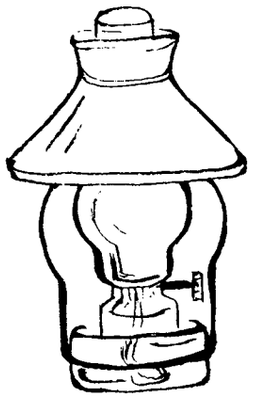
ヘッツイ（土や石で作ったかまど）にはなべや釜が入るようにちがった大きさの三つの穴があり、たき口は広く、くず・わら・麦わらがもえやすいようにできていました。その灰で釜などをみがくとピカピカに光り、クレンザーの役目もはたしました。

イロリのすわりかた

燃料は、暮のうちに家族で山へくずかき（かれ葉を熊手であつめる）に行き、一年分のくずを物置にしまっておきます。まきは大事に使いました。

井戸は、どこの家でも外にあり、つるべやポンプで水をくみました。水くみは子どもたちの仕事で、おふろに水をいっぱいにするのは、なかなかつらいことでした。また井戸は冷蔵庫の役目もし、ひやしたスイカをそっとひっぱりあげる楽しみはかくべつでした。一年に一度は近所の人たちに手伝ってもらい、井戸ざらえをし、水をきれいにしました。

あかりは、明治になるとアンドンからランプになり、ランプのホヤがよごれるので毎日それをきれいにするのは、ホヤの中に手がはいる子どもの仕事でした。



ランプ

モチの木・さんご樹は、火を呼ばない木といわれ、どこでも家のまわりに植えられていました。

時代とともに生活が変わると、住宅も食べ物もいっぺんに変わってしまい、いつの間にか田んぼもあまり見られなくなりました。

三、年中行事

元旦

家の前に門松を立て、しめ飾りをはって新年を迎えます。

三か日は、年男が朝早く台所に入り、大神宮・大黒・えびす・荒神・俵神に鏡餅・お神酒・雑煮をそなえる習慣があります。

七草がゆ

六日の夜、七草（せり・はこべなど）を台所の七つ道具で「七草なずな、なんとてたたく、唐土の鳥が、日本の国へ渡らぬ先に、ストトコトントン」と歌いながらたたき、七日の朝かゆに入れて食べました。これを食べると、その年は一年中病気にかからないといいつたえられています。

鏡開き

神さまにそなえた餅を割って、おしるこに入れて家中で食べました。

さいと焼き

十三日に米の粉でだんごを作り、木にさして神棚にそなえます。くぬ木・なら・柳の枝に赤・青・白のだんごが花を咲かせました。七日または十四日までを「松の内」といい、この日に門松・しめ飾りを取り払い、十四日にかきぞめといっしょにもやします。

さいと焼きのだんご

夕方になると部落ごとに道祖神の前に集まり、火が赤々ともえはじめます。

この火で焼いただんごを食べると、一年中かぜをひかないとか、むし歯にならないとか、むかしからいわれています。さいと焼きの行事も村岡では、あまり見かけなくなりました。

さいと焼き

節分・豆まき

いわしの頭とひいらぎを軒にさして、悪魔よけにしました。「福は内、鬼は外」というのはいまと同じです。煎った大豆を神さまにそなえてから、井戸端・土蔵・かまどにまき、神社やお稲荷さまにも豆まきに行きました。夕食後は福茶（豆・梅干を入れた茶）を飲みました。

桃の節句

女の子の節句で、ひな人形を飾り、白酒・あられ・ひし餅をそなえました。女の子はお花見（遊びに行くこと）を楽しみにしていました。お煮しめ・おすし・あずき御飯など、母親の手料理を重箱に入れ、これを持って近くの見晴しのよい場所や野山で遊びました。鵠沼の高砂へ行く人も多

く、お花見は昭和十年頃まで続いたそうです。古くなった人形は、道祖神におさめました。

彼岸　先祖のお墓まいりをします。「入りぼたもち、あけだんご、なかの中日あずき飯」といい、草だんごを作ったり、おはぎを作ったりして仏前にそなえました。

端午の節句　男の子の節句です。家々の軒に菖蒲とカヤをさして魔よけにしました。おとなも子どももたこあげをします。男の子が生まれると鯉のぼりをたて、家の中には五月人形を飾りました。かしわ餅とたけのこ料理をそなえ、夜は菖蒲湯に入りました。

お盆　十三日朝、竹と縄でお精霊さまを迎え入れる仏壇を作り、ほおずきや家でとれる野菜やいもなどをそなえます。仏さまが手足を洗うための水を器に入れ、またナスを賽目に切って、みぞはぎを束ねたものといっしょにそなえました。仏さまは、ナスの馬とキュウリの牛に乗ってくるといわれました。夕方には家のじょう口（家の出口のところ）でおがら（麻の茎の干したもの）をたき迎え火としました。盆踊りもさかんで、夏の夜の楽しいひとときをすごしました。送り火は十五日の夜おそくたきました。

お精霊さま

お祭り　秋になるとお祭りがやってきます。宵宮（前夜祭）には、家々から男の人が出て神社にちょうちん・旗・のぼり・とうろうをたて、しめなわをはります。親戚や知り合いの人を呼びごちそうをしましたので女の人はてんてこまいです。

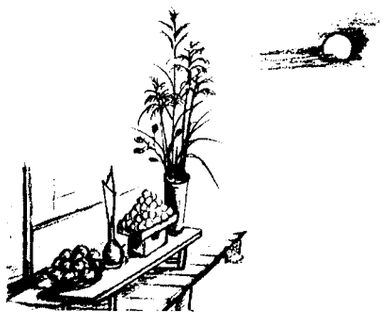
神社では奉納の神事が行なわれます。「湯花かぐら」は、笹を湯にひたしてふりながらおどる無病息災の祈りです。残りの湯で甘酒を作り、みんなにふるまいました。また、神主さんがふたりで「てんぐ」「山の神」の面をかぶり、餅をなげ、矢をなげながらおどりました。

最近では、お祭りが町内会や子ども会が中心になり、またさかんになってきました。各地区でそれぞれ楽しい行事がくまれ、川名の「山車」は、なかなかみごとなものです。おみこしをかつぐ地区もしだいにふえてきました。

川名の山車（だし）

お月見

小さなお膳を縁がわに出して秋の七草を飾り、十五夜には月見だんごを十五個、（十三夜は十三個）と季節のくだもの（かき・くりなど）を月にそなえました。お月見の晩は、よその家のそなえものをぬすんだりしてもよいという風習もありました。また十五夜を祝ったら十三夜もやらなければ、かた祝いとしてよくないといわれました。



お　月　見

えびす講

夕食前、恵比須さまを神棚からおろしておぜんにのせ、そばを山盛りにし、ますの中にあり金ぜんぶを入れてまつり、家のはんえいを祈りました。

一ツ目小僧

この日には一ツ目の怪物がやってくるというので、家の中に目のたくさんある物（ざるやげたなど）を庭や軒に出し、怪物を追っぱらいました。

冬至

「冬至南瓜」といって、この日に南瓜を食べ、抽子湯にはいります。

お日待

野あがり正月（農作業がひと区切りつくと村全体で休む）、講やお祭りなどには当番の家でごちそうを食べます。おとなも子どももこの日を楽しみに待ったのでお日待といいます。

年中行事と農作業

月	日	名まえ	ことがら	農作業
一月	1	元旦	各神社に参詣、一日～三日を三か日という	仕事はじめ（なわをなう）
	2		かきぞめ・仕事はじめ	山仕事（まき作り・くずかき）
	7	七草	七草がゆ	たい肥つくり
	11	鏡開き	鏡開き	わら仕事（なわ・むしろ・たわらあみ）
	14	さいと焼	「十四日」だんごを焼く	
	15		あずきがゆ	はた織り
	18		年頭の観音の縁日（渡内、念仏講）	麦ふみ
二月	3	節分	豆まき・ふく茶	田うない（田を耕す）
	4	初午	稲荷講（川名二月一日）	
三月	3	ひな祭り	女の子の節句	さつまいもの苗床づくり
	18		彼岸の入り	
	21	春分	彼岸あけ（墓まいり・社日（日待））	なわしろづくり・種まき
四月	8		おしゃかさま・花まつり	大豆・落花生の種をまく・さつまいもの苗を植える
五月	5	端午の節句	子どもの日	麦の取り入れ・蚕の忙しい時期
六月				代かき（田を平らにする）・田植え
七月	7	七夕まつり	寺でおふだを作り厄除けを祈る	草むしり
		しめしき		
		虫送り		
八月	13	お盆	十三日～十五日	田の草取り（三回～五回）
		お祭り		大豆の取り入れ
九月		十五夜		晩秋蚕で忙しくなる
	23	秋分	彼岸・墓まいり・社日（日待）	秋・冬野菜の種まき
十月		十三夜		稲刈り・脱こく・さつまいも・落花生の取り入れ
十一月	15	七・五・三	えびす講	麦まき
	20		一ツ目こぞう	
十二月	8		すすはらい	山仕事・わら仕事
			もちつき	
	22	冬至		正月じゅんび

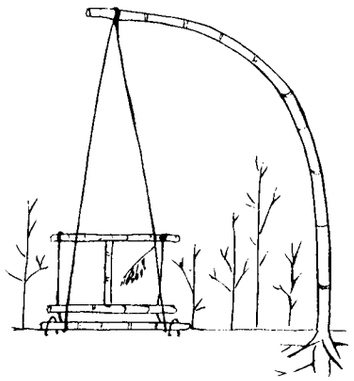
四、子どもの四季のあそび

春

枯草に春風が吹きこむころ、子どもたちは、もう野山に出かけます。鳥たちも餌をさがしに飛び始めます。この鳥をとるのに、木の枝や竹を使ってブッツメなどを作りました。ざるをふせてその中に餌をまいておき、鳥がえさを食べに来たところを支えてある棒をさっと引き、ざるをかぶせてとったりしました。

小川や田んぼの水がぬるむと男の子たちのたにしとりや、ザリガニとりが始まります。竹馬・弓・缶馬など遊びをくふうしました。女の子たちは野畦に咲いている、れんげ草、たんぽぽ、しろつめくさなどをつみとり、花輪や首飾りを作りました。また、たんぽぽ、ムギの穂、ピーピー草（山えんどう）などで、草ぶえをつくり、みんなで合奏などもしました。

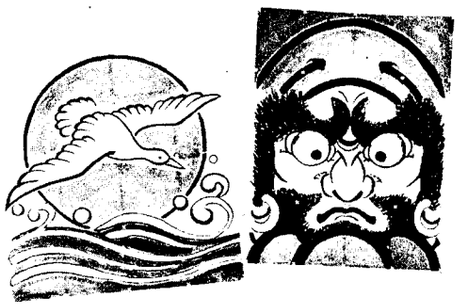
レンゲの首かざり



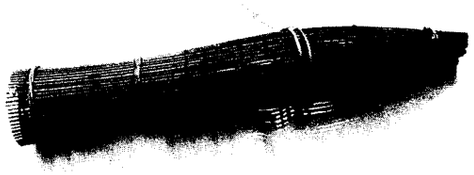
鳥をとるしかけ〝ブッツメ〟

五月の風はたこあげに絶好です。畳数枚もあるたこを部落総出であげました。おとなも子どもも手作りのたこに夢中で、空に舞うようすは壮観でした。運動場もたこをあげるのには、よい場所だったようです。

ゴム飛び・縄とび・石けり・まりつき・缶けりと外の遊びがふえてくると夏も近くなってきます。竹の子の皮の中に梅干を包んでしゃぶり、早く赤くなると勝負がつくという、あそびもありました。そのほか、田んぼなどでは男の子たちが、二十センチぐらいの棒をたてたり倒したりする「じっくい」あそびがありました。



手づくりのたこ



うなぎをとる道具　もじり

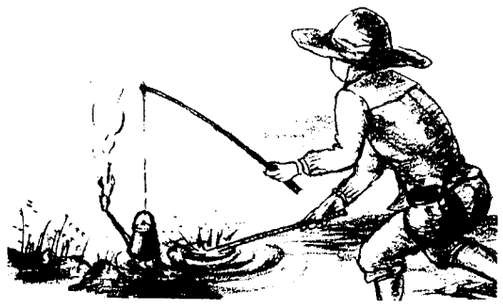
夏

田んぼの蛙の合唱が大きくなり、ほたるがとびかうようになると夏はもうさかりです。柏尾川では水泳ができました。しじみとりやからす貝とりもさかんだったようです。

田んぼや小川に「もじりかけ」をするのも楽しみでした。夕方、そっと「もじり」をかけ、朝、暗いうちに引きあげに行き、うなぎが入っているかどうか胸をわくわくさせました。

夏の太陽がしずみ、夜になると「どじょうぶち」がはじまります。松のヒデ（松ヤニの多いところ）をもしたカンテラをさげて田んぼに出かけます。まだ、やわらかい田のくろを歩くと、あかりにどじょうが寄ってきます。細い竹ざおに針をつけたもの（一種のヤス）で、どじょうを上からさし、さしたどじょうをバケツにたたきおとす音が、田んぼのあちこちに響きました。

小川をせきとめて池のようになったところの水を、バケツでかい出すと、干上った底に魚がピチピチしています。これを「かいぼり」といいました。

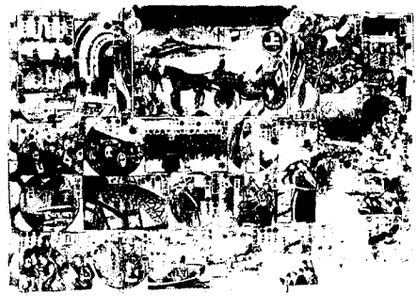

どじょうぶち

秋・冬

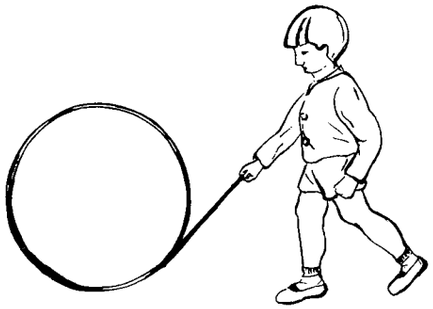
楽しかった夏がアッというまにすぎると、山の木々に秋が感じられるようになります。

栗拾い・どんぐり拾い・しいの実拾いなどに遊びがかわります。どんぐりの実でコマを作ったり、かやの実の笛や竹笛など、みんな自分の手で作りました。寒くなるとからだを動かすようになり、めんこ・ドッチボール・馬のり・押しくらまんじゅうをして、男の子は汗だくになります。

女の子は、ビーズで指輪作り、じゅずごのネックレス・おはじき、リリヤン編み、そしてお手玉もやりました。お手玉の中には、じゅず玉やそばがらを入れました。縄とび・はねつき・マリつきも女の子の遊びでした。


双六（すごろく）

お正月は、「双六」「カルタ取り」「動物あわせ」「羽根つき」「こままわし」などを家族そろって楽しみました。男の子の遊びとして人気があったのは、「たがまわし」です。これは、樽や桶の「たが」を利用してまわす遊びです。思いきり自然の中で遊べた時代といまとをくらべると、遊びもずいぶん変わってしまいました。


たがまわし

むらおかの史蹟

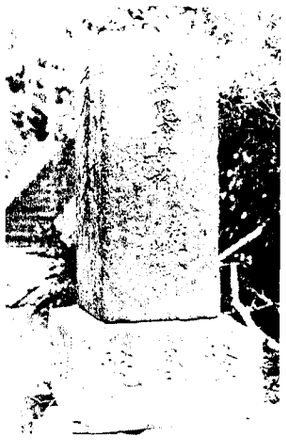
柄沢神社

柄沢の鎮守として神明様の名で親しまれています。祭神は天照大神と第六天（第六代・孝安天皇）です。神明様はもと伊勢山（隆昌院の裏の山）にまつられていましたが、明治十六年（一八三三年）にこのお宮に移されました。現在の社殿は明治四十五年（一九一二年）に建てられたものです。

柄沢神社

隆昌院

柄沢山隆昌院といい、日蓮宗のお寺で、坂戸町妙善寺の末寺です。隆昌院は赤穂四十七士のひとり、奥田孫太夫の末子が出家して相休と名をあらため、元禄十六年（一七〇三年）にこのお寺を開いたといい伝えられています。このお寺のご本尊は鬼子母神ですが、このお寺で赤ちゃんの名前をつけてもらうと丈夫に育つというので、子育て鬼子母神といわれ、お参りする人がおおぜいいます。


隆昌院

慈眼寺

無量山慈眼寺といい、曹洞宗のお寺で、天嶽院の末寺です。行基という奈良時代の高僧が作ったと伝えられる高さ六尺三寸（約一八五センチ）の十一面観音像が本尊です。このお寺を建てたのは北条綱成で、天文（一五三二～一五五五年）のころできたと伝えられています。お寺の裏山には市の天然記念物に指定された根まわり約七・五メートルの混生樹（寄り木）があります。

十一面観音

また境内にはもと金亀山江島寺にあった寛永六年（一八五三年）鋳造の古い鐘があります。

混生樹

日枝神社

日枝神社は山王様ともいわれ、渡内の鎮守です。村岡五郎良文（平良文）が天慶（九三八～九四七年）のころ、屋敷の守護神として大山咋神をまつったのを、応永二十七年（一四二〇年）に福原佐衛門という人が今の場所

日枝神社

に移し、良文を合祀（神をいくつかいっしょにしてまつること）しました。祭神は大山咋神と平良文です。

二伝寺

戒法山二伝寺といい、浄土宗のお寺で鎌倉光明寺の末寺です。寺伝によりますと、永正二年（一五〇五年）に玉縄城主北条氏時が二伝寺を建て、開山を正空（北条時国の子）としたと伝えられています。境内にはこのお寺で出家修業した幡随意白道上人の碑が建っています。また同じ境内に、しばらくすたれていたお寺を再び建て直したといわれる松平正次やその家族の墓があります。二伝寺の西、雑木林の小高い丘の上には良文・忠光・忠通の塚があります。

二伝寺

幡随意白道上人碑

村岡城址

日枝神社の東南の位置に一段と高い丘陵があります。そこが村岡五郎良文が築いた村岡城の跡だと伝えられています。一説には後北条時代の高谷砦跡だとも言われていますが、現在そこには村岡城址の碑が建っています。（十三ページ参照）

上屋敷

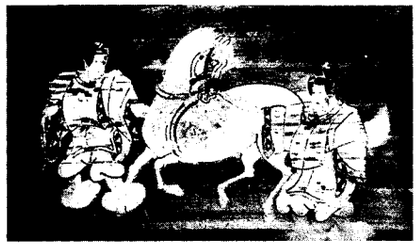
村岡城址の西北にあたるところは字上の屋敷と唱えられて、陸田三段余（約二七〇〇平方メートル）あったのですが、そこが村岡五郎良文の屋敷跡と伝えられています。良文のあと、小五郎忠通、忠通の子鎌倉権頭景成、景成の子権五郎景正と五代にわたって住んだと『新編相模風土記稿』に書かれています。今は宅地造成が進められ、昔のおもかげはどこにも見当たりません。

三日月井戸

村岡城址の北にあたるところに「権五郎景正　産湯の井戸」と伝えられる井戸があり、祠が建っていましたが、現在はありません。

御霊神社（宮前）

村岡五か村（高谷・小塚・弥勒寺・宮前・渡内）の総鎮守です。天慶三年（九四〇年）に村岡五郎良文が平将門を討つため、京都の御霊宮よりこの地に勧請（神仏の霊を遷しまつること）し、戦勝祈願をしました。祭神は早良親王だけでしたが、その後鎌倉権五郎景正を合祀しました。また北条時頼の命令により、葛原親王、高見王、高望王を加えて五柱を祭神としました。境内には副社として、十二天王と痘瘡神、矢竹稲荷があります。



御霊神社絵馬

十二天王

天神七代地神五代をまつってあります。

痘瘡神

もとはこの神社の北西の山中にあったのを末神として境内に移されたものだといわれています。温婆神とかウバ神さまと呼ばれていますが、痘瘡にかからないようにと祈願するためにまつられたものでしょう。

矢竹稲荷

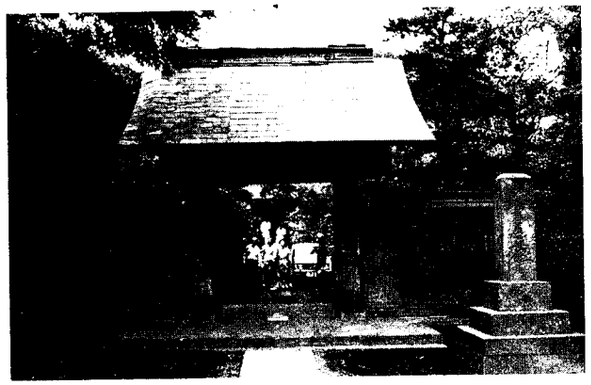
椎五郎景正が後三年の役（一〇八五―八七年）に出陣し、矢で右眼を射られましたが、陣に帰ってその矢を抜いてもらったところ、痛みを感じなかったので、これは御霊宮が守って下さったためと社殿のそばにその矢柄をさすと青葉が生じました。今も境内にわずかに残っている矢笹竹がそれであると伝えられています。そこに稲荷をまつりました。

宮前・御霊神社

御霊神社の付近にはこのほかに「笠松」「清明塚」「旗立山」「尊森」などの旧跡があります。

古館

村岡五郎良文の子の小五郎忠道が今の古館川（柏尾川のこと）のほとりに館を建て、権五郎小太郎の代にいたるまで住んだ、その館の跡だと伝えられています。


弥勒寺

鷹匠橋

柏尾川にかかる、宮前と手広を結ぶ橋は古館橋、別名鷹匠橋と呼ばれています。このあたりで鷹狩りをしたのでしょうか。

弥勒寺

東耀山弥勒寺といい、その名は町名になりました。日蓮宗のお寺で、厚木市金田妙純寺の末寺です。寺伝では嘉禄二年（一二二六年）北条泰時が父義時の菩提を弔うためにこのお寺を建てたということです。

正和四年（一三一五年）火災によってすべてが焼失してしまいました。

その後、正慶元年（一三三一年）日善というお坊さんが通りかかり、この村の人たちが病気に苦しんでいることを聞き、疫病退散を祈願いたしました。そのとき夢に神のお告げがあり、古井戸をさがしたところ、一個の弥勒像がみつかりました。その仏像を山の上にお堂を建て、まつったと伝えられています。これが弥勒堂です。その後天正元年（一五七三年）に日祐というお坊さんが再びお寺を建て直しました。このときから日蓮宗になりました。本尊は日蓮

弥勒菩薩

聖人の像です。境内には多羅樹という珍しい木があります。インドでは錐または針でこの葉に経文をきざみこんだそうです。

法善寺　蓮教山法善寺といい、日蓮宗のお寺です。このお寺は文永二年（一二六五年）北条時宗が創立し、永谷山法泉寺といいましたが、しかし当時の宗派は伝わらず、寺はすたれてしまいました。その後日蓮宗になりましたが、再び廃寺となり、明暦三年（一六五七年）に日善というお坊さんが再建して、現在の蓮教山法善寺と改めたということです。本尊は日蓮聖人像です。

木食観正（神光寺）

神光寺　このお寺は稲荷山神光寺といい、古義真言宗に属しています。手広に弘法大師が修業をしたといわれる青蓮寺（俗に鎖大師といいます。）というお寺がありますが、その末寺です。青蓮寺の三世のお坊さん（権大僧都法印貞誉上人）が、このお寺を開きました。本尊は不動です。嘉永四年（一八五一年）七月川名山金剛院大勝寺と合併しました。この

お寺の境内に「木喰観正」の碑があります。左側面には東かまくら道、北ふじ沢へと書かれてありますから、道しるべだと思われます。文政二年（一八一九年）八月に作られたものです。

殿屋敷　川名の御霊神社からはいった神光寺のあたりは、地名を字殿屋敷といいますが、この地方の地頭をしていた大谷築前守『新編相模風土記稿』には永禄（一五五八～一五七〇年）のころ、この地の地頭をしていた大谷彦次郎の孫であろうと書かれています。この屋敷があったところから、この地名が残っています。

御霊神社（川名）　川名の鎮守ですが、宮前の御霊神社の分社です。天慶四年（九四一年）に建てられたといわれています。祭神は早良親王と権五郎景正です。境内には海軍中将東郷吉太郎の書いた碑があります。

御霊神社

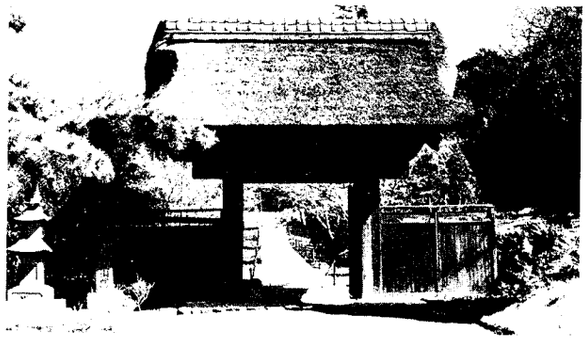
古墳群　古墳というのは古代人の墓です。その古墳が川名には数多くあります。神光寺境内、神光寺墓地周辺、市場、通り町、清水、仲丸などにあり、そのほとんどが八世紀（奈良時代）に作られた

と思われる横穴式古墳です。（くわしくは九ページ参照）

黄金塚　川名に谷戸の池という、明治三十年頃（一八九七年頃）に掘られた用水池がありますが、そのうしろの山の上にあります。

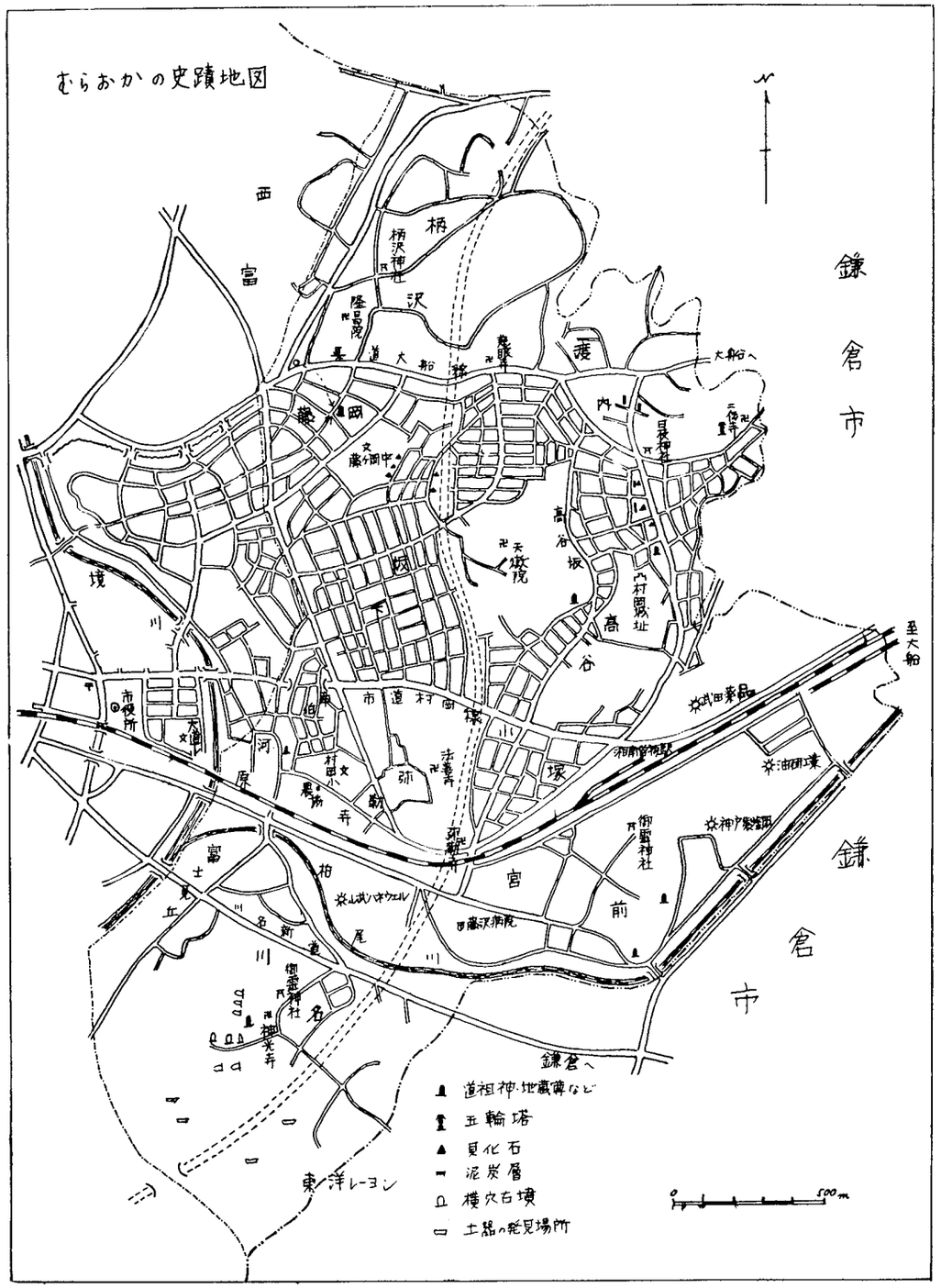
朝日さす　夕日輝く　この山に　黄金せんばい　朱せんばい（白せんばいともいう）

こういう歌が残っていて、この山に今でも何かうまっていると伝えられています。



天　嶽　院

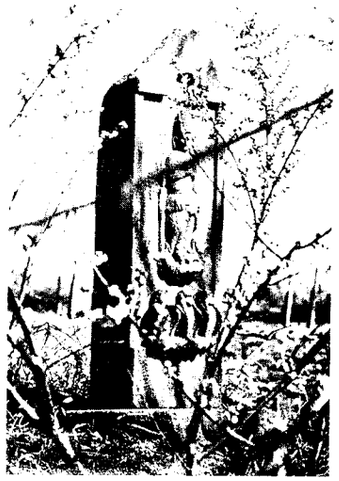
天嶽院　功徳山天嶽院といい、曹洞宗のお寺で、栃木県にある大中寺の末寺です。本尊は千手観音です。文明（一四六九～八六年）のころ、虚堂玄白というお坊さんが葛籠が池のそばの草庵に住んでおりましたが、のちに玉縄城主北条綱成が父早雲の菩提のために寺を建て、虚堂を開山としたと伝えられています。天正十九年（一五九一年）十一月家康から村内に三十石の朱印地をもらいました。広大な寺院として偉容を誇っていましたが、火災にあい、現在古い建物としては山門（もとの総門）などが残っています。



むらおかの石仏

柄　沢

柄　沢



柄　沢

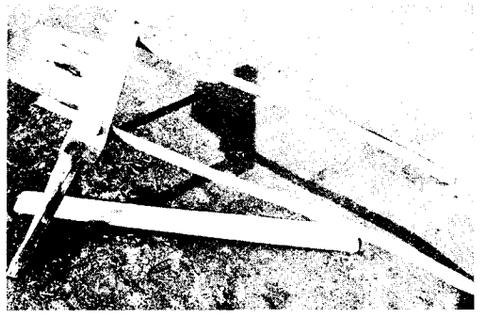
川　名

高　谷

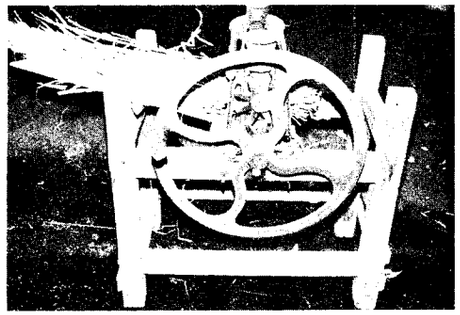
宮　前

渡　内

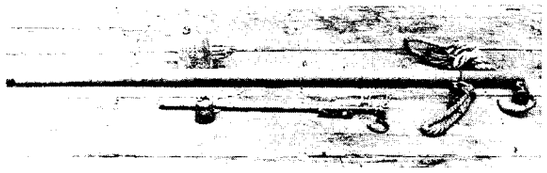
むらおかの農具



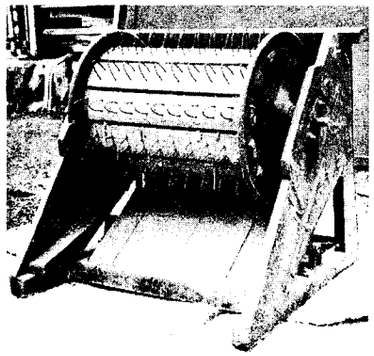
千歯こき（稲の穂やワラをすくる）



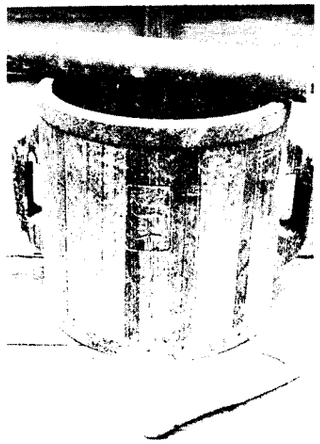
わら打ち機



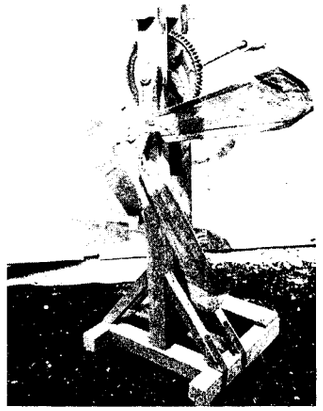
秤（はかり）（上は「チギリ」米俵など重いものをはかる）



稲こき機（稲・麦の穂をこく）



1斗ます



扇風機（せんぷうき）（籾（もみ）ガラなどをわける）

イチッコあみ（さつまいもや肥料などを入れる。右下は「セイヅチ」ワラをたたくもの）

トウミ（扇風機と同じ用途）

「むらおか」改訂版の発刊にあたって

村岡小学校ＰＴＡ会長　林　喜太郎

この本は昭和四十八年六月十日、村岡小学校創立百年を記念して発行されたものですが昭和四十七年度のＰＴＡ会長旅河正美氏のもとで活躍された宮井恵子さんを中心に、お母さん方十三名と、服部忠幸先生が大変な努力をされて編集したと伺っています。

当時一〇〇〇部程多く印刷されてあった様ですが、新らしく本校に入られ、希望によりお譲りしたものや、好評で他へ贈呈したものを含め残り部数が僅かとなりました。

実費で頒布してきた代金も、特別会計として毎年繰越されており、これを如何に取扱おうかと思案しておりましたところ、高山義則先生、木内基行先生らが、「この本は地域を学習し、村岡を知ろうとする時、重要な手がかりとなる素晴らしい本である。今後も副読本として一生懸命使って、遺産として引き継ぐので増刊してほしい。」という嬉しいお言葉を下さいました。

そこで早速小栗輝雄校長　天野源四郎教頭両先生にもお話したところ、この提案に同感とのことで積極的な協力を申し出て下さいましたので、協議した結果増刊いたすことになりました。

初刊より七年も経過しておりますので、家庭数、児童数も増大し、校舎や学区も大きく変化いたしました。その様子を、九〇頁から九六頁の間に書き残し、校舎の配置図を差し替えたり、グラフも近年分を加えるなどして、改訂版にして下さいました。

この本は、非常に価値がある本ですので、大切に使用し、今後も今までと同様の取扱いをして、引き継いでいきたいと思います。

最後に、改訂版編集に携って下さった関係者各位のご努力に対し、心から感謝申し上げます。

昭和五十五年六月

☆資料提供者
藤沢市広報課
村岡小学校職員

☆編集責任者
藤沢市立村岡小学校ＰＴＡ会長
林　喜太郎

☆編　集
小栗輝雄
天野源四郎
高山義則
富岡正子

「むらおか」発刊にあたって

藤沢市立村岡小学校ＰＴＡ会長　石井省悟

村岡小学校創立百年を記念するために、何をしたらよいかと、お母さん達がいろいろ考えて、一農村から急速に都市化していき、昨日までの田や山がいつのまにか消えて住宅地に変わってゆくさまを目のあたりに見て、子供たちにも親たちにも、自分たちの住むこの村岡をよく知ってもらいたいと、児童向読本「むらおか」の発刊を思いたちました。

昭和四十七年四月のＰＴＡ総会で、「むらおか」発刊を決定し、そのために特別委員会を組織し、村岡公民館の協力で郷土史講座を開催して勉強し、資料集めに東奔西走し、学区内各地域の故老の話をきき、資料の整理、原稿の分担、頻回にわたる編集会議と推稿、校正、一方では乏しいＰＴＡ財政からの援助、バザー開催による資金集めと、ＰＴＡ会員全部の懸命な努力がこの一冊の本を作りあげました。

専門家でも、一冊の本を編集し発行することは相当困難な事業だと思いますが、家庭をまもる素人のお母さんたちが、協同してこの難事業を成しとげたという事実には、いかなる賛辞を捧げても及ばないと思います。

私たちは、この本を手にし、この本を子供たちに読ませる時、「これはお前たちのお母さんが、力をあわせて、自分たちの手で作りあげた本ですよ」と誇らかに話しかけることができます。

とはいえ、不馴れなお母さんたちの作った本ですから、体裁、内容等の出来ばえについては不安でいっぱいですが、何とぞ遠慮のないご指導をお願いしたいと思います。

最後に、表紙の絵を提供してくださった山下大五郎氏、この本を監修してくださった杉山、圭室、寺田三先生、及び発刊に力をそえてくださった藤沢市史編さん室の高野、阿部両先生、村岡小学校の諸先生、村岡地区のすべての方々に心から感謝の意を捧げます。

昭和四十八年六月十日

☆資料提供者
旧職員　卒業生　学区域居住者　ＰＴＡ会員　郷土歴史研究家　藤沢市史編さん室　藤沢市立中央図書館　鎌倉市立図書館　村岡公民館　村岡農業協同組合　村岡郷土史講座　村岡を愛する会　学区域寺社
その他多数の団体　個人の方々

☆編集責任者
藤沢市立村岡小学校ＰＴＡ会長
石井省悟

☆監　修
杉山博　東京大学教授
圭室文雄　明治大学助教授
寺田兼方　湘南学園教諭

☆編　集
「むらおか」発刊委員会
服部忠幸　西島絢子　今村久子
鈴野典子　志村延恵　茂木晴子
長田昭代　青樹久子　水野寿子
尾島澄子　小泉喜代子　橘川寿美江
広田和枝　宮井恵子

時代	西暦	おもなできごと
六～七千年前		**片瀬・御幣の台地にむらができはじめる**
大化元年（六四五）		大化改新によって相模国府ができる
和銅三年（七一〇）		奈良へ都がうつる（平城京）
延暦十三年（七九四）		帰化人がこの辺に住みつく
七～八世紀（九〇一）		京都に都がうつる（平安京）
天慶元年（九三八）		狐塚・川名横穴古墳群がつくられる
〃 三年（九四〇）		**村岡郷が定められた**
建久三年（一一九二）		**平良文鎮守府将軍として村岡を治める**
建保四年（一二一五）		平良文・宮前御霊神社・渡内日枝神社を建てる
嘉禄二年（一二二六）		鎌倉幕府ができる
正嘉元年（一二五七）		江ノ島が陸つづきとなる
文永二年（一二六五）		北条泰時・弥勒寺を建てる
弘安四年（一二八一）		北条時頼・御霊神社に葛原親王・高見王・高望王をまつる
元弘三年（一三三三）		北条時宗が法泉寺（今の法善寺）を建てる
延元元年（一三三八）		元寇
貞和三年（一三四七）		新田義貞・鎌倉攻めで村岡に放火
明応四年（一四九五）		室町幕府できる
永正二年（一五〇五）		弥勒寺・再建
〃 九年（一五一二）		北条綱成・天嶽院を建てる
天文年間（一五三二）		北条氏時が二伝寺を建てる
永禄年間（一五五八）		北条早雲・玉縄城を築く
天正年間（一五七三）		北条氏重・慈眼寺を建てる
天正十六年（一五八八）		高谷砦・二伝寺砦・御幣砦できる
天正十八年（一五九〇）		柄沢・大塚山にのろし台できる
慶長六年（一六〇一）		豊臣秀吉による検地
慶長八年（一六〇三）		秀吉によって玉縄城落城
元和二年（一六一六）		**東海道整備され藤沢宿できる**
〃 八年（一六二二）		江戸幕府が開かれ参勤交代はじまる
貞享元年（一六八四）		高谷に長福寺（今再建中）が建つ
宝永四年（一七〇七）		渡内に壺井大権現社（今は廃社）が建つ
享保十年（一七二五）		検地実施
天明三年（一七八三）		富士山が墳火・農作物に大被害
享和三年（一八〇三）		御条目がでる
嘉永六年（一八五三）		全国的な大ききんのため助郷免除の願い出す
明治元年（一八六八）		柏尾川大洪水
〃 二年（一八六九）		黒船がくる
		明治政府ができる
		助郷制度が廃止

今から何年前	時代	年号	村岡小学校のこと	村岡のこと
一一〇		五年（一八七二）		
		六年（一八七三）		
一〇〇	時代	八年（一八七五）	**学校の制度がつくられる**	
			村岡学校がうまれる（弥勒寺内、一時法善寺に移る）	
			校舎ができて移転する（弥勒寺五二六番地）	
				地祖改正・地券発行
九〇	明治時代	二十一年（一八八八）	学区変更じゃ村になる（弥勒寺・川名・小塚・宮前・高谷・渡内・柄沢）	
				東海道線藤沢駅ができる（一八八七）
		二十三年（一八九〇）	**教育勅語がだされる**	**大日本帝国憲法がつくられる（一八八九）**
		二十七年（一八九四）		**日清戦争（～九五）**
		二十九年（一八九六）	現在の場所に校舎を建てる（弥勒寺二九六番地）	
八〇		三十六年（一九〇三）	補習科をおく	
		三十七年（一九〇四）	**国定教科書で勉強・初代校長　沖山豊吉先生**	**日露戦争（～〇五）**

七〇	明治時代	四十年（一九〇七）	校舎増築
		四十四年（一九一一）	**義務教育が四年から六年にのびる**
			就学率一〇〇％の表彰
六〇	正時代	三年（一九一三）	校舎増築
		四年（一九一四）	高等科がつくられる
			尋常高等村岡小学校と改名
		十年（一九二〇）	理科室ができる
		十一年（一九二一）	校庭拡張・農業実習地ができる
		十二年（一九二二）	村岡尋常高等小学校と改名
			震災のため校舎の半分がこわれる
			相倉陪第・相地かけ名ける名
五〇		五年（一九三〇）	校歌ができる
		六年（一九三一）	
		十二年（一九三七）	
四〇		十四年（一九三九）	校旗がきめられる
		十六年（一九四一）	村岡村国民学校と改名・ついで村民学校とかわる
			国民学校とかわる
			電灯がつく
			第一次世界大戦（～一八）
			柏尾川の改修工事
			関東大震災
			産業組合ができる
			小塚トンネルができる
			世界中が不景気になる
			満州事変がおきる
			中国と戦争がおきる
			中小工場ができはじめる
			村岡市と一日市市と合併
			第二次世界大戦（太平洋戦争）～四五
			「日独伊三国同盟」ソ連と中立条約
			配給制度・徴兵令
			戦争が終わる
			農地改革が行なわれる
			新しい日本憲法ができる
一〇	昭和	二十二年（一九四七）	部落会を始める
		二十三年（一九四八）	藤沢市立村岡小学校と改名
		二十四年（一九四九）	給食場ができる
		二十六年（一九五一）	**六・三制で勉強　P・T・Aできる　校地拡張**
		二十八年（一九五三）	校舎改築・新しい校旗ができる
		三十一年（一九五六）	放送設備ができる
二〇		三十五年（一九六〇）	八十周年記念・校舎改築工事完了
			P・T・Aが表彰される
三〇		三十九年（一九六四）	校庭を広くし現在の大きさになる
		四十年（一九六五）	岩石園できる
			コロコロ山できる
		四十三年（一九六八）	体育館ができる
		四十六年（一九七一）	**鉄筋コンクリート四階建校舎ができる（第一期工事）**
		四十八年（一九七三）	**プールができる・百周年記念をする**
			新らしい校歌ができる
		四十九年（一九七四）	**第二期工事が完成する**
		五十一年（一九七六）	**第三期工事が完成する**
		五十二年（一九七七）	P・T・Aまつりが行われる
		五十三年（一九七八）	市内一のマンモス校となる
			新林小学校へ分かれる
		五十五年（一九八〇）	大鋸小学校へ分かれる
			酪農がはじまる。
			講和条約がむすばれる
			水道がしかれる
			区画整理はじまる・大工場ができる
			川名新道ができる
			村岡トンネル開通
			宅地造成はじまる
			村岡公民館できる
			小塚に国鉄貨物駅できる
			小塚地下道開通
			村岡市民の家ができる（五十四年）
			村岡中学校ができる

むらおか

初版　昭和四十八年六月十日　発行
改訂版　昭和五十五年六月十日　発行

編集者　藤沢市立村岡小学校ＰＴＡ
発行者　藤沢市立村岡小学校ＰＴＡ
藤沢市弥勒寺一―一六―一
印刷所　中央印刷有限会社
〇四六六―二六―五五一〇